

第17回 銀華文学賞発表

銀華文学賞

最優秀賞

「緋の滴」

世波貴子^{よなみ}

(佐賀県佐賀市)



第一七回銀華文学賞は、日本全国及び海外から、一九四篇の御応募をいただきました。まことにありがとうございます。外国を舞台にしたもの、また歴史や中国古典を素材にしたものなど、多彩で豊かな作品が集まりました。レベル的にも高い水準の作品が増え、選考委員一同どれをふるい落とすかに苦しむほどでした。例年より入賞、入選の数が増える結果となったことはたいへん喜ばしいことです。予選選考を経た作品の中から、大高雅博・八覚正大・小浜清志・五十嵐勉の選考委員による厳正な審査の結果、以下の通り受賞作が決定いたしましたので、ここに発表させていただきます。

作品は、誌面の都合により、今号は最優秀賞と優秀賞のみを掲載させていただきます。奨励賞などは次号以降にスペースその他の事情に合わせてつづつ掲載の予定です。

授賞式・祝賀会につきましては、他の賞との兼ね合いを見ながら考慮中です。

なお銀華文学賞は明年も同じ要領で年齢四十歳以上（応募時）とさせていたいただき、枚数、締切、審査料など他はすべて同じとして募集させていただきます。どうぞまた奮って御応募ください。心からお待ちしております。

優秀賞

「三蔵法師の鍋」

田名トモ (島根県出雲市)

「琉球の種痘」

成瀬健太郎

(神奈川県藤沢市)

「震災下の脳手術」

石垣麗子 (宮城県亘理郡)

「梯子の上のチベット」

遊座理恵 (東京都西東京市)

「線」

北島雅弘 (愛知県春日井市)

「クリスマスの御馳走」

鈴木和子 (神奈川県厚木市)

奨励賞

「捨てる神あれば拾う神あり」安芸木兎 (東京都墨田区)

「モンマルトルの空に」麻井さほ (神奈川県相模原市)

「振り返らない旅人」田村正勝 (神奈川県横浜市)

「魚影」室町 眞 (東京都町田市)

「月光」藤倉 涼 (静岡県三島市)

「昭和の恋」長野正毅 (東京都杉並区)

「ひずんだ道」木下衣代 (大阪府大阪市)

「元氣？」鐸木英莉 (福岡県福岡市)

「揺らぐ窓」梶川洋一郎 (広島県広島市)

「寡黙亭の面目」高橋惟文 (山形県山形市)

「看取り引受人」谷道俊明 (富山県富山市)

「毛虫のレラ」青木ガリアン (北海道札幌市)

「裸足のリナ」田中信子 (大阪府大阪市)

童話特別賞

「じはんき コンチェルト」いまだまりこ (広島県呉市)

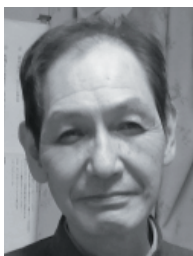
佳作

「揺れる木」	水沢 郁	「猫の代筆」	金城カナ
「祝舞い」	古岡孝信	「キツネ」	雲坂稜線
「マリア様の人形」	平山嗣人	「下曾我物語―小説・尾崎一雄と太宰治」	嶋津治夫
「女主人」	太田 悠	「臺灣奇譚」	里中一公
「HISASUKE」	七海 舜	「食い逃げ」	風樹 茂
「クルトの物語―東独の夢と郷愁」	矢口桃子	「真土騒動」	秋野成道
「愛・罌 序章」	古池麻矢	「セネガルの風に抱かれて」	葉月 舞
「蜘蛛の糸」	吉岡幸一	「アレキサンドリアにないものは」	有汐明生
「日々過ぎる」	平井文子	「淡雪」	折口 真
「狐狼の拳」	塩崎憲治	「リターンライダー」	宮 幸作
「透明な森」	蓮見 仁	「塩サバ弁当」	山田 明
「肝煎平吉の覚悟」	竹浪和夫	「涙がキラリ」	佐藤 勉
「プラタナスの抱擁」	寺木 仁	「さざれ石」	思水 申
「幕末二人のアウトロー」	米山哲雄	「放哉を編む」	足立悦郎
「君影村の娘」	泉水雄矢	「花の名前」	わかさきまこのぶ
「三木合戦・淡河城の戦い」	宮本義則	「奈落は巡る」	山本嘉彦
「指」	奥村郁雄	「靴を愛でる男」	坂元淳子
「柿」	とぐろかずまさ	「絶唱の行方」	依田 泰
「柩の中」	河田充恵	「ハシビロコウのキス」	白川計子
「遠い極楽浄土」	中田重顕	「ともだち」	待木 啓
「空へ、空から」	有森信二	「宙にさまよう」	桐原唯香
「落日のハمام」	菊野 啓	「沈丁花の穴」	虹乃ノラン
「邂逅」	飛葉哲朗	「夢は現か幻か」	崔宣葉
「士族の憂国」	笠置英昭	「青き日」	邑崎龍哉
「踊るピエロの小劇場」	山崎こうせい	「スパイクシューズ」	石川正美

選 評

ほとんどが優秀賞、奨励賞クラス

大高雅博



今回は、最終選考に残った作品を読んで酷く驚いた。ほとんどが、優秀賞、奨励賞クラスの作品ばかりだからだ。これは銀華文学賞を長年続けたことと、「まほろば賞」を主催したことが大きいかもしれない。色々な経歴の方の応募もあるようだ。

そのため、当選作などは採めるのではないかと思えたが、世波貴子さんの「緋の滴」がすんなり当選作となった。選者が全て高得点を投じていたからである。時代は明治だが、広く言えば、時代物になり、時代物での当選作は初めてとなる。画期的なことかもしれない。江戸時代、罪人の首打ち役、死罪の罪人の胴を使つての刀の試し切りを世襲としてきた家系の男が主人公である。剣術の腕もあり、安定した生活だったが、明治になり、首打ちが禁止と決まり、時

代についていけない男がいる。首打ちの時に、見学に来ていた絵師がいて、彼から、女の肖像を見せられる。それが、毒婦お伝であり、彼女が、最後の首打ちとなる。流れが良い。小説の題材としては、申し分がない。それに、彼の家族のこと「人胆丸」のことなど、細部も良い。この作品を女性を描いているというのも不思議だが、優れた作品だと思う。今回、僕が一番衝撃を受けたのは、優秀作北島雅弘氏の「線」である。食べることをやめてしまった男が、ついに一本の線になってしまふ。「線男」の誕生である。今までにこんな発想はあつたのだろうか、考えてみて、思い浮かんだのは、安部公房の「魔法のチョーク」なのだが、やはり違うので、北島さんのオリジナルだと思う。凄いのはこの「線男」をたとえば、アニメや実写でやるときにかなり表現が、難しいのではないかということだ。つまり、小説だからこそ作れるものを見出したということになる。これは蛇足だが、ある作家の小説が映画化され、小説の世界が完全に表現された時、それが成功と言えるのだろうかと考えるときがある。それでは小説を書く意味がなくなるのではないだろうか、小説でしか表せないものがあるはずだし、それが他のジャンルで簡単に表現されるとすると、それは小説家の敗北かもしれない。極論だが、小説には、独自性があるはずだという話だ。そういうことを考えるほど、この作品にはインパクトがあつた。「線男」は外に出て、結局、

公園のベンチに座り、まわりの時間が過ぎて遠くの未来までいくのだが、今回はそれでいいとするものの、「線男」には、色々な発展性が考えられる。たとえば、ベンチに座っていると、別の「線男」や「線女」がやってくる。彼らの間で何が起ころのだろう。または、どこかに「線男」や「線女」の住む町があるのかもしれない。他にも考えられるだろう。異例だが「線男」の第二弾を期待する。今のところ、北島さんしか書ける人はいないわけだから。

優秀作田名トモ氏の「三蔵法師の鍋」も驚かされた作品である。今までも、遣唐使ものは何作もあったと思うが、この作品が、最も優れている。三蔵法師やライバルの慧満禪師や、近くの高僧もよく書き分けられている。題名にもなっている三蔵法師の鍋についてもまったく知らなかったが、色々と丹念に調べられていて、それがこの小説の成功に繋がっているようだ。優れていると思う。

優秀作遊座理恵氏の「梯子の上のチベット」は、亡くなった妻のラインに男からのものが残っていて、当初はまたいつもの不倫ものかなとうんざりした気持ちがあったのだが、見事に裏切られた作品だった。不倫ではなく、ヒマラヤ登山の話になり、梯子の上のチベットという題名のような壮大な話になる。こういう裏切られ方は良い。

奨励賞鐸木英利氏の「元氣？」は、遠く離れた親友が、LINEを使って、やり取りをしているが、LINEの内容と、

現実が少しずつ乖離していくところが面白い。新しい試みだと思う。

奨励賞安芸木鬼氏の「捨てる神あれば拾う神あり」は、明治時代の料理人の話だが、明治時代の平均寿命が四〇代ということも含め、時代がよく描かれている。良い人情話になっている。

奨励賞青木ガリアン氏「毛虫のレラ」は青木さんらしいいい話である。ここには、アイヌ系、中国系、韓国系の子供たちが登場し、共生する必要性を説いているように思う。これから、もっと、それが必要になるだろう。最近、アイヌはいないという主張する人々がいることを知った。どうしてそんなことを言い出しているのかわからないが、歴史や学問を全く無視するようなことを本気で言い出す人がいるとすれば、薄気味悪い話だ。

佳作の邑崎龍哉氏の「青き日」は、中国の西、ウイグルにある砂漠地帯にあるらしい丹沙での発掘を描いているのだが、そのマイナー性に興味を持った。ひよっとしたら、作者の実体験が、反映されているのではないかと思った。小説としては、丹沙に絞って描いた方が良かったかもしれない。暑さ、喉の渇き、砂の感触など、もっとそういうものが読者に伝わってくるような、血の通った物語ができたかもしれない。

佳作の菊野啓氏の「落日のハمام」は、銀華文学賞始まつ

本年は、銀華文学賞としては、満足できる年となったと思う。これが続いてくれることを願うばかりである。

層が厚く読み応え

小浜清志



今年は層が厚く読み応えのある作品が多かった。当選作になった「緋の滴」はほぼ満票に近い点数で他を寄せ付けなかった。明治の初めの死刑執行がまだ斬首であった時代を描いて見事な出来映えであった。

他に気になった作品をあげる。

「梯子の上のチベット」死んだ妻の携帯電話が鳴り、連絡漏れの誰かがラインをしてきたのかと思ひ携帯を開いたことで、妻の浮気を知る羽目になる。友人に相談してもそんなことはない否定されるが疑問は膨らむばかりであった。それから、ヒマラヤに行くことになり壮大な景色と優雅な生き方をしている人と出会ったりして宇宙を見た気になる。帰国してすぐに妻の浮気相手と会うつもりで出かけたが家はなくなっていた。隣の人に話を聞いてすべてが思い違いであることに気づく。いい作品であるが、ヒマラヤ

第一七回の銀華文学賞は、昨年よりさらにレベルが上がり、いつもの確かな充実感を覚えた。一昨年の第一五回で二〇九篇の応募があったとき、選評で「層も一段と厚くなり、読み応えがあった」と記している。また昨年の第一六回で「最終候補に残ったのは、読み応えのあるも



五十嵐勉

創作パワー全開

体内に入れないが、息子や夫のために料理は丹念につくる。食えない食事を作る妻を夫は気づかってくれる。素材としては良い作品なのだが展開の仕方が曖昧すぎて素材を活かしきれなかった。

「靴を愛する男」婦人靴売り場は自分にとって癒しを得られる空間だ——という男の物語は最初は軽快であったが、後半に破綻してしまう。靴が足首を締め付けるという発想はあまりにも安易である。

「孤狼の拳」この作者もかなりの筆力をもっているが、今回は筆力だけに頼った作品になってしまい惜しいことである。

を持ち出したことで逆に小粒になってしまった。

「震災下の脳手術」東日本大震災が勃発した日に夫が脳腫瘍の手術をする予定であったが、手術どころではないことが次々と起こる。非常事態。家族の安全を確かめるために車を出して走らせる。すべての明かりが消えヘッドライトだけを頼りに進む描写など体験した人でなくては書けない部分がいくつも出てくるが、小説という枠で考えるなら事実を積みかさねるだけではない深い掘り下げも必要だったであろう。

「クリスマスの御馳走」夫が前立腺癌と診断され子や孫たちも交えた闘病記である。文章の乱れもなく夫が病に犯されていく過程が克明に描かれていて、実際にあったことだろうと推察した。死んだ夫を忍ぶように優しい筆づかいで書かれていて読後感もよかったが、あまりにも美しく思いうれしさを残そうとしているところが少し残念だった。夫は死に向かっているわけだからもっと暗部があるはず。

「寡黙亭の面目」の作者は過去に当選作をかけたこともある実力者であるが、今回は小手先でさらりと仕上げたという出来映えになっていてとても残念であった。もう少し吟味してつぎの作品に取り組んで頂きたい。

「ひずんだ道」自己免疫疾患がどのような病気なのかかわからないが、一日二時間の歩行、青汁と塩水を決められた量を毎日続けることが治療であるという。固形物はいっさい

銀華文学賞選考委員プロフィール

大高雅博

おおたか まさひろ

1954 石川県生まれ 日大国文学科卒
80「旅する前に」で群像新人長編小説賞受賞
他に作品「跡地の王」、共著「トライ・トゥ・リメンバー」など

八覚正大

はっかく まさひろ

1952 東京生まれ
早大理工学部数学科・都立大仏文科卒
91「十二階」で新潮新人賞受賞 文芸学校・NHK 学園講師 主著『「シェルター」発』（けやき出版）『夜光の時計』（新読書社）詩集『朝一の獲物』『学校のオゾン』（共に洪水企画）

小浜清志

こはま きよし

1950 沖縄県生まれ
劇団四季など様々な職を遍歴
87 作家中上健次に師事、マネージャーを務める
88「風の河」で文学界新人賞を受賞

五十嵐勉

いがらし つとむ

1949 山梨県生まれ 早大文芸科卒
79「流謫の島」で群像新人長編小説賞受賞
84-90 タイ在住、カンボジア問題取材「東南アジア通信」「ASIA WAVE」編集長
主著『緑の手紙』（インターネット文芸新人賞）・『鉄の光』『ノンちゃん、NONGCHAN／聖丘寺院へ』『破壊者たち』

入選

「沙耶と黒猫」 土屋 慶
「異界の人」 谷口俊明
「尼僧峰隣」 行久 彬
「萌羽のいた径」 小山内達雄
「紫炎の如く」 祐紀 生
「草に抗う」 富井ひとみ
「六人の縄綱い」 齊藤宏壽
「プールサイド」 牧 康子
「実録・いまどきのがん治療事情」 吉澤 久
「母は三度夜汽車に乗って」 今井清賀
「虚空行路」 沢田進二＋
「座鏡」 シュウ・アマノ
「初潮」 吉田繁夫
「心」 友 修二
「銀杏紅葉」 小倉孝夫
「素数ゼミ」 貴峰 彬
「恥」 後藤克之
「ビバーク」 片岡 真
「開かずの間」 鹿石八千代
「鍵」 宮脇すみれ
「濃霧」 東間征子

作家集団「塊」新メンバー募集中

連絡 090-8171-9771

※今回も力のある作品が多かったため、入選として賞揚させていただきます。 10

のばかりだった。年々全体のレベルが上がっていることを感じた」とある。しかし今年はさらにいっそう多くの優秀な作品が集まり、充実感が増した。他の賞にも応募しているような強者が集まってきた観がある。最終選考の5点評価で優秀賞に値する4点以上は昨年一七篇あったが、今年は一六篇でほぼ同数、奨励賞に値する3点以上の作品一二篇を合わせると二七篇で、最終候補四〇篇のうちの三分の二を占めることになる。実際は他の選考委員との協議で細かい落とされざるを得ないのだが、これだけのいい作品が集まるということに、四〇歳以上の潜在的な創作パワーを再認識せずにはいられなかった。初めて応募する筆者も多く、新顔が半数以上を占めている。

逆に昨年、一昨年において、当選したり、優秀賞になったりした作者のものも、新しいパワーの作品に押されて、後退する現象も起きている。少し力を抜いたり、甘い筆になったりすると、トップグループから脱落することも、やむを得ない現象として受け入れざるを得なかった。短期間に優れた作品をそう多く書けるわけはなく、コンスタントに執筆生産することは難しいことにはちがいないが、厳しい現実を練磨の砥石として、精進してもらいたい。

今回のもう一つの傾向としては、歴史や古典に依拠した作品が多く、上位にもそれが反映されたことにある。

私が5点満点を付けた最優秀賞作品、世波貴子氏の「緋

の滴」は、明治の最後の断首執行という特殊な題材を選んでいる。歴史小説、時代小説としても分類できそうだが、よく調べた歴史事実の上に、首を切り落とす衝撃的な場を、真に迫る力を漲らせて再現しているところに、強いインパクトを生み出している。女性はこのいう題材は避けがちなのではないかと私の偏見を見事に覆して、生々しく蘇らせている。高橋お伝への人間としての掘削がもう少し深くてもよかったかとは思ったが、斬首死刑の最後という歴史の変遷の陰に、それほど違和感なく最後を結んでいる。歯切れのよい明確な文体も、この内容に合っている。切れ味鋭く、しかも鈍重な読後感を残していた。

優秀賞の成瀬健太郎氏の「琉球の種痘」は、沖縄から初めて天然痘の脅威を取り除いた種痘導入の経緯を生き生きと描いて、歴史叙述の確かさを備えた好短篇になっている。沖縄の風土にしっかり根ざし、しかも幕末からの西洋の進出とその医療文化の伝播を踏まえて、本土内地とは切り離された形での種痘の導入には、鮮やかな人間ドラマが展開されている。当時本土よりも先にヨーロッパの文化が伝わり、その情報を摂取している一面も新鮮に映った。沖縄でなければ書けない題材をしっかりと形にしていた。

田中トモ氏の「三蔵法師の鍋」も歴史小説である。唐への留学僧「道昭」を軸に、当時の唐の仏教事情が活写されている。よく調べてあり留学生事情や長安の都の様子が生

き生きと伝わってくる。人物も社会の様子も、鮮やかに生きて動いているのが、この小説のいいところだろう。また三蔵法師が西域旅行の苦しい時代を通して大事にしていた「鍋」を、この作品の重心に置いているのも、全体のストーリーに焦点を結ばせている。バランスよく古代の唐留学生の世界を再現している。

石垣麗子氏の「震災下の脳手術」は、まさに手術をしようとしていたとき東北大震災に襲われた三・一一の一面を克明に記録している。緊急状態下の手術事情が、いっそう緊迫感を高め、震災の被害を鮮やかに浮かび上がらせる。震災の小説はかなりあり、それぞれにリアリティを持ったものとして読んできたが、この作品の切迫感ほど切実な危機感を持つては迫ってこなかった。貴重な生きた記録として残す代表的作品になる。技巧を使わない、質朴な文章が、現実をそのまま伝えていて、迫真力を投じてくる。

同じく優秀賞の遊座理恵氏の「梯子の上のチベット」は、亡くなった妻の浮気への疑いが、スマホから相手の住居を訪ね、障碍者の部屋に繋がる梯子からチベットの空間にまで及んで、愛情の宇宙的結像に至る、壮大な世界観に迫ろうとした意欲作である。そのスケールの大きさは比類のないものだが、妻の身体障碍者への献身が、一気にチベットの宇宙世界まで広がり、実際にそこへ赴くのは、世界が広がり過ぎて無理がある。チベットに行かないで、その壮

な宇宙観と性愛観を結像させる方法はなかったか、もしこの空間世界を真に表現するのなら、長篇に挑むべきところだが、五〇枚という制限では、難しいことになる。惜しまれる着想ではある。

今回最も注目された作品は北島雅弘氏の「線」である。これは「生きていることが苦しくて」食べられなくなり、やせ細って「線」になった男の物語で、この男から見た世界の現実が逆説的にクリアに浮かび上がってくる。ここまでは極端に変身させた着想は、奇抜を超えて画期的であり、今後何か大きく展開できそうな可能性を孕んでいる。予選では最高点が付けられていた。惜しむらくは、イジメとか孤独とか、線の消極的な領域で留まっていることである。

この筆者が「線」のむしろ積極的な領域に気が付き、それを大胆に世界の矛盾面に突き付け、活躍させていったら、痛快な展開が期待できるだろう。「線」には太さも面積もない負の属性があると同時に、領域を「分ける」とか、「区別する」とか積極的な属性もある。これを現代の国境問題や紛争などの舞台で活躍させたら、ひじょうにおもしろい働きが期待できるし、重要な提起も可能だろう。パレスチナの問題も「線」の活躍する舞台になりうる。筆者の着想の拡大に期待したい。

鈴木和子氏の「クリスマスの御馳走」は、よくある癌の闘病記と言ってしまうばそれまでだが、ひどく素直に緻密

に明るく書いてある点が、希望に繋がる虹の橋のような趣を醸している。癌患者の最期を看取る眼差しに深い愛情と温もりがあり、ストレートに命を抱擁し、見送る姿勢に、未来がある。こうありたいという一つの理想的送りが結像していると思った。

奨励賞にもいい作品が目白押しで、「捨てる神あれば拾う神あり」(安芸木鬼)は、ありきたりなタイトルが不満だったが、失職した老後の父親と料亭の女将のひよんな助け合いが温かく描かれていて、救われる。「モンマルトルの空に」(麻井さほ)は、フランスの友人の同性愛の心情が色濃くリアリティをもって描かれていて、一つの深い世界の存在を訴えている。同性とか異性とかを超えた愛情の純粹な可能性が示されていた。「月光」(藤倉涼)は、孤高のジャズピアニストとその酒場の愛人の人物像が際立っていて、芸に身を捧げるような生き方に独特の香りがある。鍵盤に両手を乗せたまま死ぬラストシーンは芸術家の理想の死に方で、一つのパターンを追っている典型化は免れないものの、そこに顕現させた手腕は、確かな芸を感じさせた。優秀賞でもおかしくなかった。

高度経済成長期の企業の海外進出を舞台にした「振り返らない旅人」(田村正勝)は、取引先相手のマレーシア人の友人との友情を自然に素直に書いていて、外国人と交わる可能性とその真の絆をしっかりと書きあげている。重要で

あるにもかかわらず、こうした外国人との人間としての交わりを書いた作品は意外に少なく、その点でも特に評価した。外国人を人間として受け止め、描くことは、されているようできわめて稀有で、この作品に残る「エディラ」は日本人の胸に深く残る人間像を刻んでいる。タイトルは一考してもらいたい。

「魚影」(室町真)は、観光業界の盛衰を的確に捉えていて、時代の移り変わりと、そこで浮沈する人間像を見事に表していた。八〇年代、九〇年代は航空業界の席の確保に旅行社が大きな力を持っていたが、コンピュータの普及によって、直接航空会社が予約を受け付けるようになり旅行社が破綻していく過程、そしてまたその変化にうまく適応して、時代を先取りして乗り越えたように見えた者も、コロナ禍という情勢のために結局やはり沈んでいく状況が、この業界に関係した者でなければ見えない洞察の上に的確に描かれている。観光業に集まる客層が「魚群」「魚影」として象徴されているのは必ずしも適切ではないかもしれないが、一つの世界と時代をよく切り取ったものとして、私は評価した。こういう時代表現はなかなか出てこないものだが、やはりだれかが書いておくべきだろう。筆者の果敢に挑んだ姿勢は、確かに時代を抉っていた。

定年退職した教職者の心の揺らぎを描いた「揺らぐ窓」(梶川洋一郎)は、死んだ娘とバス通勤のなかでよく見か

様々な小説の豊かさ

八寛正大



夏の猛暑酷暑酷暑炎暑、それが十月に入るまで続き、それから急に気温が落ち、また好天が続く……そして急に晩秋に……昨年と似たような軌跡をたどりつつ、でも今年の方がさらに暑さが続いたような——という昨年の選評の出だしを読み返し驚いた。ということとは、え、こんなに暑くてへばったのは人生初めてと思つたら、昨年とも一昨年もそうだったとは！

プーチン・ロシアの侵略戦争も延々と続き、おまけにイスラエルとパレスチナがガザ地区で悲惨な戦火を繰り返す、アメリカ大統領選は、予想はされていたにもかかわらず、有罪を宣告されていた者が返り咲いてしまった。良い悪いではなく、その事実が現前にある。遠いギリシアの都市国家での直接民主制はさておき、膨大な人口を擁する近代国家は、間接の民主主義選挙に頼るしかない。一票の重さが選挙区で異なるとよく取沙汰されるが、我々の持つ一票は、実は形式的平等に過ぎず、人格的重さの違う一票なのだ



ける若い娘とが重なってそれが生き生きと動き始めるストーリーが空想と現実の境を曖昧に溶かして、新しい世界を喚起してくる。過去とないまぜになって伸びていく心理の蔓が、老いの新たな生命を匂わせるところに不思議な味わいがある。

「寡黙亭の面目」(高橋惟文)は、居心地がいい料亭でありながら喋らない主人の過去の秘密に触れていくストーリーが軸になっている。彼の思いやりのある行為に触れ、それが明らかにしつつ、店主の心の屈折を溶かしていく結末に、和やかな未来が漂う。高橋惟文氏ならではの温もりが包んでくる好短編になっていた。

総じて、熟年パワーの全開した第一七回銀華文学賞だった。新たな筆者群が加わって、いっそうパワーを増している。新人賞顔負けの、まったく新たな着想も光った。潜在的な力はずっとありそうである。次回も大いに期待したい。

……が、それを個別に計る計量器などはない！

逆に日本のことを我々は癒着だ、遅れている……と揶揄しながら、それでもどうにか、今回の選挙では大きく政治が金権を抜け出せそうな方向——への期待を持たせてはくれる（ただ日本人の多くは権力との直接の闘いは避け、事態が変化してから後付けで批判する「共同体的事なかれ」の気もするが……）。

おっと、文学で政治と宗教の是非を語ることは避けるべきだった。むしろどんな政治になってもまた宗教も、人の脳内をコントロールしてはならないのだ。そして思考思索こそ、人間の主体的自由を行使できる唯一のものなのだ。

こうして文学に志す人々こそ、人間の尊厳を守ることに気づき、大切な価値ある時間を生きている同志——だと思ふ……そんな作者たちに敬意を払いつつ、今回も読ませていただいた。

「緋の滴」「南無阿弥陀仏——」唱え終わった時、首は落ちていた。筵の上に転がって、なお微かに唇が動いた。漆喰に群れ咲く曼殊沙華の花を描いて、鮮やかな血飛沫が広がる。切っ先が弾いた砂が、その上にぼとりと落ちた。（仕損じた——）吉亮は目を閉じた。無心に振り下ろしたはずの剣に、動揺があった。この出だしのインパクトは中々のものがあつた。山田吉亮、二十代後半の主人公、彼は徳川の世が続いていれば、代々続く武家の誉を背負い続けて

行くはずだった。しかし新政府から拝命したのは囚獄の「首打役」だった。

剣術で鍛えられた歳の離れた兄との久方の稽古で彼の力の衰えを知り、やがて盗賊に殺されたその兄の後始末（家の面目を守るための隠蔽）をする。首の切られる瞬間を見たいという絵師との関わり、医者との関わり。刑死者の死体から取った肝は人肝丸と呼ばれ薬になったので山田家にかつて富をもたらしたという話（これは後半にも「ぼとり」という音と共に、肝が吊るされ干されているシーンが出て来る）。竹橋事件における首謀者たちの銃殺との違い……そして最後に、嘘で塗り固めた言い逃れの揚げ句、重罪の死刑が宣告された高橋伝の首を打つことになる。（斬首は、正式に廃止と決まった。どうやら、高橋伝は、斬首された最後の刑死者となるようであつた）と。

とにかく文は流れていて随所に読ませ所がある。地の文の描写がいい。会話も見事に噛み合ったやり取り……。時代の推移、その中で山田家の位置、そして絵師（芥川の「絵師良秀」を連想させました）や医師の要求、そして今の時代にはない残酷な仕事の役目……まで見事に描き尽くしていると感じる。当然の当選作と感じられた。

ただ、ふり返ってみて、微かな疑問が湧いては来る。伝が最後「会わせてー」と言った男を、「会わせてやろう……この世ではないがな」と騙すように受け流し、おぞま

しくもこれが己の務めであるとして、伝を斬首し……ラストで絵師から貰った伝の画をみて、「懐かしい女に会うような心持ちになった……」と昇華された心象が描かれている。しかしこの主人公が、どうしてそんな達観した気持ちになったのか……役職、正義感だけでそこまで悟れるのか、少し謎ではある。曼殊沙華で浄化させてしまったかのような……。

「琉球の種痘」一言で言えば、琉球の医者、天然痘が流行った時、在住していたイギリスの医師に会いに行き、牛痘法の種痘を知り、苦勞して効果を確かめ、人々を救った話だ。しかし、描写がよく実に読ませる。読ませるだけではなく、感動を齎す、そして人間の不撓不屈の精神を（見直させる）。

（一八四八（嘉永一）年——。……まもなく還暦を迎える琉球の首里王府に仕える医家の仲地親雲上紀仁は身震いがおき、慌てて襟元を合わせた。……病苦に喘ぐ病人に誠意を尽くして治療してきた自負はある。だが、……流行病の疱瘡（天然痘）には得心が持てないまま対症療法ばかりで済ませてきた」と。その彼が知り合いの医家の幼子を手助けすることができず、無念の思いをばねに、在住していたイギリスの医師ポーテリンに教えを乞い、牛痘法を試みようとする。しかし東奔西走するも牛は見つからない。またノ口信仰なども根強く足枷になる。それでも幼い子を何人

か連れ、やんばるの地に踏み込み感染した牛を見つけ、ついに種痘の発現に辿り着く。何度か評者は読み返した小説だが、そのシーンには毎回込み上げるものを禁じ得なかった。その地に近づいたシーンと、種痘の発現した箇所、の二つを引用しよう。

（仲地は穏やかに広がる海を眺めた。海には表情があり、どこまでも広がる。水平線の彼方にはいつも新しいものが見つかる、と期待させるものがある。とはいえ……仲地はかつて嵐に遭い薩摩にまで流され辛うじて生き延びたことがあつた。しかし、山はことに低い山は無愛想で、ただぼうぼうとした緑の固まりであるが、海に比べると親しみやすい。……）沖繩のヤンバルの見事な描写だ。そして、

（三日後の朝だった。いつものように仲地はヒコラとミノルの腕を手にした。震えた。祈った。……それらしい兆候さえ見当たらなかった。……翌朝は逸る気持ちを抑え明るくなるとヒコラとミノルを呼び寄せた。……「そうだ、あの小さな紅いものが発痘したものなのだ。春になってようやく芽をだしたばかりのようなものだ。そうか、見えたか」仲地は胸の裡から湧き上がる歓びに震えた。その感動は部分的な抜出しでは伝わらないもどかしさがある。これも当選作で良かった気がする。

「線」（僕は生きていることが苦しくて食事が喉を通らなくなった。……僕は少しずつ痩せ始めた。はじめ五十数キ

口あった体重は、五キログラム減り、十キログラム減り、……僕はついに一本の黒い線になってしまった。もう僕に体重はない。僕は軽々と、出歩くことができるようになった」と。そして友だちと出会うが、その時の自意識は面白い。きみは何を分けるのか、(自分と、自分でないものとしての自分)はどう? あ、でも待てよ。自分自身が線になってしまったのは、自分はただ分けるものであって、『自分』ってないわけか」と友に問われ、そう言われると確かに僕は「自分」がないような気がした。それから色々な相手や状況に出会う。セックス、先生の話、それから公園にいるようになり、そこで少女に出会ったり、はじめの現場に遭遇したりする(ここでの描写はなかなかのものと感じられる。そしてその少年の手記を読んだりもする)。ラストは線のまま、百年千年一万年経った……と終わる。発想も面白く最後までそのスタンスは貫かれ、会話その他描写も読ませる寓話になっている。ただ安部公房の『棒』という短編もあり、また後半は線というより公園の木になった感がある。そこから現実にごうコミットし得るか……評価の別れる点だとは思われる。

「震災下の脳手術」 3・11の東日本大震災と、夫の脳瘤の手術が重なってしまった女性の話——大震災から大分経った。しかし当時の傷は損壊した原子力発電所の問題として大きく尾を引きつつも、一見その後の政治やコロナの

災害などにより、見えにくくなってきた感はある。しかしこうして臨場感あふれる状況の再現を読むと、いかに大変な事実が付きつけられていたのか思いを新たにする。(里子は身長百八十センチ、八十キロの敏夫の肩を組んで、一段、また一段、階段を降りた。火事場の何とかなったもので、自分のどこにそんな力があるのかと思った。……震災か、脳腫瘍か、どっちかにしてくれ。なぜ、一度にこんな苦難が押し寄せてきたのか)と。そして三月二十九日、震災後の手術室復旧の一番乗りで手術を受けられることになる。それは人生の中で一番長い一日と感じられた。それもむなく半年後夫は亡くなるが、今では幼かった息子も高校生になり、また当時手作りのメッセーじカードで励ましてくれたナースを思い出したりし、主人公は気持ち立ち直らせて行く。事実の重みがよく伝わってくる作品だ。「梯子の上のチベット」 主人公の妻が急死する。子どももない夫婦だった。その妻はフルタイムで働く薬剤師で忙しく、夫婦の会話はなくなっていた。葬儀も終わり一段落した時、妻のスマホが鳴り、ケンという男性から、檜ヶ岳で会おう……という内容のメールが入ってくる。そこで主人公は亡き妻が浮気していたのだと思い怒りを溢れさせる。登録されていた男の住所から、そこを訪ねてもみる。しかし分からない。それからヒマラヤへ行くことになり、そこで敬虔な念に打たれ、また同行した者の話も聞く。帰っ

て来て、実はケンは妻のクライアントであり、わざわざ葉を届けに行っていた相手だったと分かり、愕然とする……。話の作りは面白く、読ませる小説にはなっている。ヒマラヤでの高校生の息子を事故で亡くしたという同行者の話も面白くはあるが、その後の説明が冗長な感があり、タイトルもちよつと牽強附会な感があった。

「三蔵法師の鍋」 遣唐使の話と思って読み進めたが、人物が時を超えて「生きて」いる。滑らかな文体で、しかも説得力がある。話は遣唐使として唐に向かった道昭、幼い定慧、年かきの覚勝の主三人のその後、特に道昭の視点で描かれている。彼は三蔵法師に逢い、教えを乞う。しかしその三蔵法師が、これほどにと感じられるほど、飄々として人間的に描かれている。(国禁を犯してひとり砂漠に出たという豪胆さはそこになく、きぶくれた細い体が動きにくそうに座っていた。長病みで声は弱く、まぶたは重く疲れていたが、その端正な面立ちには、ある種の清らかさがある。)そして道昭は法師に勧められた慧満禪師にも教えを乞い、のちに法相宗の開祖となった窺基とも親交をもつ。「なに、長く座ったからどうというものでもない。尻にたこができるだけだ」そのように言う人間味のある師は、最後に道昭に鍋を渡す。「わたしが生死の境にあるとき、これをたずさえた人がむこうからやって来て、梨の羹あつものを作ってくれた。持ちはこびがよいから、もつて

お行き」……「おまえが凍えた人に粥でも作ってやれば、わたしが西方を旅したことも無駄ではなかったと、慧満に言ってやれるだろう」と。そして、ラストの描写はまさに感動的だ。(道昭が袖ごと底を持って抱きよせると、鍋は袈裟にふれ、かすかな音を立てた。……春の陽光をうけた金物は人肌にあたたく、ふしくれ立って割れた手指をいたわるように熱がつたわってくる。身は削げ、かわききった道昭の体からこぼれ出る涙を受け止め、鍋は瑠璃色に輝いていた)と。時を跨いだ臨場感が見事に伝わって来た。「クリスマスの御馳走」 夫が前立腺癌になる。そして骨に転移している。夫は幾つかの治療の後、亡くなってしまふ。ある意味、そのプロセスに破綻はなく、淡々と看取って行く感じではある。それを恨むどころか、夫の我慢によって妻の主人公は支えられたという感謝の念が尊い。看病の中で、(夫のおならの音と私の笑い声が交互になり、それまでのこだわりが吹き飛んだ……新婚の頃、夫は煙草の煙で小さなドーナツを作ってくれたものだった……まるでボンボン船みたいだった。……夫の咄嗟のユーモアはいつでも私を笑わせてくれる。……夫の下世話ができることが幸せだった)とある。寄り添い生きる命の意味が鮮明に描かれている。

「昭和の恋」(1960年代の私立小学校には、日本人と西洋人のあいだに生まれた学童が、学年を超えて何人かい

た。性別を問わず、彼らは拔群に容姿端麗で目立った。」この二行が、ほとんどこの小説を象徴していると言える。主人公は、米国と日本のハーフである女子（すでにモデルの仕事もしていたにぐいぐいと惹かれて行く……「ウォーカー・ブラザーズ（のスコット・ウォーカー）」を知っているという一点で繋がりをもち、一心に片思いを募らせていく……回想小説として纏まっているし、歳の近い評者は共感を禁じ得ない。作者は実に上手い〈情〉の作り手「ジョー・メイカー」と呼んでみたい（笑）。

「毛虫のレラ」〈礼来は人より毛深い。小学五年の女の子にとって毛深さは深刻な悩みだ〉と。彼女はそれ故、ある種のいじめに遭う。その友人の女子が変わっていて毛虫が好きで、そんなことは気にせず、それが救いともなる。ある日主人公は母親に確かめると、父親がアイヌにルーツを持っていたこと分かり、生まれて来なければよかったと叫んでしまう。それでも担任の女性教師の計らい、また毛虫がアゲハに成長する姿などを介して、立ち直って行く……暖かく希望もあり読ませる小説だった。少し、「醜いアヒルの子」を連想もしたが。

「元氣？」 高校時代知り合い友人になった者同士の、大人になっても続くライン交換日記。ライン部分を太字で書き、それに対する主人公の内面も続けて記している。ちよつとした新しい試みに感じられた。しかし、一方は認知症に

スを頼んだのに店が間違つて、ヌードルも持ってきてしまい、二人して両方食べた「おいしかった昼食」は伝わって来た。しかし帰国後、エディラの事故による訃報に接する……。〈やはり心は持つていても伝えなければ幸せは来ない〉と。まさに「通信」に関わった作者の、コミュニケーションの本質を射抜いた言葉かと感じられた。

「捨てる神あれば拾う神あり」 明治の終わりの新聞記者から見た時代と、板前の人生を送ったその父親の話。妻を亡くしてから塞ぎ込んでいた父親は、とある小料理屋の若い女将に拾われて、板前人生を復活させる。時代の大きな状況と、実生活をしている庶民の生活が交差し、一気に読ませた。作品末に資料として当時の平均寿命の表が載っていたが、何と男女とも約四十四歳だった。

「魚影」 この常連の作者は毎回発想を変え工夫を凝らし投げ掛けては来る。今回は、かつて旅行会社勤めていた主人公。リーマン・ブラザーズの経営破綻があり、日本経済が大打撃を被ったその頃の話、かつての部下からゴルフコンペに誘われる。そして様々な回想が語られていく。ゴルフコンペに参加した仲間と新たに会社を興した者もいたがやがて倒産する。タイトルは溪流で見かけた紅鮭に喩えて、川でどのような泳ぎをすれば渡っていったのか……という主人公の思いから来ているようだ。

「裸足のリナ」 バングラデシュの貧しい女性たちの話。

なり、もう一方は最後、夫と別れてしまう。その不遇な末路がラインでどこまで表せたのかは、いま一つ伝わっては来なかった。むしろ、「たすけて」の一言で、飛行機に乗って駆け付ける、そんな行為をさせたのが何なのか——を中心に描かれた方が読ませた気がする。言葉への考察も描いて欲しかった。

「揺らぐ窓」 足掛け四十年の教員生活を経た主人公。定年退職しても県協同組合の専務理事になり、身体的にもそれなりに若々しさを保っている。話は出勤途上のバスの車中での様々な回想。眠気に誘われうつらうつらするが、はつと目覚めると大学生で亡くなった娘を思い出す。そしてバス通勤の中で〈若い一人の娘と、静緒（亡くなった娘）とを重ね合わせて夢想するように〉なる。そればかりか、ミュージアムを見たせいで、ハル、そしてナツと彼女に命名し、少しストーリーっぽくもなる。でもさすがに目が覚めて現実に戻る。夢想が奔走しそうになる所など、けっこう読ませるものとなっている。

「振り返らない旅人」 工業高校から通信社に入社し、そこからマレーシアに派遣された主人公の話、一九六〇年代のこと。警察の通信保守課に関わった三十歳ぐらいのエディラという中心的人物と仲良くなる。それらが瑞々しい筆致で描かれ、主人公の青春の輝きとなって伝わってくる。色々面白いエピソードはあるが、中でもフライドライ

媚婦の烙印を押されて、なお出産する現地の女性……。当地のことはよく描かれているとは思ふ。〈結局は……また新しい死が産み落とされるだけよ。それは苦しみでしかないわ……〉とリナは弱々しい声でいったと重くインパクトのある言葉ではあるが、「わたし」がどういう関係をもつ立場なのか、ガラス越しに眺めているような感じがした。「月光」 音楽に身を捧げるピアノ弾きの男との出会い。音楽バーの描写は中々読ませ、彼に心酔した若き主人公。ピアノ弾きはアル中で、やがて死んでしまう。それでも愛する女性はいて、彼女は身籠っている。主人公の思いの強さは分からなくはないが、ピアノ弾きの何に惚れたのか……その理由がいま一つ伝わってこなかった。

「ひずんだ道」 自己免疫疾患で、診療所に通う女性の話。主人公は毎日食べ物のことばかり考えている。見知らぬ場所へ孤立感に苛まれる心境が良く描かれている。食物に溢れた飽食の時代、そして食事は何をつくれればいいのか——という強迫感に囚われる時代、そのアンチテーゼは感じられるが、主人公の内的感覚だけにとどまってしまっている。かつて「人はパンのみに生きるにあらず」と言われたことがある、その逆の視点からの、拡がりのある小説を構築してもらいたい気がした。

「看取り引受人」 転職して十年の五十歳男性が主人公。私大を出て地元の化粧品メーカーに就職したが、満足の

く成果を出せず印刷会社に転職、しかし穴が空いたような心境。週に一度気分転換に近くの天然温泉に行く。そこで老人とその娘に出会い、看取りを要請される……やがて人物を認められ、その保養施設の施設長になって欲しいと言われる。偶然の運も含めた一つの人生は描けている。

「寡黙亭の面目」 銀華文学賞草創期からの書き手。設定された場で人情の機微を、明るく描く名手。今回はJR水道橋駅前の白山通り裏「居酒屋 かすみ亭」が舞台。極端に無口な主人と、フリーライター^の山田が中心。色々話はあるが、ちょっとミステリアスなのは、朝の出勤時間帯に若い女性たちの謎の出入りはなぜか？ それは埼玉や千葉から神田に来る派遣社員の女性たちで、出社前に「かすみ亭」で身支度をさせてもらうためだったのだ。苦節を営めてきた主人の弱者への「優しさ」が光る。

「踊るピエロの小劇場」〈俺も四十を超えておっさんと呼ばれる年齢に差し掛かった。思えば、ずい分と遠回りの人生を歩んできたものだ〉。そう引き籠りの人生だったと主人公は独白する。ピエロに導かれて、自分の過去のような話をその小劇場で見る、そしてまた街へ歩みだそうとする。設定は新しいとは言えないが、過去の回想などは良く描かれてはいいる。

「青き日」 ユーラシアのど真ん中で、遺跡発掘調査に挑む男性の話。ただ彼はロマンを抱えつつ、四十代に差し掛

終わるところは、少し拡散してしまった感がある。

「靴を愛する男」 小さい頃から「くつお」とあだ名で呼ばれた靴フェチ男の話。法学部の助教授にはなったが、秘密の部屋を持ち、孤独な夢想に耽る。最愛の靴を関わった女に盗まれそうになるが、靴そのものが抵抗し主人公を離れない……面白く作られているが、さらなる展開を読みたい気がした。

「花の名前」 妻を亡くし、退職もし、自らも胃がんになってしまった男性。青年の頃別れてしまった父親にも再会し、自らの人生を振り返りつつ、どこか達観した気持ちになって行く……人間の晩期がそれなりに良く書かれている。

「下曾我物語―小説・尾崎一雄と太宰治」 「暢気眼鏡」で芥川賞を貰った小説家尾崎一雄、その長女の視点から描かれている。良く調べて書かれている。

「揺れる木」 自然林実験エリアで、木々が意志をもち人間化していく話、発想は面白いが、もう少し具体的に突っ込んで、SF的な感覚で書かれても良かった気がする。

「幕末二人のアウトロー」 幕末のエピソード、浪士隊を生み出した清河八郎と新徴組の隊士となった山本（祐天）仙之助との出会いから、双方の最期まで。新選組の生れる前の話としての面白さは感じられた。

かつてはまだ正規の職を得ていない生活の不安定もある。現地の人たちとの関わりは瑞々しい。そして右腕のない遺体を遺跡から発掘するラスト、それを自らの日本漁村での成育時の記憶と結び付けるのもいい。ただ青き日というタイトルに何を込めたかったか、それを突き通してみせて欲しかった。憧れと挫折と失墜と、なお求める何か……を。

「遠い極楽浄土」 〈生きていける極楽浄土。熊野市波田須はそんな里である〉と。主人公のその地への愛着は並々ならぬものが伝わってくる。主人公は妻を亡くし、さらに頼みにした長女の婿も亡くしている。それを元にかつて脊椎カリエスを病んだ主人公の内面そして定時制の女子同級生との関わりを読みたかった。しかし、恩師の国語の先生とその人生、さらには中上健次の小説「火まつり」も持ち出され、これでもかと書かれると、却って纏まりが付きにくくなった感があつた。

「空へ、空から」 農村に育った主人公の少年時代の話。人手を必要とするその世界では、幼いなりに仕事に使われる。その世界の描写（父親との関係など）は瑞々しく読ませるものになっている。水を汲まずにホースで吸い上げようとするサイフォンの原理の知恵などもおもしろい。原爆（長崎）にやられ頭が剥けてしまった少年との関わりも読ませ、その少年の気持ちにも踏み込んでいいる（犬のことなど）。ただラストで火事になりその友が消えてしまつて



選考会風景 2024.11.3 東京・国立「サロン・ド・八覚」にて

第18回 銀華文学賞 作品募集

銀華文学賞は、人生経験豊かな壮年・熟年・シルバー世代の文芸創作活動に光を当て、その小説作品を賞揚し、文学創作エネルギーを顕彰するものです。埋もれた才能や稀有な人生体験・世界観を掘り起こし、広く社会に知らしめ、真に価値ある作品を世に残すことによって、日本文学の興隆に寄与することを目的とします。

今年も、どうぞ奮って銀華文学賞にご応募ください。

●●募集要項●●

募集内容●オリジナルの短編小説作品。これまで同人雑誌などに発表したものを改作したものも可。一人一篇に限る（複数応募者は失格とする）。

応募資格●2025年4月30日時点において40歳以上の者

応募規定●

2万字以内（400字詰原稿用紙50枚以内）（短いものでも可／原稿用紙使用の場合は必ずA4の大きさの原稿用紙を使用のこと）。ワープロ原稿はA4用紙40字×30行で印字。必ず右上を綴じること。応募原稿は返却しないので、必ずコピーを取って応募（コピーを応募するのが望ましい）。

別紙に①応募部門（第18回銀華文学賞応募作品と明記）②タイトル③本名およびペンネーム／それぞれふりがなをふること④年齢・生年月日・性別（これらのないものは失格とする）⑤〒（必ず記入）・住所⑥電話番号⑦職業・略歴

応募者には結果を通知する。

応募審査料●2800円分の郵便為替（郵便局で購入／無記入のこと）で同封。外国からは20USドル。切手でも可。郵便為替2000円＋切手も可。

応募先●〒158-0083 東京都世田谷区奥沢7-15-13 アジア文化社

「文芸思潮」銀華文学賞係

TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848 E-mail bungeisc@asiawave.co.jp

賞●銀華文学賞■賞状・トロフィー・賞金20万円（受賞者2名の場合は10万円、3名の場合は7万円）

優秀賞■賞状・賞メダル・賞金3万円（4名以上の場合は2万円）

奨励賞■賞状・賞メダル 佳作・入選■賞状

選考委員●作家集団「塊」メンバー

締切●2025年4月30日（当日消印有効）

発表●予選通過者は2025年9月25日発売の「文芸思潮」97号に発表する。当選作・優秀作は2025年12月25日発売の「文芸思潮」98号に発表掲載。奨励賞など優れた作品も順次「文芸思潮」およびインターネットに掲載する。

主催●文芸思潮

※主催者から 真摯な文学創作に打ち込んでいる人々に光を当てたい。強烈な体験、斬新で強靱な視線、震えるような共感、心に迫る文章、魂を打つ言葉を期待しています。熟年世代・シルバー世代の底力を見せてください。



黒い水／穀雨

KAWABAYASHI Mitsuru

河林満作品集

川村 湊 [編・解説]

二度芥川賞候補となりながらも
受賞を逃し、
57歳の短い生を終えた
作家の復活。

出世作「濁水」の原型
「ある執行」収載。

インパクト出版会

作家集団「塊」の作家・河林満の小説集 作家志望者必読の作品集
作家魂のほとばしる小説群 532P 4000円を文芸思潮読者には特別価格
3000円（送料・税／込）でお送りします お申し込みはアジア文化社まで

緋の滴

世波貴子

「南無阿弥陀仏——」

唱え終わった時、首は落ちていた。

錠の上に転がって、なお微かに唇が動いた。漆喰に群れ咲く曼珠沙華の花を描いて、鮮やかな血飛沫が広がる。

切っ先が弾いた砂が、その上にほとりと落ちた。

（仕損じた——）

吉亮は目を閉じた。無心に振り下ろしたはずの剣に、動揺があった。

控えていた獄卒の一人が首を拾い上げる。桶の水で洗い、検死役に向かって高々と差し上げた。

「見事」

師範代、畠統二郎の声が低く響いた。

この時初めて、吉亮は男の顔を見た。俯せにした胴の脇に据えられた首は、半眼で唇を歪め、何事か言いたげな顔つきに見えた。食い詰めて商家に押し入った盗賊はさる小藩の下級武士の倅で、吉亮と同じ二十六歳と聞いていた。一礼すると、微かな酩酊感と共に鳩尾のあたりを苦い塊がこみ上げてくる。安堵と嫌悪を二つながら静かな息の下に撫で沈めて、吉亮は刃を拭った。

山田吉亮。徳川の世が続いていれば、徳川家御佩刀御試御用役、九世山田浅右衛門と呼ばれていたはずである。だがその名はすでになかった。明治二年八月、父、七世浅右衛門吉利が新政府から拝命したのは囚獄の首打役であった。これにより、山田家は世襲の御試御用の職を失った。一介

*七世山田浅右衛門吉利から家督を受け継ぎ、八世となったのは長男吉豊であったが、まもなくその職を弟の吉亮に譲った。その後の山田家の御役目は吉亮が務めたことから、吉亮は「閨八代」と呼ばれることもある。

の官吏となることを潔しとしなかったのか、父は間もなく隠居し、病弱だった長兄の短い勤めを経て、今は三男である吉亮がその職を勤めている。

監獄は明治八年五月二十八日をもって市ヶ谷谷町へ移り、長く一族代々が剣を振るい続けてきた小伝馬町牢屋敷も、間もなく姿を消した。

「先生。見事でした」

獄卒の控えの間に戻ると、統二郎は嬉しそうに繰り返した。吉亮とは二歳しか違わないが、えくぼのできるほっそりとした頬が、その歳に見せない。

「いいや」

「なぜでございますか」

「迷いがあった」

「そうは見えませんでしたか」

迷いには、思い当たるところがあった。

いよいよ斬首の廃止が本決まりとなった——今朝吉亮にそう告げたのは、権大警部の嶺岡英五郎であった。一等警視補小野田元熙もとひろの側近で、色白の面に能吏の色を漂わせる男である。

驚きはしなかった。死刑は絞首とすべきという元老院上申書が出されたのは、二年前の明治九年のことである。覚悟はあったはずだ——そう思うと、いっそう己が不甲斐なく、情けなかった。

ふう、と息をつき、吉亮は鼻梁の奥に残る血の匂いを吐き出した。

いくらか落ち着いてふと見ると、部屋の隅に見慣れぬ男の姿があった。

ここの獄卒とは既に顔馴染みである。新入りは獄卒長が連れてきて顔合わせをする。知らぬ顔を見るとは妙であった。

痩せた小男で、だぶだぶの官服は袖が余っている。鼠のようにちんまりとした顔は蒼白で、十月だというのに汗が滲んでいた。

「お前、見かけぬ顔だな。新入りか」

吉亮が問うと、古参の獄卒が怪訝な顔つきで割って入った。

「お供をお許しになったんじゃないやありませんか」

「私がか」

「へえ。こいつ、そう申しましたが」

「許しなどしておらぬぞ。どういふことだ」

吉亮と統二郎、それに獄卒たちに睨まれて、小男はぶるつと身を震わせた。

「いえ……、勝手に入り込んだんじゃないやしませんよ。麹町の旦那が話をつけて下さったんで、てっきり皆さんご存じかと——」

「麹町……、兄上か」

「へえ」

「こんな所へ入り込んで、何をするつもりだった」

「あたしは絵師でございまして、御厨^{みくりやき}曉淵と申します」
なるほどそういうことか、と腑に落ちた。

首斬りを見たいという絵師は、初めてではない。口を利いて刑場に入れてやったと、父から聞いたこともあった。罪人も小者では、血までドロドロと流れるばかりでみつともないと笑った絵師は、確か河鍋^{かわなべ}曉斎という名だった。

「曉斎の門下か」

「左様でございます」

「して、首斬りはどうだった」

「それが、肝心なところで目をつぶっちゃいまして」

「情けない奴だ」

「へえ。まったくで……」

「まあいい。画ができたから見せろ。それで勘弁してやろう」

どうやら、この弟子には師ほどの度胸はないようだった。頬にはようやく血の気が戻ってきたが、目だけがきよろきよろと動いて、いよいよ小動物じみた顔になる。それを見て、獄卒たちが声を揃えて笑った。

だが、兄の勝手な振る舞いは笑い事では済まなかった。

次兄^{あひよ}在吉が、かつて一家の住まいであった麴町の屋敷を引き継いで四年になる。父は、若い後妻とその間にできた娘を連れて、清水谷に移り住んだ。首打役が吉亮に譲られ

たのも、その折である。

以来在吉は、何を生業とするでもなく、分与された財産を食いつぶす暮らしを続けていた。刀剣の目利きや人胆の売り買いで顔は広く、おかげで得体の知れぬ口利きのようなことをして稼ぎを得ている様子であった。おそらくこの男も、いくらかの謝礼を払って頼み込んだのだろう。

平河町の邸へ戻る道すがら、浮かぬ顔を氣にかけたのか統二郎が問うてきた。

「ご心配でございますか」

「麴町のことが」

「はい」

「兄上が、このまま身を持ち崩すかと思うと、哀れでな」

「そんなことはございませんよ。今は少しばかり戸惑っておられるだけです。近頃の世の中の変わりようには、どうにもついて行けません。そのうち必ず、昔の在吉さまに戻られます」

「そう思うか」

「もちろんです」

元来楽天家の統二郎は、そう言って無邪気に笑った。

夜半から雨が降った。上がるのを待って、翌日の夕刻、麴町の兄のもとを訪ねた。

広い屋敷には人氣もなく、住み込みの弟子の伊佐吉が走り出てくるまで随分時間がかかった。伊佐吉は横浜の商家

の生まれだが、もはや山田家が継ぐべき職もないことがわ

かって、なお在吉を慕って残っている。

義姉は昨日から娘を連れて里へ戻っているようだった。父親の具合が悪いようだと言った。

「そうか」と頷いたが、おそらくそれだけではあるまいと思う。

座敷から見る庭の風情は、それでも昔のままだった。ここ数日ためつきり秋風が立ち始め、萩が小さな花を揺らし

ている。

しばらくして、兄が入ってきた。かすかに酒の匂いがした。

「おう」

「おう」

「お久しぶりです」

「そうだな。何の用だ」

吉亮が平河町へ移って以来、用がなければ互いの宅を訪ねることもなくなっていた。仲違いしたわけでもなかったが、久しぶりに向き合う兄は妙によそよそしかった。

吉亮も、兄の目には同じように映っただろう。

伊佐吉が、慣れぬ手つきで徳利と猪口を載せた膳を運んでくる。熱燗がすぐに出てきたところを見ると、やはり兄は飲んでいたのだろう。

「用がなければ、来てはいけませんか」

「そうは言わぬが」

「いかがお過ごしかと思ひまして」

「見たとおりだ。大してすることもない」

「何か、始めてはいかがですか」

「何がある。道場の師範も断られる始末だ。据物斬^{すえものざり}とは違うと言つてな」

だが、時代がどうあれ、試刀家としての在吉の名声は確かである。紫檀の刀掛けに、見慣れぬ刀が二本据えてあるのを、吉亮は見逃さなかった。

「あれは、試刀の依頼でございますか」

兄は曖昧に頷いた。

「人斬りをやめて、刀も時代遅れかと思つたが、近頃では西洋人への土産にするようだ。面白い話よ」

「ならば、兄上の出番もなくなりはいませんか」

「そんなもの、たかがしれておるわ。今は物珍しがっているだけだ」

「そうでしょうか」

「決まっているだろう。人胆丸^{じんたんがん}は、父上が握って離さんしな」

「父上を恨むのは筋違いというものです。それに、人胆丸こそ、いつまでも売れるものではありませんよ」

「恨んではおらん。若い後妻を連れて、呑気なのが羨ましいだけだ」

この先父に何かあっても、遺産は後妻とその子が継ぐことになる。

刑死者の死体から取った胆は人胆丸とも浅右衛門丸とも呼ばれた薬になり、山田家に富をもたらしした。その製法の秘伝が、財産分けの後父のもとに残されたことを兄は言っているのだが、もはや明治三年に人の臓物の売り買い禁止の布告が出ていた。犬や熊の胆はいまだ薬として珍重されていたが、それも時間の問題であらう。

兄は顔をしかめて杯を干した。

「お前はいい。曲がりなりにも役人だ」

その役人の職は、二人の兄が話し合いの末に弟に譲ったものである。だが、吉亮は薄い笑みをつくって言葉を飲み込んだ。

「ところで、御厨曉淵とかいう絵師を、ご存じですか」

「ああ、知っている」

「刑場に入り込んでいました。兄上の紹介だと——」

「春木座に芝居見物に行った折に、顔見知りになった。面白い男だろう。首斬りを見たいと言うので、頼んでやった」

兄の芝居好きは母親譲りだった。本郷座が春木座と名を変え、前から、足繁く通っている。

「誰に頼んだのです」

「嶺岡という奴だ」

「嶺岡英五郎ですか」

「ああ、そうだ」

表情の少ない役人然とした顔が浮かんだ。

それより、兄上、稽古をしませんか」

在吉は頬をぴくりとさせて、吉亮を見た。

「稽古、だと？」

「はい。久しぶりに、兄上と打ち合いたくなりました。この前稽古をしたのは、まだ皆でここに住んでいた頃ではありませんか」

「そうだったかな……」と小さく呟きながら、兄は散切りの髪をほりほりと掻いた。

「稽古か。まあ、よからう」

道場もまた、がらんとしていた。これほど広かったとは、と驚いた。

吉亮が少年だった頃には、住み込みの弟子に加えて、諸藩の江戸屋敷から通ってくる門下生がひっきりなしに出入りしていたものだ。木刀を打ち合う潔い音は、幼い頃の微かだが心地よい思い出だった。だが、今になって思えば、その頃にはすでに新時代の冷やかな風が吹き込み始めていたに違いない。

さっきまでの雨の名残か、湿った空気が隅に淀んでいた。もはや踏む者もない床は、それでも艶やかに磨き上げられている。吉亮は義姉の労苦を思った。

木刀を握って相対した兄は、藍染の稽古着の下でもかなり肉がついたのがわかる。しかし、刀先を軽く合わせた瞬間、ぐいと後ろへ押されるような威圧を感じた。

「親しいとは知りませんでした」

「時々、刀の目利きを頼まれるのでな」

そう言っ、在吉は刀掛けを指さした。

「あの刀も嶺岡から預かったものよ。英国人が欲しがっているらしい。まったく、どこにでも顔の利く男だ」

「では、嶺岡があの絵師を入れたのですか」

「もちろんそうだろう。まあ、別に悪いことではなからう。

この間は医者を入れたと言っていたからな」

刑死者の死体を解剖に使いたいという医者が、獄卒と並んで斬首を眺めていたことがある。罪人がもがいて逃れようとすると、いまいまいげに舌打ちをした。切り口の角度が一樣でなくなり、解剖には都合が悪いのだから、聞こえよがしに繰り返していた。嶺岡の口利きで来たことは、後になって知った。

「礼を、貰ったのですか」

「口を利用してやったのだから。迷惑だったか」

「いえ。見られることは、構いません」

気になるのは兄のことだと言いたかったが、どう切り出せばいいのかわからない。歳は十三も離れていて、じゃれ合って遊んだ思い出などない兄弟だった。

思い出すのは、剣術の稽古である。容赦なく打ち据えられては、悔し涙を流した。

「絵師の言ったことが本当か、確かめたかったです。

（昔のままの兄上だ——）

吉亮が十七歳の頃には、背丈では兄を追い越していた。ところが、兄の低くどっしりとした構えは、見下ろすとかえって隙が見えなくなった。その頃と変わらぬ兄の姿が、眼前にあった。

ふと、嬉しくなった。

口元がわずかに綻んだのだろう。気合いと共に、在吉が鋭い一撃を振り下ろした。辛うじて払い、半歩下がって体制を立て直す。その懐へ体を寄せ、在吉はさらに休みなく打ってきた。受け止める度に、腕に痺れが走る。容赦のない攻めは、変わらない——。

だが、何かが違っていた。

澄んだ音がしないのである。

息つく暇もないほど激しく打ち合っても、かつては木刀の芯と芯とがぶつかり合い、心地よく美しい音を立てたものだった。勝ち負けではない、ひたすらに打ち合う高揚感に酔うことができた。

今は、違う——。打つても打つても、繰り返されるのは鈍い響きばかりだ。吉亮は、苛立った。

一度離れ、互いに息を整える。繰り返された次の一突きは、気合いを欠いていた。吉亮はそれを、ゆっくりと目で追った。間合いを測り、力を込めて跳ね上げる。兄の体はずかしく揺らいだ。そこへ、渾身の力を込めて、正面から

打ち込んだ。

「おっ」と声を上げて、在吉は尻餅をつくように後ろへ崩れ落ちた。木刀が、音を立てて床に転がった。

「ここまでだ」

兄は、荒い息をつきながら言った。肉が付いて丸みを帯びた胸が、苦しげに上下している。

吉亮は木刀を振り上げたまま、呆然とそれを見下ろしていた。

十日ばかりたって、御厨暁淵が訪ねてきた。すぐにそうと気づかなかったのは、見違えるように粋な服装なりをしていたからである。この前の、だぶだぶの官服がしごいたように垂れていた情けない姿とは、まるで別人である。

袖柄つぎの羽織を脱ぐと、下の薄い綿入れは鳶八丈だった。急に寒くなりましたねと笑うと、妙に並びの良い前歯が覗いた。鼠のような小さな顔までが、かえって芸術家らしい外連けれんを隠し持っているように見えた。

暁淵は、先日黙って刑場に入り込んだことを詫びた。

「嶺岡の許しを得ていたのだな。なら構わん」

「しかし、首を斬るのは先生ですからね。先生の許しも頂くべきでした」

「氣にするな」

暁淵は風呂敷包みを二つ抱えていた。一つを、土産だと

「顔など見えんさ。此岸と彼岸ほど、遠い」

面紙一枚が、この世とあの世を隔てている。絵師ふぜいには判るまいと思ったが、暁淵は得たりという顔つきで頷いた。

「なるほど、そうかもしれませんな」

「知ったようなことを言うのだな」

「女を描いている時は、そう思いますからな」

「ほう。画とはそんなものか」

「女だけですかね」

「師匠のような画を描くのかと思ったが、女を描くのだな」

「同じような画を描いていちゃあ、とても師匠にはかないません。あたしは元々美人画が好みでしてね。おかげで出来上がりましたので、この間のお約束通り、先生のお目に掛けようと持参いたしました」

暁淵は、携えてきたもう一つの細長い風呂敷包みをほどいた。桐箱に入った、軸である。巻緒をほどき、少し開くと艶やかな女の髻もと先がのぞいた。

「なるほど、女だな」

斬首を見ねば描けぬわけではあるまい、と言おうとしたが、目の前にあらわれた女の白い面を見て息を呑んだ。白い面に、毅然とした表情が美しい女だった。袖の黒地に描かれた青い花は、竜胆りんどうか。椅子に浅く腰掛け、顔をやや左に向けて、こちらをじっと見ている。一瞬、目を見開いて

言って差し出す。

「乱暴に扱っちゃいけませんよ。破裂しちまいますから」

「物騒だな。何だ」

「ビヤザケですよ。わざわざ横浜から持って来させたんでお気に召すといいんですが」

「旨いのか」

「冷たい方が旨くなるそうですよ。まあ、あたしには普通の酒の方が有難いですがねえ」

横浜で、コーブランドという米国人が麦酒の製造を始めたのは前年のことである。

座敷へ上げると、立派ですな、と目を丸くした。

すっかり寂しくなったのは、兄の屋敷と変わりない。弟子は新しい職を見つけて、一人、また一人と去って行った。吉亮が、そうさせたのである。今は妻と統二郎、あとは下働きが二人いるばかりである。そう言うとき、暁淵はぶるつと身を震わせた。

「恐ろしくありませんか」

「何がだ」

「首を斬られた罪人どもの亡霊が、そこら辺りにいそうじゃありませんか」

「そんなはずはない。私怨で斬るわけではないからな」

「あたしなら、死人の顔が浮かんで夜も眠れなくなりそうですかね」

吉亮を見たように思った。背筋がずっと寒くなった。

その顔に、見覚えがあると思った。

「どうです」

「見事……だな。画の善し悪しはわからぬが」

「我ながら、なかなかの出来映えです。自慢じゃありませんかね」

「だが、これを描くのに斬首を見たいとは、わからんな」

「いえいえ。これこそ、血の匂いを嗅がねば描けない画です。途中でどうにも筆が動かなくなっちゃいまして、麹町の旦那に泣きついたんですよ」

「どうしてだ」

「この女、伝と言いましてね。ご存じでしょう」

なるほど、と思い当たった。男の首を掻き切って金を奪い、今は市ヶ谷の監獄にいる女だ。稀代の毒婦と、一時は新聞がこぞって書き立てた事件である。写真では細かい目鼻立ちなど判然としなかったが、高橋伝という女は、滅多にお目にかかれぬほどの器量だという、もっぱらの噂であった。

「会ったことがあるのか」

「とんでもない。話に聞いただけですよ」

ならば、すべてはこの絵師の想像に過ぎぬはずだった。だが、画には血肉を備えた女の色香と匂いがある。

はて、この暁淵という絵師、見かけによらず異才の持ち

主かもしれない。

美人画にはつきものの花も、団扇も、手鏡もない。黒髪に映えるかんざしすらなかった。

俄に胸が騒いだ。冷たくなった指先をぐっと握りこんで、吉亮は大きく息をついた。

切れ長の目、細い鼻梁、やや薄く形のよい唇はまっすぐに結ばれ、何事か思い詰めた表情であった。何よりも美しいのは、潔くすっきりと伸びた細い首だ。

一筋の後れ毛に、吉亮は思わずふうと息を吹きかけた。揺れぬのか――。

「先生……」

暁淵の声に、吉亮はふいに我に返った。

「どうか、なさいましたんで――」

「ああ。済まん。つい見とれてしまった。見事な画なのだな」

「そんなお世辞はいけませんよ。その気になっちゃいます」

「高い値が、つくだろうな」

「売る気はございません。ええ……」

吉亮に所望されては、と思ったのだろう。暁淵は背を伸ばして座り直した。

「有り体に申せば、こいつは売れると思って描き始めたんでございますよ。何しろ、狂言のねたになるほどの女ですから、人の気も引こうつてもんです。ところが描いているうちに、どうにも惜しくなっちゃったんですよ」

「なるほどな」

「こいつは俺のもんだ、誰にも渡すものか、ってね。もうすぐ死罪になる女なら、なおさらでしょう」

「それなら、俺にも見せたくはなかったろう」

「ですから、先日のお詫びで。それにね、先生なら、この画の値打ちがわかっていただけたらと思うたんです。いや……、値段の話じゃありませんよ。おかしいことを言うとお思いでしょうが――」

凶星を指されたようで、どきりとした。

「わかったとは言えんが、売りたいくないなら誰にも見せぬ方がいいだろう」

「へえ。そのつもりです」

「女房にもだ。いい値がつけば売れと言い出すに決まっている」

暁淵は神妙な顔で頷いた。軸を丁寧に巻き戻し、風呂敷に包む。

「狂言になったと言ったな」

「へえ」

「どこでだ」

「赤城座と聞きました」

「そうか――」

「ご覧になるなら、お供いたしますよ。あそこなら顔が利きます」

「いや……」

吉亮は、暁淵の言葉に曖昧に頷いた。

芝居など、面白いと思ったことはない。所詮は役者が演じる絵空事だ。

兄ならどう言うだろうか、とふと思った。

「こりゃあ楽しみだ。いつにいたしましうかねえ」

暁淵はそう言って、小鼠のような顔を皺くちやにして笑った。

赤城座は牛込にある。すぐ近く、赤城神社の脇には喜楽座という小屋もあり、芝居好きで賑わう界限であった。

小芝居の常で、花道も回り舞台もない質素な造りだが、茶代もあわせて五銭もあれば一日芝居見物ができるとあって、結構な繁盛ぶりであった。座頭は大芝居の舞台にも上がったことがある坂東某という男で、時折書き割りを頼まれる暁淵とは旧知の間柄だという。

約束の時間きっかりに着いたが、暁淵は既に待っていた。上機嫌で、自分の屋敷でもあるかのように、さあさあと吉亮を招き入れた。

中は随分狭苦しく、むっとした熱気が肌にまとわりついて、外の冷気を忘れさせる。既に席の大半は埋まっていた。演目のせいか、それとも人気の役者が登場するのか、客の入りは上々のようである。

大芝居の役者とは峻別され、格下と見られるのが小芝居だが、通の目にはなかなか侮れぬところがあるともいう。弁当をつつきながら、芝居談義に花を咲かせていた男が、久しぶりだねえと暁淵に声をかけた。ついでに吉亮にも会釈し、「お仲間かい」と聞く。

「いえいえ。警視本署のお偉い方ですよ」と暁淵が答えると、「ほう」とだけ言って、男は背を向けた。

狂言もまた、官庁の許可あつてはじめて興業が打てる。芝居小屋とは、風紀なるものを挟んだ、公と庶民の小競り合いの場でもあった。警視と聞いて身構える者がいるのも、無理はない。

どんちよう
緞帳芝居といわれる通り、小芝居の幕は横引きではなく、上からつり下げられている。幕が引き上げられ、物語は、劇中では中橋と姓を変えられた伝が、上州利根郡下牧村の故郷を、最初の夫と共に追われるところから始まった。病弱な夫はまもなく病に倒れ、親切な温泉宿の主人に助けられる。目指していたのは名医と名高いヘボンのいる横浜だが、逗留は長引き、携えてきた路銀は底を突いた。

伝は思いつく限りの悲しい身の上話をでっち上げ、宿で知り合った客から金を借りはじめる。舞台のこちらの端では夫に寄り添い、向こうの端ではしなを作って男客の気を引く。くると振り向くごとに、腰つき顔つきまで変える女形の芝居は見事であった。だが、吉亮の目に映る役者の

顔は、暁淵の画のそれとすり替わっていた。

看病の甲斐なく夫は死ぬ。東京に出た伝は小川市太郎という男と出会い、恋仲となった。二人は商売を始めるが、市太郎は見てくれが良いだけの遊び人。伝はそれでも夫に尽くす。借金はかさみ、遂に二進も三進もいなくなり、古物商の後藤吉蔵に泣きついた。

座頭が演じる吉蔵は、いかにも好色漢らしい悪辣な面構えである。もともと下心から引き受けたことで、二百円を用立てる代わりにと伝を誘い、浅草蔵前片街の旅館「丸竹」に入った。吉蔵は伝の異母姉かねの情夫であり、伝もかねの伝手で吉蔵を知ようになったのだが、一夜を過ごすと吉蔵の態度は一変した。のらりくらりと話をはぐらかすばかりで、いっこうに金を渡そうとしない。

朝餉の後、再び眠りこけた吉蔵を見下ろしていた伝は、やおら懷から剃刀を取り出す。眉を釣り上げた夜叉の顔で観客を眺め渡すと、やんやの喝采が巻き起こった。布団をはぎ取り、えいとばかりに剃刀を振るう。のけぞった吉蔵の胸元から、血糊がだらりと流れ出た。

ふっ、と吉亮は笑った。

芝居とはいえ、あの血糊の鈍重な流れは何だ――。

見事に喉を斬り裂いたという話が本当なら、血は真っ直ぐに吹き出しただろう。鮮やかに舞うような刃の一閃が台無しではないか。

そこへ、舞台端の襖の向こうから、仲居の声が何事かと呼びかける。

「いいえいいえ。何でもありません」

伝は襖の方へ顔を向け、和やかな表情を造りながら、踵で布団をひよいと持ち上げて、もがき苦しむ吉蔵に被せた。横で暁淵が笑った。布団はしばらくもぞもぞと動いていたが、やがてびくりと震えて止まった。

それから伝は吉蔵の札入れから金を盗み、市太郎のもとへ駆け戻る。邏卒らそつがやって来て、市太郎の名を呼びながら引立てられて行く場面、幕となった。

「どうでした」

暁淵が煎餅の残りをつまみながら問うた。

芝居の巧拙はわからない。わかるのは、伝が刃を振るつたとき、鮮やかな血色の曼珠沙華を見たはずだということだけだった。吉亮が、斬首の刃を振り下ろす度に見るものと、同じだ。

「面白いものを見せてもらった」

「気に入っていただけりや、嬉しいですよ」

「だが、お前の画の方が人斬りらしく見えるがな」

「人斬りだなんて、とんでもない。あれは哀れな女です。つまらねえ男にばかり惚れて、挙げ句は人殺しですからねえ」

帰りがけに一杯どうです、という暁淵の誘いは断った。

気の重い仕事があった。竹橋事件の首謀者の処刑が、近づいていた。

十月十五日、竹橋事件の首謀者五十三名の処刑が行われた。

竹橋事件とは、この年の八月二十三日深夜、皇居近くの竹橋兵営で、近衛砲兵大隊の兵士が起こした叛乱騒ぎである。

昨年の西南戦争での働きに対する論功行賞は十分でなかった。それどころか、新政府を悩ます財政難から、近衛隊兵士への給金も引き下げとなっていた。これらに不満を抱いた兵卒が、近衛歩兵第二連隊兵卒の三添卯之助らを首謀者として蜂起したのである。わずか二時間半で鎮圧されたが、双方併せて十名あまりの死者を出した。

逮捕者の審問は翌日から始まり、十月十五日に判決が言い渡された。途中精神に異常を来したとみなされた一名を除き、処罰を受けたのは三百九十四名。三添ら五十五名が死刑と決まり、うち五十三名の処刑は即日執行された。

銃殺であった。

早晩五時に始まった処刑は、あつという間に終わった。市ヶ谷監獄の一官吏として立ち会った吉亮は、その手際の良さを呆然と眺めた。処刑を取り仕切ったのは嶺岡であつ

た。降りしきる雨の中、獄卒や射手を動かす手際にそつはなかった。かつての磔刑のように十字の柱に括り付けられた男たちは、三十人の射手の弾丸で絶命した。

午後、吉亮は廊下で嶺岡を呼び止めた。

処刑後の死体は、刑死人取り扱いを任せている千住北組の手で棺桶に収められる。一日に五十三人となればひと仕事であった。あれこれの後始末のために居残っていた嶺岡は、顔色がいつそう青白さを増したように見えた。

酒は弱く、飲めば、「俺など貧乏旗本の三男だが」が口癖の男である。自嘲ではなく、実に誇らしげにそう言う。

兄は彰義隊に加わり、戦死したが、峯岡自身は迷わず新政府の官職を選んだ。新時代に、処を得た一人であろう。

「苦労だったな」と労うと、嶺岡はどこか倦んだような笑みを浮かべて頷いた。

「簡単なものだ。斬首と違って仕損じがない」

「罪人の往生際がいいからさ。おとなしく斬られてくれれば、斬首も同じだ」

「さすがに近衛隊の兵卒だからな」

雨は上がり、雲が裂けて西日が差していた。

「兄から刀を預かっている。いいか」

「ちょうどよかった。私も、話がある」

がらんとした会議室に入り、大机の片隅の椅子に腰を下ろす。

携えていた刀を差し出した。
「銘に間違いはないそうだ」

「二ッ胴斬断」の試験には在吉の名があった。

刑死者の胴を二つ重ねにして、見事に斬ったことを示していた。だが、近年西洋人の間に日本の美術品や工芸品の蒐集熱が高まっていることを見れば、目敏い者は巧妙な偽造品を持ち込まないとも限らない。嶺岡はそれを疑い、在吉が試刀をしたものに間違いないかと確かめたのだった。

もう一振には、父吉利の銘があった。ならば父に聞けばよいのだろうが、何分このところ二人は疎遠ゆえ、行きづらいのだろうと吉亮は言った。もうしばらく預かるとの言伝を伝えると、嶺岡は頷いた。

「構わない。急ぐわけではないからな」

嶺岡の口調には同情の色があった。吉亮に職を譲って以来の、悶々と心晴れぬ兄の暮らしぶりを、察しているのだろう。

「絵師の件でも、無理を言ったのだろうな」

「ああ、あれか」

刀袋の紐をくるくると巻きながら、嶺岡は笑った。

「おかしな奴だった。美人画を描くの、血を見ねば描けぬとは」

「高橋伝の画だった」

「ほう。見たのか」

「詫びだと言って、持ってきた。ああ見えて、なかなかの腕前のようだ」

「確かに、美しい女だからな。二、三度見かけたただが美しい上に、実にしたたかな女だよ。園田も手を焼いていた」

取り調べに当たった園田の肩書きは、権中警部である。かつては嶺岡の部下であった。

吉蔵は姉の敵であるとの書き置きを宿に残した。だがすぐに姉は存命とわかり、今度は吉蔵は自害したのだと言いつ張った。

「死罪になるという噂だな」

「まあ、そうだろうな。あれこれ言い逃れをしているが、どれも嘘だ」

窓外は、薄闇が広がり始めていた。嶺岡は時計にちらりと目を落とす。

「悪いが、次の約束がある」

「そうか。で、そっちの話とは何だ」

「この前も言ったが、斬首はいよいよ廃止になる。今日のことであつたろう」

「銃殺になるのか」

「それはわからないが」

絞首刑との案もあり、既に絞首台の試作品も作られている。

「いずれにせよ、首打役はお役御免というわけだ」

「心配するな。書記の職なら必ずある」

「書記、だと——」

「剣術指南役という手もある」

「今更そんな職があるか」

「あるさ。抜刀隊の働きで、剣術を見直そうと言いつ出す者が出ている」

警視隊から剣術に優れた者を選抜して結成された抜刀隊は、西郷軍の精鋭を相手に大いに奮闘した。維新と共に廃れてかけていた剣術が、これをきっかけに再び奨励されるようになったとは、皮肉である。

だが、それも一時のことであろう。

今回の竹橋騒動でも、叛乱軍は砲兵で大砲を持ち出した。白兵戦がなくなりはずまいが、戦闘の主役が火器に移ることとは、もはや明らかである。

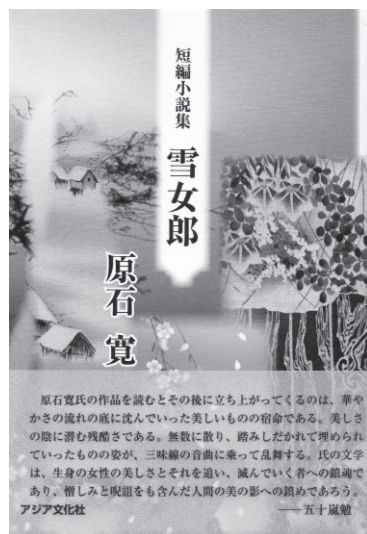
「生きた人間を斬るのと、据物斬りとは訳が違つと言われらるだろうよ」

「山田吉亮が達人だということに、誰も異論はない」

「どうか。剣術を教えるなら、ただ稽古をしたいという者を相手にする方がいい。兵隊相手とは、気が進まん」

「悪い話ではないと思うが——」

嶺岡は眉間に深い皺を寄せた。わからぬという顔であった。およそ理屈に合わぬことは、嫌う男である。



原石寛 畢生の短・中篇小説集
珠玉の名作集 1800円
申し込みはアジア文化社まで

吉亮は立ち上がって、「まあ、考えておくさ」と言った。
「来年、小野田警視補が欧州視察に出かけられるそうだ」
「そうか」
「監獄の改革もお考えのようだ」
「小伝馬町の牢屋敷を潰しただけでは、気が済まんのだな」
「まだまだ改革は足りん。野蛮と見られれば、侮られるからな」
「斬首は、野蛮か。仏蘭西には斬首台があると聞くが」
さっき見た銃殺も、文明的とはとても言えない。だが、嶺岡ほどの男が、それを思わぬはずはなからう。嶺岡は理想家だが、やはりどこかで折り合いをつけて生きているのだ。

「首打役など、面白いのか」

「面白くは、ないが」

「続いて、一年だぞ」
「わかってるさ」

嶺岡の声を背中で聞きながら、重い扉を押した。
一年、か——。
ふいに、伝という女のことを、思った。

その夜は、久しぶりに一人で酒杯を重ねたが、床に入ってもなかなか寝つかなかった。浅い眠りの中で、明け方、奇妙な夢を見た。吉亮は十二歳の少年に戻り、父と兄たちが見守る前で、初めての試刀に挑んでいた。

試刀の前に、首打役としての初めてのつとめを終えていた。後で聞いたことだが、父は吉亮の年齢を十五歳と偽っていたという。押し込み強盗に荷担し死罪となったのも、まだ二十歳前の若者だった。ただ夢中で刀を振り下ろした後のことは、霞がかかったようでよく覚えていない。ようやくその日の記憶らしきものが始まるのは、試刀の場面であつた。

名の通り土を固めて作った土壇には四本の杭が打ち込まれ、その間に挟むようにして首のない胴が固定されていた。『一ノ胴土壇迄落、手心宜跡刃毀御座無候——』、たとえばそのように書付に記すには、一の胴と定められた位置を正確に斬り下ろさなければならない。御試御用こそが山田

家の家業であり、失敗は許されなかった。

つい先刻、刃の下で震えていた首はもう無い。だが、始めてそれが人に見えた。肌は青と白と土色が混ざった不気味な色で、刀を振り下ろせばぐにやりとのみ込むまれるかのように思えた。吉亮は、猛烈な震えと吐き気に襲われた。その時、兄は今の吉亮の歳であつたはずである。脂汗を滲ませて立ちすくむ弟を、鋭く叱咤した。

「どうした。早くせぬか」
意を決して一歩踏み出し、刀を振り上げる。斬るべき位置を見据えた。

（おかしい——）

結わえている縄がなかった。胴は藍色の衣を纏っている。乱れて前がはだけ、肉づきのよい胸が覗いていた。

「どうした」
二度目の声は足下から聞こえた。ふと見ると、ないはずの首が吉亮を見上げている。

あつと声を上げようとして、目が覚めた。

「先生」

襖の外から、統二郎が呼んでいた。

「何だ」

起き上がると、汗ばんだ体に冷気が浸みた。障子を開けた統二郎は、明け方の光を背にして、肩を震わせていた。

「伊佐吉が、来ております」

「何かあつたのか。兄上に——」

「亡くなられたそうでございます」

「何だと」

悪寒が背筋を走った。襟をぎゅっと掴んで、息が止まるほどの胸苦しさに耐えた。

「どういうことだ」

「それが、伊佐吉も動転しておりまして、要領を得ぬのですが」

在吉は、清水谷の父の宅へ出かけると言つて、昨夜遅く家を出たようであつた。嶺岡から預かった刀を持っていた。明け方になつても帰らぬので、心配した伊佐吉が様子を見に出かけたが、途中の路地で騒ぎが起こっているのが目にとまつた。

すでに筵を掛けられていた遺体の、わずかに覗いた指先の古傷に見覚えがあつた。現場を検めていた邏卒に申し出て筵を捲り、師の姿を見たのであつた。

兄は背中を一突きされており、他にもいくつか傷があつた。持ち歩いていた札入れがなく、邏卒はおそらく物盗りの仕業であらうと言つた。

「刀は」

「ありませんでした」

刀は父に預け、帰る途中だったのだらう。

吉亮は瞑目した。夢に見た土壇の上の胴は、兄であつた。

久しぶりの稽古で吉亮の足下に倒れた、兄の姿に違ひなかつた。

必死に巡らせた思案は、何としてもこの事態を隠さねばならないということだった。御試御用役山田家の男が、物盗り風情に刺し殺されたとは、恥である。悲しみよりも、それが先に立つ自分の心根が情けない。だが、今は吉亮が山田浅右衛門だ。失われた名ではあつても、守らねばならぬものはある。

「どう、いたしましょう」

統二郎が、涙を拭つて顔を上げる。

「少し待ってくれ。手紙を書く」

「どなたにでございますか」

「嶺岡英五郎だ」

またしても、あの能吏に頼らねばならないとは——。だが、他に何の知恵も浮かぶわけではない。

「筆を」

「はい」

統二郎が下がると、ふいに止めようもなく涙がこみ上げて来た。

在吉の葬儀は、身内だけでひっそりと済ませた。もともと病弱な長兄は床から起き上がることもすらでなくなり、吉亮がすべてを取りしきつた。

葬儀の後、義姉は里に身を寄せることになった。伊佐吉も、母親の住む横浜へ帰した。主を失った麴町の屋敷に戻ってきたのは、吉亮一人であった。

周りは誰も事情を心得ており、しばらくの休暇を許されている。片付けもあらかた済んで、これから何をするというのでもないが、平河町へ帰れば、兄を置き去りにするよううで気が咎めた。

ぼとり、と滴の落ちる音がする。

父は、刀を取り上げたことを悔いていた。あの夜、嶺岡から預かった刀を携えてきた在吉は、既にかなり酔っていた。金の無心もいつものことだった。求められるままに渡したのは、暮らしの荒んでゆく息子に、父として幾何かの後ろめたさを感じていたからかもしれない。

だが、刀だけは置いて行けと言った。

帯刀が禁じられてから三年がたつが、所有までは禁じられていない。訳あって持ち運ぶなら罪ではない。しかし、酒のせいで揉め事にでも遭い、刀を抜いて騒動を起こすことを案じた。それが、悲劇を生んだ。

兄なら、どれほど泥酔していても、物盗りの数人など簡単に片付けていただろう。刀さえ、帯びていれば――。

すべてが、後悔しても詮ないことである。そう思いながらも、兄と最後に会った時のあれこれが、空しく思い出された。

「直接お父上に真贋の鑑定を依頼すればよかったのだろうが、面識がないので遠慮した。今となっては――」

「なに、刀は口実さ。また何か気に入らぬことがあったんだろう」

さすがに、金の無心とは言えなかった。

「兄も、哀れな男だ。さぞ君の才覚を羨んでいただろうな」

「才覚だと――。そんなもの、あるものか」

「御維新で、道を見つけたということさ」

「誰も時代には逆らえん。そう割り切っているだけだ」

眉間に皺を刻んだ嶺岡の青白い顔は、それが強^{あなが}ち謙遜でもないことを窺わせた。

吉亮は立ち上がり、吉利試刀の銘のある一振を刀掛から取り上げた。

「ところでこの刀だが、父も今は心労で伏せていて、鑑定どころではないのだ」

「ああ、無理もない」

「銘の真贋は判らぬかもしれないが、試刀なら私がやろう」
胸斬を思い浮かべたのか、嶺岡は眉をしかめた。だが、もとより刑死人を使った試刀は禁じられて久しい。

ぼとり、と、また音がした。障子の向こうの、廊下の隅から聞こえる。

「何だ」と、嶺岡がまた聞いた。

「気になるか」

玄関で、物音がした。

「誰か」と呼ぶのは、よく知った声である。出てみると、やはり嶺岡であった。警視寮の官服姿で、背筋を真っ直ぐに伸ばし一礼した。

葬儀では見かけたが、すぐに帰ったようで話はしていない。礼が、まだだった。茶も出せぬが、と言って座敷に上げた。

嶺岡はすぐに駆けつけ、邏卒に言い含めて路地の死体を身元不明ということにした。山田在吉は、父親の家で持病の発作を起こし、急死したとされた。

ぼとり、とまた滴の音がする。嶺岡がそちらへちらりと視線を向けた。

「何でもない。気にするな」

「まさか雨漏りでもあるまいな。外はいい月だ」

「それより、今度のことでは随分面倒をかけて、済まなかった」

吉亮は深々と頭を下げた。

「なあに、あれくらいのことは、できるさ」

「まったく、恥ずかしい限りだ」

「私の刀を、お父上に預けた帰りがたとはな」

刀には吉利の銘があった。だが、目利きとも言えない嶺岡の目にも、贋作を疑わせるところがあつた。在吉のもとへ持ち込んだのは、そのためだという。

「ああ」

「では、見せよう」

明るい月が庭を照らしている。吉亮は洋燈に火を灯した。片手には嶺岡の刀を携え、ついてこいと身振り以示す。

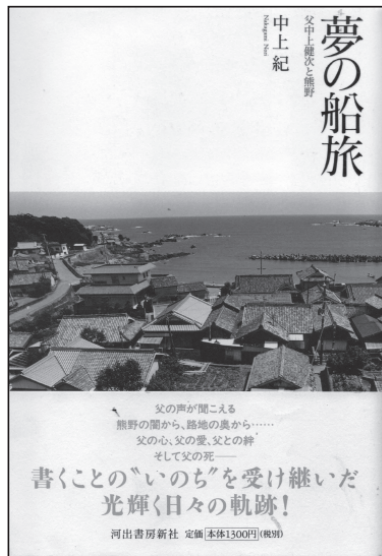
外の廊下の突き当たりは、一段下がって土間へと降りていた。音はそこから聞こえていた。石の床に敷かれた板に、滴が落ちる音であつた。

暗い天井から、何かがぶら下がっている。三つか、四つか――。闇よりも、さらにどす黒い塊であつた。

「これは」

嶺岡が息を呑んだ。

胆である。もちろん、人のそれではない。人胆からの製薬も、据物斬りと同じく禁止となっていた。だが、長年馴染んだ薬が、急に廃れるわけではない。作れば、売れた。



「人胆丸の製法は父上が引き継がれたのだろう」

「兄から聞いたのか」

「そうだ」

「だが、見ての通りだ。兄は、見よう見まねで作ろうとしていたのだろうよ」

吉亮がこれを見つけたのも、兄の死後である。徐々に乾いて、今は時折思い出したように滴が落ちるだけになっていた。その音は、板を弾いて不気味に響いた。

吉亮は、洋燈を足下に置いた。

「何をする」

「試し切りだ」

抜くと、刀身に洋燈の灯がぬらぬらとした影を作った。

鞘を、嶺岡に渡す。

「こんなものを斬るのか」

「いや」

斬る、のではない。意思を持つのは刀の方だと教えられた。その赴く方へ行かせるだけだ。それで切れぬなら、本物ではない。それが、山田家に代々伝えられた、試刀の極意である。

吉亮の目に、ざらりとした残光が残った。赤黒い塊が、ふわりと宙に浮いた。縄は、竹を割ったように見事な鋭角を描いて、断ち切られていた。

嶺岡の足下に、胆が転がった。

落ちていた。

獄舎の裏手の杉林が切り開かれ、黒堀が巡らされているのが、刑場である。およそ畳一枚の大きさの、一尺ばかりの深さに掘られ漆喰で固められた首打ち場があった。周囲は太い木材が柵となつて囲んでいる。漆喰にも柵にも、流しても落ちぬ血の色がこびりついていた。

吹き荒ぶ風にも吹き払われない、何とも言えぬ生臭さがあたりに充ちている。

まず、安川巳之助という男を、斬った。首が検められ、血が洗い流される間を、傍らの椅子に腰掛けて待つ。その時始めて、引き出されてきた伝の顔を見た。評判通りの美貌であった。

長い獄中暮らしのせいか肌はますます白く、面長にやや釣り上がった目と尖った鼻梁がよく似合った。小さな唇を微かに開き、白い息を吐いている。

暁淵の画も赤城座の女形も、たちまち忘れた。

（その目を見開いて、安川の斬首を見ていたのか。吉蔵が死んでいくさまを見届けた時のように――）

だが、伝の目は鬱蒼とした杉林の方へ向けられたままだった。待ち人が来ないことを訝りでもするように、小首を傾げている。

「次」

囚獄署長の声が響いた。獄卒が立ち上がり、白木綿の目

「どうだ」と、鞘を差し出しながら嶺岡が問うた。

「本物か」

「そのようだ」

ばかり、とまた滴が落ちた。

明けて、明治十二年となった。

高橋伝の判決は、一月二十九日に下された。

『人ヲ謀殺シ財ヲ取ル者、人命律謀殺条第五項ニ照シ、斬高橋伝』

斬首による死罪である。

判決文はこう続いた。

『該犯被害者ノ死ハ自死ニシテ己ニ所為ニ非ズ云々雖モ、其他殺ニ係ル証状明白ト言フベシ。而シテ該犯広瀬某ノ落胤ト言ヒ、異母ノ姉ノ復讐言々或イハ姉在世ノ証、須藤次郎ナド言々言フト雖モ、姉ノ生所身分調ニ就テ、一モ其証拠ルベキ無ケレバ、畢竟名ヲ復讐ニ仮リ、只管賊名ヲ掩ハム為ノ遁辞ト言ハザルベカラズ。到底此案艷情ヲ以被害者ヲ欺キ、屢財ヲ図ルモ意ノ如クナラザルヨリ、予メ図リ刺刀ヲ以テ殺害シ、因テ財ヲ得ルモノト信認シ、本議ノ如シ』

嶺岡の言つた通りである。あらん限りの知恵を絞つて、作り話を繰り出した必死の足掻きは、ついに一顧だにされなかった。

執行の日、一月三十一日は、朝からみぞれ混じりの雨が

隠しを伝の目に巻きつける。伝は獄卒に手を引かれ、そろそろと首打ち場へ進んだ。

「座れ」

「申し上げることが、ございます」

ふいに、伝は吉亮に顔を向けた。白木綿の下、見えぬはずの目に見据えられ、吉亮の声は上ずった。

「何だ」

「市太郎さんに、会いとうございます」

「悪いが、それは叶わぬ」

「お願いでございます」

吉亮の方へ身を向けた女の後ろから、獄卒が縄をぐいと引いた。額の上に乱れかかった黒髪に、みぞれ雪が止まっていた。しばらくふらふらと揺れたかと思うと、やがて女の肌の温みに溶けて滴となり、頬を流れ落ちる。

「この期に及んで、見苦しい。構わん。早くやれ」

囚獄署長が、獄卒の肩を小突く。二人がかりで俯せに押し倒され、伝がひいっと悲鳴を上げた。

「会わせてえ」

獄卒が力をこめて、伝の首を柵に押しつける。言葉にならない呻き声を上げながら、伝は激しく身をよじった。櫛巻きにした髪がほどけ、目隠しが緩む。屈強な男二人が、その力に怯んだ。

「おい。いい加減にしろ」

「市さん、市さん」
「やめんか」

署長が一括したが、伝の叫びは止まなかった。市太郎など、くだらぬ男に違いない。女に慕われているのを幸い、金策に走る勞すら厭い、結局女を人殺しにした。死の間際に名を呼ぶ価値など、あろうはずがない。

俄に苦々しさがこみ上げた。

「わかった」

吉亮は、框に膝をついて身を屈めた。

「会わせてやろう」

「本当您でございますか」

「ああ」

「ありがとうございます」

伝は頭を振り立て、目隠しを振りはずそうとする。その目を、見たくなかった。

「押さえろ」

立ち上がり、刀を振りかざす。大きく吐いた息が、白かった。目を閉じ、息を整える。伝はびくりと動きを止めた。

「嘘……」

「会えるさ。この世ではないがな」

この女が地獄へ落ちるなら、男も同じだ。

「嘘つき。市さん、市さん」

もはや、女の叫びは言葉になつていなかった。雪を踊ら

せる寒風と混ざって、猛り狂う。署長も検死役も、顔色を失っていた。

「早く、早くやらぬか」

狙いを定め、刀を振り下ろした瞬間、女は渾身の力で獄卒をはね除けた。刀は女の頭を掠め、框に食い込んだ。

「押さえろ」

「へ、へえ」

他にしようもなく、二人の獄卒は女の上に身を投げ出し、押さえ込んだ。吉亮は再び刀を構えたが、女はもがくのをやめない。そのまま振り下ろせば獄卒を斬りかねなかった。吉亮は、跪いて刀を伝の首に押し当てた。

酷いやり方だと、わかつている。だが、おぞましくもこれが己の務めである。

「許せ」

渾身の力を込めて、ぐいと引く。きいっという軋むような悲鳴とともに、血が噴き出した。立ち上がり、よろめきながら刀を持ち上げた。

「どけ」

獄卒が仰向けに転がって、離れた。冷気を斬り裂く一閃が、伝の首を落とした。

漆喰の上を転がった首から、白木綿の目隠しが外れた。くつきりと美しい臉は、半ば開かれていた。その瞳に雪の一片が舞い落ち、滴となって白い頬を伝う。

「先生、先生」

統二郎の声が響くのを、幻のように聞いた。

斬首は、正式に廃止と決まった。どうやら、高橋伝は、斬首に処された最後の刑死者となるようであった。

嶺岡は、諸国の監獄を視察する小野田元熙に随行することが決まっていた。ここ一月ほどは、姿を見ていない。嶺岡の言った通り、時代は淡々と流れていく。

二月末のある日、自宅へ戻ると荷が届いていた。ついさっきまで、御厨晁淵が来ていたのだが、と統二郎が言った。細長い桐箱には、手紙も何も添えられていない。

「置いて帰るとは、無愛想な奴だな」

「何やら仕事があるようで、急いでおいででした」

翌三月には、昨年完成したばかりの大劇場「新富座」で、河竹黙阿弥の手になる「綴合於伝仮名書」が上演の運びとなるようである。主役が五代目尾上菊五郎となれば、小芝居とは大いに違った、華やかな趣となるだろう。晁淵も、絵師として某かのお零れに預かっているのかもしれない。

「これは、どうした」

確かに見覚えのある箱である。決して売らぬと言った、伝の姿の美人画だ。

「先生がお持ちになるのが一番だ、とか」

「そう言ったのか」

「はい。先生にそうお伝えしてくれと」

春を思わせる暖かい一日であった。梅の花が開き始めた庭を、吉亮は黙って眺めた。凄惨な伝の処刑が、この頃やとと遠く思えるようになっていた。

持ち上げた桐箱は、軽かった。空である。

さては晁淵に担がれたかと、溜息をついて顔を上げる。女と目が合った。付書院を透けた穏やかな光に照らされて、女の白い顔が浮き上がっている。

(伝)

吉亮の顔に、我知らず笑みが浮かんた。

(ここにいたのか)

懐かしい女に会うような心持ちになった。座り直し、背筋を伸ばして画と向き合う。

見ても見ても、見飽きぬ嬬やかさであった。しばらく見つめて、おや、と思った。この前見たときとは違う。唇に、薄く紅を差していた。柔らかく、穏やかな紅色の唇は、物言いたげに少しだけ開いている。

やはり、伝は美しい女であった。

そして、その紅よりも鮮やかな曼珠沙華が、凜と立って女の小さな足を隠していた。

吉亮は、時を忘れてその姿に見入った。

あなたも 文藝家協会に入ませんか！

公益社団法人日本文藝家協会は創立 90 年を超える文学者団体です。著作権の保護、法律や税務に関する相談、健康保険、文学者の墓、『文藝年鑑』の編集などの活動を続けています。『文藝年鑑』に名前も記載されます。年に一度の総会で、作家の懇親会も催されます。

入会資格は「文芸的著述を主な活動としている」文学者です。プロの作家だけでなく同人誌で活躍されている方にも資格があります。理事などの推薦が必要ですが、活動を証明する同人誌のバックナンバーなどがあれば事務局で紹介します。

会費などの詳細については事務局にお問い合わせください。

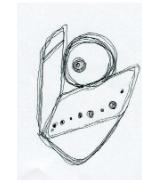
公益社団法人 日本文藝家協会

〒102-8559

東京都千代田区紀尾井町 文藝春秋ビル新館 5F

☎ 03-3265-9657 bungei@bungeika.or.jp

<http://www.bungeika.or.jp/>



世波貴子

よなみ たかこ

広島大学大学院理学研究科博士課程前期修了

医学翻訳家として主に医学・薬学関連の文献、論文、公的文書等の翻訳に携わる

訳書『ネルソン小児科学』（2015 年エルゼビア・ジャパン）『利己的なサル』（2021 年さくら舎）『Move Your DNA その動きが体をつくる！』

（2022 年東洋出版）他

第 20 回九州さが大衆文学賞奨励賞受賞（2013 年）



銀華文学賞 受賞の言葉 世波貴子

この度は銀華文学賞最優秀賞を受賞させていただき、大変光栄に存じます。また、本誌に掲載され多くの方々にお読みいただけることも、嬉しく思います。

歴史小説の受賞は初とのこと、来年以降の本賞にさらに多様なジャンルの作品が集うきっかけになれるでしょうか。小説なんて、言ってみればただの「絵空事」の物語——それをこんなに必死で考えている私って何なの？ と思うこともあります。でも、物語を創り表現することに取り憑かれた同志がこんなにもたくさんいらっしゃると思います。賞はひとつの区切りではありますが、創作の熱が冷めない限り、次に向かう先を選ぶ楽しみは終わりません。

'cause we were never being boring, we were never being bored.

皆様の次回作が、素敵な言葉や色や音に満ちたものになりますように！

琉球の種痘

成瀬健太郎

一八四八（嘉永二）年――。

昨夜来の雨は少し弱まったが、肌寒い。愈々、梅雨入りであった。

まもなく還暦を迎える琉球の首里王府に仕える医家の仲地親雲上紀仁は身震いがおき、慌てて杓元を合わせた。細身の躰に冷えはきついが、寒さばかりでない。無念な気持ちがおもしになっている。椅子から立ち上がり、部屋を歩きながら、いまのままでは人生の終わりを納得して迎えることはできないと胸の裡で呟いた。痛苦に喘ぐ病人に誠意を尽くして施療してきた自負はある。だが、いつもではないしすべてでもなかった。流行病の疱瘡（天然痘）には得心がもてないまま対症療法ばかりで済ませてきた。

があり、躰中に吹き出物がでて膿がにじんでいた。間違はなく疱瘡であった。痛い、痒いと泣き叫ぶ力もないのか、だらりとした手が痙攣して時に掻こうとしている。紅い斑点はすでに鼻から口、喉にまで広がっていた。
「あらんやつさー、躰んかいさわつてうーかん。やーまで移つて死んでなおす」

鳥袋が孫のママに縋る嫁を離そうとするが、泣きじやくるばかりであった。

「ママ、ママーが死んであきしい。なぜやつさつー。いちやしじや」

為す術もなく目の前で息を引き取った。幼子の命を救つてくれなかったと詰る声がひそひそ話の中から聞こえてくる気がして仲地は、いたたまれない気持ちになり両手で耳を覆い、ひたすらうつむいていた。見捨てた。そのつもりはなくても、幼子はなくなった。

「あなたのせいではない。わたしだって救うことができなかった」と、鳥袋から慰められたが、かれはおなじ医家とはいえ、外科医である。鳥袋に幾度も詫びた。あなたが謝ることはないと言されても友人の可愛い盛りの孫の命を救えなかった。無力であった。狼狽え、悶え苦しむ母親の悲痛な叫び声がいまでも耳から離れない。

疱瘡で歿する人のむせび泣く声をなんども耳にし、目の当たりにしてきた。珊瑚の白化を見過ごしているのと

どうにも領ける人生であるはずがない。堅固な城の礎をなす石垣のような疱瘡治療の決め手を見つけられなく情けない。医家として老いて残された時のなさを思い知らされ、寿命を考えると歯痒く焦りもある。心残りだ。仲地はカモの尻尾のような口髭と顎髭を揺らし、大きな目を見開いてひとりごちる。ゴーヤーを丸かじりした苦みがこみ上げてくる。その一方で事を為すのに遅すぎるということはないのではないか、これからなにを為すかだ、という思いがあり、奥歯をかみしめた。

仲地は椅子に座り直し目を瞑った。まだ二月ほど前のことであった。同年配で医家仲間の鳥袋から孫の熱が下がらないと言われて駆けつけた。幼子の顔にはすでに紅い発疹

なじでとめる手立てがない。きちんと向き合うほど施療をし尽くしたのだろうか。

仲地はゆつくりと部屋を見回した。書棚に医術書が並び、花飾りのひとつもない殺風景な空間がひろがっている。仲地がなんとしても知りたい疱瘡の施療に役立つものはない。疱瘡の病は清国、朝鮮、台湾などの交易相手や沿海で漁をする漁民たちが嵐に見舞われて八重山や宮古島、伊平屋島などに漂着して持ち込み、或いは欧米諸国が頻繁に来琉するようになり感染したかれらが持ち込むこともある。琉球の島民は無防備なままさらに危険に晒されてしまっている。ところがそうした疫病に琉球では古い師のユタや時には巫女の霊力を信じ、疱瘡に罹ってもただ祈禱や呪いでやり過ぎたり、硫黄を燃やしてその煙を吸い込ませたりしていた。ユタが母親に泣きわめく子供の躰を赤い実を煎じた水で拭くようにおつげをすれば、母親は言われるままに子供の躰にとり憑いた魔物を追い出そうと必死になって躰をふく。それでも熱はいっこうに収まらない。疱瘡に立ち向かうのはユタやノロによる祈禱ばかりではない。琉球国外から持ち込まれた疱瘡除けのお札には鬼の形相をした武者に疱瘡神が慌てて逃げだす図柄が描かれていたり、「病即消滅 不老不死」と書かれた護符もある。疱瘡にかかり、助かれれば幸運であったが、熱が下がっても痘痕が残る。それはそれでその後に生きていくのに辛いものを背負うことに

なる。

ユタやノロ、それに護符に頼りながら、大方は、疱瘡に罹ったとわかれれば家から引き離れた。医家の中でさえ、近寄るのを拒むものがあるほど感染力は強く、やむなく隔離せざるを得ない。大人でも三人に一人は歿くなるが、体力を失った多くの幼子は数日で逝く。死んだ子供の魂は他の形にふたたび宿ると言われているから、手早く土の中に埋めるが、家の墓ではなく、山の斜面を切り開いた崖葬地だ。やがて白骨化した遺体は十三年後に洗骨して血縁の村の共同の村墓に再葬される。こうして疱瘡に罹った幼子は、ただ見守るばかりの人に哀しくて辛い未練を残してしまうのであった。

だからといって人痘種痘鼻法は、と仲地は思わず呟いた。これとて危険があり、納得できる治療ではない、と。六十年余も前に清国に勉強にいった医家たちもたらし、留学した仲地もこの施術はしている。いくつかの発痘した瘡蓋をこね合わせ粉末にしたものを男は左、女は右の鼻孔に注入する。ところがこねた瘡蓋の飛沫があたりに散乱し、治療したはずの人がふたたび感染して重篤に陥り、やがて死に至ることもあったから、普及するまでに至らず、一部の人々に施されているばかりである。

仲地は、書棚を見つめながら人痘種痘鼻法とは違う牛痘法に思いをはせた。それが正しい治療法なのかどう

か実際の施療について聞いたことはないからいまは確信が持てない。

ユタやノロはいうまでもなく、村人は「牛もーの膿を舂ん中んかにいれればきつと牛もーんかいなつてなしまう」と拒み、漢方医は「発痘が、潜伏している病気を種痘によってうつすことになる。種痘をすることでその感染は数百人に及び、悪液に混らせて血統を汚し、まつりが絶える。つまり子孫が絶えることは国家に不忠であり、先祖に対して不幸ではないか」と牛痘法の害を説く批判書を首里王府に上程していた。それもあって牛痘法はまだ根拠もなく、効能も判然としないと王府は治療を禁止している。仲地は清国在住のメリケン医師、パーカーが来琉した際に紹介した牛痘法を試したいとねがっても、痘苗が手に入らない。噂では長崎の医家も牛痘法に興味を持ち、パーカーから痘苗を手に入れたが日にちが経ちすぎて腐敗していたために成果が得られなかった、と聞いている。牛痘法の効能を確かめたい。仲地は、それが残された時の間に己が為すべきことではないか、と両手で拳を作り、椅子から立ち上がった。しかし、なんとかしなければと焦っても、いい案が浮かばないまま時だけが過ぎていった。

梅雨明けして間もない琉球の夏空は海の色よりもなお青い。辺りを焦がす炎天から降りてきたシーサーが大口を開け、白い道を目をむき、砂煙を舞い上げて追いかけてくる。

仲地は必死になって逃げるが、足がもつれて倒れた。シーサーが襲いかかる。頭を抱えて蹲る。(あ、あつ)絶望的な己の声に愕き、仲地は起き上がった。顔から汗がふき出していた。また、夢だ。思わず呟いたが、うたた寝している間によく見る夢であった。肩息を大仰についたり立ち上がり、汗を拭った。

しばらくして、仲地はふらりと外に出た。医家として家の中で思案を繰り返しても解決策は見つからない。で、どうする、と胸の裡で繰り返しながら、歩き続けた。いつそのことポーターリンを訪ねようかと思いついたが、ふん切りがつかないまま護国寺あたりにさしかかった。

ポーターリンが琉球に上陸してすでに二年がたっている。外科と眼科の医家であるが、なによりも基督教の布教のためにエゲレスの「琉球海軍伝道会」から派遣された牧師である。元々の名前はベッテルハイムというのだが、来琉前の香港で「琉球では王府につながる役人は唐名を持っている。唐名を持っていると仕事やりやすい」と琉球滞在の経験を持つ仲間から忠告を得て、わざわざ伯徳令と名乗っている。ただ、その名前と呼ぶ人は少なく、犬眼鏡と揶揄して呼ばれている。雄雌二匹の犬を連れてきているうえに、眼鏡をかけていたからであった。

この頃の琉球は表向き独立した琉球王朝であり続けたが、内実は薩摩藩の統治下にあった。藩の在番奉行が首里王府

に鎖国を守らせ、基督教を禁じていた。そのため外交の矢面に立つ王府は開国と交易を迫る欧米諸国に青い海の波間に揺れるアーサや海ぶどうのモーイのようにのらりくらりとした応接でぶらかしている。決めない、約束をしないが愛想はいい折衝術は板挟みに遭い、しかも島を護る軍も武器も持たない琉球が卑怯といわれても争いを避ける唯一の方策であった。にこやかにして争わず、だが礼節をもって話し合うほかはないのである。ところが江戸幕府から遠いことを佳い事にして薩摩藩は石臼で挽くように琉球を圧搾した。甘藷からとれる黒糖を精製した砂糖を専売制にして本土で売り捌き、清国との朝貢交易を強要し、琉球から利益を吸い上げているのである。

かつて琉球にはフランス人の宣教師もいたが、国禁の基督教の布教をされては困る王府は香港へ追いやってしまった。おなじようにポーターリンにも執拗に追い出しをかけているが、居座り続けているから、やむなく護国寺に軟禁状態にして閉じ込めてしまった、と仲地は耳にしていた。だから、いくらポーターリンが家賃を支払うと申し立てても受け取らないでいるのは、ひとたび受け取れば、在住を認めたことになるからと言われている。

護国寺は石筍崖と呼ばれる波上なみのうへにあり、王宮から離れた崖上にある。国家鎮守の祈願寺として由緒があり、国王即位後の誓約などが執り行われる格別な儀礼場でもあるか

ら、表向きエゲレスに礼儀を尽くしているといった付度がうかがえる。なによりも辺り一帯は権現や靈廟、仏閣があり、濃密な霊的な宗教色の溢れる地域であり、豊かな靈験のある辺りに閉じ込めてしまえば、異教の基督教さえ封じこめることができるのではないかといった思惑があった。ただ、いまだに王府は早々に引き取ってもらいたいと清国に請願したり、エゲレスにも頼み込んでいるが、まったくもって埒があかないでいた。

西日が眩しく、仲地は額に手をかざして本堂脇にある大看板を見つめた。

「大英国 伯徳令 医生 仁施医局 那覇」。

ポーターリンは専門外の内科の医術にも長けていると聞いている。かれなら牛痘法について知識を持っているかもしれない。ことは琉球の人々の生命に関わる病のためであり、決して己の名譽とか功名心からではないと思っても躊躇い続けていた。王府に仕える身であればこそ逡巡であつた。先の尚育王と現在の尚泰王への忠誠心に揺るぎはない。ただ信に応え、忠義を尽くすのは代々の家訓であり、裏切るなんでもつてのほかであつた。王府が禁止している施術について教えを乞う。しかも、王府が琉球からの退却を迫るのになお居座るポーターリンを訪ねるのはやはり裏切り行為ではないのか、と氣後れた。さて、と胸にくすぶるものを抱えて歩いている裡に寺を通り過ぎた。

琉球の人々の命を救うためではないか、なにを躊躇うことがあるものか。踵を返そうした矢先に背中から声をかけられた。

「やはり、仲地さまでしたか。ひとの氣配に振り返ったらそうでしたので思わずお声をかけてしまいました。こちらへお出かけですか」鳥袋が悪戯を見つけた子供のようにおどけて頸をすくめた。仲地は鳥袋の氣遣いに却って責められている負い目を感じた。

「役立たずで、申し訳なかつた」

「なに、あの子はここで生きておれば、大丈夫です」

鳥袋は胸に手をあて、なんども頷いた。

「ところで、わたしは先ほど、あの寺にいるポーターリンさんの治療を受けてきたのです。己に足りないものはやはり、忌憚なく知っているひとから知恵を得ることにしました。遠慮しては病の人を助けることもできないとしみじみ身に沁みしましたから」

「あ、あ。まさに、おっしゃる通りです」

「少し前に足の骨を折って治療してもらったのです。外科医のわたしが、ですよ。おかしいですか。ですが、どうしてなかなかの腕ですよ。ところで、どうされたのですか。もしかしたら、あの寺にご用でもあつたのではないですか」

「あ、いや、暑さしのぎの氣晴らしに歩いているだけです」

とつさに言い繕ったが、狼狽えてもいた。鳥袋は王府に

仕える身ではないとしても、孫の死をきっかけにあのひとの治療をうけるようになったとあつさりいう。そうでなければならぬ、と思う一方でやはり、と躊躇いがある。そんな仲地の氣持ちを読み取ったのか、鳥袋はひとり得心するように頷いてから、あの丘の上まで歩きましよう、と誘ってきた。

家並みが続く路地を通り抜け、小さな坂を上り下りして蛇の坂道^{ガジヤンビラ}を上がりきると那覇の港を見下ろす小高い丘に出る。鳥袋は杖をつき大儀そうに足を引きずっている。ただひたすらに暑い。二人の医家はしばらく無言で歩き続け、やがて丘にのぼり立つた。見下ろす視線の先に川が広がり、陽を浴びた穏やかな波が黄金色に輝いている。那覇の港におりしも、いくつかの旗をかけた船が停泊しているが、船尾楼にかかっている旗は紛れもなくエゲレスの国旗である。ようやく木陰に入ると微かに風がそよぎ涼しい。吹き出した汗を拭いながら、仲地は口を開いた。

「清国ばかりではなく異国船もずいぶんと来るようになったものです」

「ここはいいですね。わたしは時折り来ているんですよ。新しさを感じますからね。肩の力を抜き少し氣楽に構えたらどうなんです。わたしたちは医家です。なにが大事だと言っても病人を治療して元氣にするのが一番のはずじゃないですか。役立ってこそその医家です」

「だからこそなんです」

「まあ、まあ、そう焦らないで。病人のことを考えるなら、ポーターリンさんに会ってはいかがですか。きょうは三度目の治療を受けてきたのです。西洋ではどう処置するのか、と興味がありました。あははは。西洋流の外科処置のおかげで多少はまだ引きずりますが、歩けるまでに回復しました。治療の腕はまがいものではありませんよ。たしかです」鳥袋に言われたが、王府に務める仲地は護国寺を訪れるのにやはり躊躇している。だが、鳥袋は小太りの丸い顔をほころばせると仲地を煽るように続けた。

「医家としてポーターリンさんの医術がどんなものであるか知っておくのも結構なことではないですか。漢方ばかりではなく、西洋医術もね。医家たるもの、新しい治療法を学び続けたいものです。あのひとのところには外科用の道具もいろいろと揃えてありました。ここでは見かけない剪刀^{カシ}も小刀も曲がりものから直ものもあり、鉗子も大型のものから鳥の嘴^{くちばし}形をしたものや先反など二十ほどの種類がありました。骨鋸^{こつのこ}、切断刀はよほどしっかりしていますし、それに書籍もずいぶんとありました。解剖図の掛軸もあり、仲地さまもぜひ、いちど覗いてはいかがですか」

鳥袋に言われるまでもなく、ひとの命ほど大切なものは他にない。こだわりを捨てなければいけない。とはいえ、王府につかえる医家として王府の縛りに背いてよいのか。

疱瘡の治療法を見つけないければ、いつか王府にも疱瘡が忍び込み、尚泰王の身に及んでも対処する術がない。口には出せないが、まさかオナリ神の聞得大君きこえおおきみの祈願だけで治るとは思えない。はやくしなければ病への対応が手遅れになる。それなのに己に残された時は少ない。禁令を破るとしても将来の王府のためになる、はずであった。

「だが、ごぞんじのようにあのひとは王府と対立しています。大きな声では言えませんが、薩摩藩も目をひかせています。それにあのひとは氣も荒くて、手強いときいています」

「融通がきかなくて依怙地との噂もありますが、案外、生真面目すぎるだけです。まるでシーサーかもしれないですよ」

「な、なんですって。なぜ、シーサーですと」

「見掛けほどには恐ろしくはなくて新しい治療法でむしろ守ってくれそうではないですか。疱瘡だけはいまだにわたしらにも手の施しようがありません。仲地さまがひきだしてくださいませんか」

鳥袋は何気なく口にしたのだろうが、シーサーは大きな目と口を開け、襲ってくる。仲地は家の守り神として祀っているが、その守り神を信じろと言うことか。シーサーがそうしろ、と仕掛けているのではないのか。だからなんども夢に現れる。

鳥袋と別れてからしばらくの時が過ぎた。夏も盛りを過ぎると焼けつく日差しは和らぎ、いくぶん涼風が吹きはじめる。それでも日中はまだ暑さの名残がある。護国寺の境内には首里王府の役人による監視用の番小屋があり、筑佐つくさ事という役人が常駐している。昼日中では監視の目が暑さと共にへばりついて離れないし、仲地が動けば番小屋の役人に邪魔されるに決まっている。仲地は思案を巡らせていたが、意を決して下働きの宗吉になんとか丘の上にあるガマに来てもらえないかとポーテリン宛ての文を託し、護国寺に走らせた。教えを乞うのに、呼び出しをかけるとはひどく礼儀に反することであった。

夕暮れがいつの間にか薄い暗闇に包まれてきた。仲地が息を潜めて木陰に身を隠していると、大きな男が肩で息をしながら、ゆっくりと近づいてきた。闇の中から現れた男の顔が港の灯火のなかに浮き出す。頬骨が出た四角い顔に濃い眉毛。丸い眼鏡をかけているが、眼鏡の奥からのぞく眼は挑みかかるようなそれでいて優しさが漂う。鳥袋が言うように頑固者かもしれない、とあたりをうかがいながら声をかけた。「ポーテリンさんですね」男は頷きながら、「仲地さんですか」と応えた。

「手紙を頂戴して、お役に立てると思いました。妻が番小屋の役人たちにクッキーをふるまっている間に飛び出してきたのです」

「いつも監視の目があり、さぞかし、ご窮屈なことでしょう。わざわざおいでいただきありがとうございます」

仲地はまず、教えを乞うのにわざわざ呼び出して申し訳ありません、と幾重にも非礼を詫言った。そのうえで自分は王府に仕える医家であるとあらためて自己紹介した後、挨拶もそこそこにして直裁に尋ねた。「わたしは医家としてどうしても疱瘡で苦しむ人々を救いたいです。ひどく忌々しい恐ろしい流行病です。わたしは医家はなんとかしなければならぬのになんともできない惨めさと悔しい思いをしています」

「わたしが知る限り、疱瘡は牛痘法でなおせます」

ポーテリンは頬を緩め明確に言い切った。そうと言うだけの効果があるのかいまはまだ分かりかねるが、かれのことばには力強さがあり、誠意がみえた。

「では手短かにお話しましょう。すでにご存知かもしれませんが、牛痘法は」

ポーテリンは牛痘法について、すでに検証された実績がある、とこれまでの牛痘法のあらましを話しはじめた。

もともとエゲレスで牛の搾乳をしている牧場の人たちは膿うみ疱ほうができて重症にはならず、しかも二度と膿疱に罹かからないといわれていた。ジェンナーと言う医家が牧場で牛痘の研究をはじめ、搾乳をしていた女性にできた膿疱を少年に接種し、期待通りの効果を得た。

「それでもエゲレスをはじめ各国がジェンナーの研究成果を認めたのは六年後のことでした。どんなにいいことでもこれまでの慣習を破り、人々に広く認められるには時がかかりました。わたしの耶蘇サマヤソサマはいいいます。『ナンジラ世界ノ光、ヒトノ灯火ヲ辨ノ下ニラカズ、イマノ手ニサシテ、アマネク家ニアルモノヲテラス』。まことに正義だと思えばやりきる信念をもつことです。周りの因習の壁を壊すためにへこたれない忍耐をもち辛抱強く努力を続けなければなりません。焦りは禁物です。そうすればやがて蟻の一穴となりましょう」

「おっしゃるとおりです。鶏の初卵は小さくて殻が固いものです。手に入れるのは容易たやすくありませんが、いつしか殻も薄くなり、形も大きくなっているもの見慣れた卵になります。受け入れられるには、病から救ったという事実を積み重ねることでしょうね。しかし、なによりもまず、その牛痘はどこで、どうすれば手に入るのでしょうか」

「それが問題です。エゲレスから持ち込むには日数が経ちすぎます。では清国から持ち込めばよいのですが、あなたたちはそれを受け取ることができますか。ましてまだ何かも正体がわからぬものです。なにせ異国から物をもらう習慣がありませんからね。となれば、この琉球で探るのが手取り早いのではないですか。膿疱をもつ牛を見つければいいです」

家賃さえ受け取らないではないか、と言ったポーターリンの皮肉を聞き流して仲地は頷きながら応じた。たしかにだが、果たしてそうした牛がこの琉球で見つけられるのかどうか。見つけるまでにまた途方もない時が経ってしまうかもしれない。不安になっていいる仲地にポーターリンはさなる不安を重ねてきた。

「牛とはいえ、雌牛でしかも乳房に膿疱をもつ雌牛でなければなりません。もし見つければ、それが牛痘です。それを取し、子供の腕にうえつけるのです。ただ、うまくいけば接種してから三、四日後に赤い発痘がみられますが、七日までに採取して次の子供に種を植えていかなければ絶えます。牛痘を見つければ先ですが、念には念をいれるというのでその後に種つぎをする子供もあらかじめ確保しておくべきでしょう」

「もう少し長く保存できないのでしょうか」

「駄目でしょう。接種してから七日くらいはもつでしょうがね」

仲地はポーターリンからさらに牛痘の採取の仕方や保存方法、接種の仕方などを教えてもらい、痘瘡の治療になる牛痘法を実際に試したくなった。だが、まずは膿疱をもつ雌牛を見つけれられるかどうかであった。すると、「なによりも強い心を持つていれば、耶蘇サマの御心に叶います。」

『門ヲタケヨ、スナワチ ヒラカレン。ケダシ ヲヨソ

仲地は牛がいると聞けば、東に駆け、西に走った。だが、肝心の牛を一頭たりとも見つけることができず、ことはやはり懸念していたように容易ではないと思ひ知らされた。徒に時ばかりが過ぎていく。挫けそうになると奥歯をかみしめて己を奮い立たせた。膿疱が手に入らなければ治療はできない。なにか妙案はないかと思案をしていた矢先に島袋から話が持ち込まれた。「村を見て回るより、いっそのことこちらに牛を引いてきてもらってはどうかですか。ただし、なにか見合うものを用意しなければいけません、手間ははぶけるのではないですか」

そうできれば仲地にとつては都合がいい。だが、わざわざ遠くから牛を引き連れてくるにはよほどの報奨がなければ話のつてこないだろう。それでも、たしかにたくさん牛をみることはできそうであった。仲地は、宗吉や家のものに謝礼を出すから家まで雌牛を連れてくるように触れて回らせた。ひそかに間切の番所の役人にも手伝ってもらおうと、袖の下を掴ませた。王府は牛痘法を許してはいなかったからである。それでも役人はいったい何事が始まるのか、と訝しうに問いかけるばかりで話はすすまない。しかも百姓たちの間にせつかく飼っている牛を取り上げられるのではないか、税の負担がまた増やされるのではないかといった憶測が飛び交った。仲地はそんな中で必死になって疫病に備えるためだと説得したが、これまでそうし

モトムルモノハ得、タツネルモノハ遭、門ヲタクモノハコレガタメニ ヒラカレン。』まずは目の前にある門を叩くことですよ、仲地さん。あなたなら、できるはずですよ、ポーターリンは目元を綻ばせ励ましてくれた。

「ええ、きつとやり遂げます。ありがとうございました」まだ聞きたいことは幾つもあつたが、あたりがすっかり暗闇に包まれた。今回はとりあえず、ということ仲地はわからないことがあれば、またこの場所で教えてください、と念を押せば「問題ありません」とポーターリンは愛想よく笑みを返した。

仲地はふうーっ、と闇の中に長い息を吐き出した。散々悩んでいたが、案外容易くやり遂げてしまった。家とおなじであつた。魔除けの垣根をよければ、外から内へ誰も気が兼ねなく勝手に入り込むことができる。罪悪感はない。妙な感覚であつたが、一歩を踏み出せば先行きの不安はあつても微かな灯火の揺らぎは見えてきたのであつた。求めれば、ひとつの出会いがひとつのつながりになる。仲地はポーターリンにたしかに背中を押されたのがわかつた。だが、ポーターリンが念を押したくだんの雌牛をどこでどう見つけるかが問題である。それに採取した膿疱を植え付ける子供がいる。子供はたぶん、いざとなればいかようにもできるだろうから、まずは膿疱をもつ牛、しかも雌牛を見つけるのが先決であつた。

た話のために痛い目にあつたといわれ、折角の島袋の申し出であつたが、いくつかの牛を見ただけで頓挫してしまつた。

琉球では豚を沢山飼育している。牛や馬は農耕用に使うためで食用にはしていない。豚でもよほどのことがない限り屠殺はしない。もし牛の代わりに豚で代用できればそれに越したことはないが、かのジェンナーもすでに豚では実験をして効果はなかつたと聞いているから、まずは治験として認められている牛を探すのが賢明な手順であつた。

暑さをいつまでも引きずっていた夏が終わり、つかの間、羽根を休めるために渡り鳥の大群がやってくる。琉球の秋は短い。だが、と仲地は晴れたる天空を見上げた。あの天空を渡らない鳥もいるし、駆けない鳥もいる。やんばるくいなは鳥だが、羽根が小さく飛ぶことはない。それでも生きのびている。躊躇っているより、アガチのようにまずは駆けだし、はねて天敵を追い払うべきではないのか。ひとつずつだ。ポーターリンからも強い心を持つてと言われている。仲地はあらためて執念を燃やした。

膿疱を持つ牛を捜しているという噂はとうに島の北から南まで行き渡つたところになつてようやくひとつの話が伝わってきた。島の最北端の国頭間切の安波村の宇久にいる牛に腫れものができていると思ひがけなく役人から伝えられた。山原とは、と仲地はひとりうなり声をあげた。だが、

仲地にとっては待望の報せであり、緊張が走った。しかし、これまでも話がなかったわけではない。その都度、行つてみれば乳頭の爛れであったり、雌牛ではなく雄牛であったりとしばしば落胆させられてきた。だが、今度は確かに雌牛だという。迷っているだけでは前に進まない。仲地はたしかめるために宇久に出向くことに決め、出立の準備を進めた。ただ問題は雌牛の膿疱を採取して安波村の子供にうえつけ、しかも那覇まで連れ帰るわけにもいかない。というのあのあたりはノロ信仰が根強く牛の膿を舐にいれるといえ、誰もが尻込みしてしまふに違いないからであった。村で説得をするにしてもこずる。そうであれば那覇から種痘をする子供を連れて行くのがより確かになる。すると宗吉が七歳のテラと五歳のミノルのふたりの孫を連れて行く申し出てくれた。

では、旅程はどうするか。宇久はヤンバルの東海岸にある遠い地にある。国頭まで船で行くか、それとも陸路で行くべきなのか。海路ではこの時期、万がいちにも嵐はないとしても海が荒れることはある。より安全で確実にしかも日にちがかからない旅程にすべきであった。陸路を辿るとすればおとなの足で急いでも三日はかかる。ましてや幼児を連れていくから、行きも帰りも倍はかかるとみなければならぬ。安波村で牛痘を採種し、三、四日後に発痘を確かめてから効能のある裡に急いで那覇に戻るとしても途中

で種つぎが必要になる。そのために子供がさらに入り用であった。

仲地は島袋に助力を求めた。すると島袋はなにを躊躇うことがあるものか、と親類筋から三歳の女の子、サホリを探し出してくれた。天然痘で死んだマヤを彷彿させるサホリは人一倍大きな黒い瞳をしたまだあどけなさを類に残したかわい子であった。島袋がどれだけマヤを愛しんでいたか偲ばれる。痘苗をうえるのはテラとサホリに決め、どちらかが発痘したら、戻り路の途中でミノルに種つぎをすることにした。さらに島袋は子供ばかりでなく若い男を連れて行つてはどうか、と提案してくれた。いわれて仲地は、なるほどと頷いた。なにも子供に拘ることはなく、おとなも痘瘡に罹る。それに山道に入ると追いはぎがでるとの噂もあるから、道中に若い者がいるとなにかと心強い。仲地はかつて摩文仁で麻疹を治した男の息子ヒコラに頼もうと早速、宗吉を走らせ、連れてくるように頼んだ。

夜になれば薄ものでは肌寒い。仲地は念のために胴衣の上衣と綿衣を用意したが、宗吉夫婦は別に木綿布を重ねて縫い合わせた暖衣を持った。雨具には雨傘とクバ笠を背負っていくことにした。足元はワラジである。それに百姓には禁制になっているが、足袋も荷物に詰め込んだ。仲地はポーターリンから教えられた痘漿をいれるためのいくつかのガラスの容器をもち、念のために風邪薬や膏薬、傷薬

などの常備薬をもった。

宇久に膿疱を持つ雌牛がいると知らせがあつてからすでに二日がたった。雨雲が張り出している天候も気になったが、いつまでも出立を遅らせるわけにはいかず、翌早朝に発つことにした。近頃の仲地は、足腰が弱ったと自覚しないでもないが今度の旅立ちは大仕事になると覚悟している。旅は宗吉夫婦とテラとミノル、島袋から預かったサホリと母親、それにヒコラと仲地の八人となった。宗吉やヒコラと相談した上で、往きは国頭方東海道をとり、川田から四里ばかり先にある安波までは船で行くことにした。危険は覚悟していても、それくらいなら海上で危ない目に合うのは少ないはずである。

出立の朝は前日までの荒れた天気がつて変わり、季節外れに吹き荒れた風は見事に雨雲を吹き飛ばして青空が広がった。家族の見送りを受けた八人は宿道を歩きだした。薄闇に少しずつ朝陽が差し込んでくる。柔らかな明かりが眩しさをますことに白い道がほのかに紅色に輝き、幸先がいい、と思わせた。だが、気を緩ませるわけにはいかない。果たして期待しているような膿疱牛がみつかるか。仲地の気は急ぐが、足取りは休まず、急かせず気を緩めずに進む。白い道が続いた西原から海岸沿いに出る。まだ歩き始めて間もないが、中城で休むことにした。海沿いを離れると松並木が続き、美里から具志川に出て初日の旅程を終

えた。なんども休みをとったが、気が張っているせいか初日からよく歩いた。宗吉が心配そうに仲地を気遣うが、その気遣いを仲地は肚に力を込め押し返す。久しぶりの遠出に脹脛が凝り、湯につかった後でもみほぐす。一行も疲れがでたのか夕飯を済ませると早々と横になった。

翌日からはしばらく七日浜をはじめ長い砂浜をいく歩渡りが続く。四百年ほど昔、第一尚氏最後の尚徳王らがヤンバルに落ちるのに夜陰にひそみ、紛れて通り抜けるのに七日もかかったという。哀しいが必死になって歩いた切なさを秘めている難儀な道である。潮が満ちてくると海岸に突き出す粗い岩が隠れたり、水に濡れた岩肌足を取られ怪我をする。砂浜でも貝殻などが落ちていたりして決して平坦ではなく厄介である。用心して歩いていかないと危険だ。ヒコラに潮が満ちてくる頃合いをしつかりと見極めるようにと頼み、子供らの面倒を任せているが、一行の足取りは前日よりもはるかに遅くなった。難所のせいばかりではなく、旅の疲れもあり、歩みに遅れが目立ちはじめのもの、やむを得なかった。

浜道を過ぎると、金武の間切りについたから早々に投宿する。夕飯をとるとサホリの元気がない。額に手を当てるとあつい。仲地は念のために風邪薬を飲ませ、厚手のものを羽織らせた。「様子がおかしければ遠慮はしなくてもいいんだよ。」母親はうなずいたが、怯えた顔をみせたか

ら仲地はできるだけ明るい声で念を押した。日中の陽差しは歩いているとうっすらと汗ばむくらいだが、朝晩は風も出て冷え込む。海沿いや日差しの届かない山道で躰が冷えたのだらう。歩き続けた疲れもあったようだ。その夜、サホリの熱は引いてもまたぶり返したりを繰り返した。母親が先に進もうと言い張ったが、仲地は医家としてサホリの容態を大丈夫とは思うものの、急ぎすぎたかも知れないと反省し逸る気持ちを抑え、やはり泊まることにした。その代わり、ヒコラに川田に向い安波村まで運んでくれる舟の手配するように頼んだ。

サホリは玉子入りの粥をとり、ゆっくりと休んだせいか、元氣を取り戻した。ヒコラが手配したヤンバル舟はすでに出帆できる準備を終えていた。安波村まで外洋に出ないまま沿岸沿いに走る。もともとヤンバル舟は人を乗せるのではなく那覇まで荷物を積んで往復する運搬舟である。舟腹を広くとるために甲板は取り払われて舟底は平らである。ふたつの帆をもち、十人乗りの大きさはある。仲地は乗り込むとサホリがまた海風にあたり、風邪をぶり返すといけなからと持ってきた胴衣や暖衣を着せた。

仲地は穏やかに広がる海を眺めた。海には表情があり、どこまでも広がる。水平線の彼方にはいつも新しいものが見つかると期待させるものがある。とはいえ、おいそれと手に入るものではないことは、ひとたび天気が崩れたら

恐ろしく荒れ、求めようとするものを容赦なく遠くにおし流してしまう怖さを潜ませている。仲地はかつて嵐に遭い薩摩にまで流され辛うじて生き延びたことがあった。しかし、山はことに低い山は無愛想で、ただぼうぼうとした緑の塊であるが、海に比べると親しみやすい。琉球は低山ばかり。大方は六百から千尺である。ところがヤンバルに入ると伊湯岳や与那嶺岳、西銘岳など他より多少は高い千三百尺を超える山々が続く。安波村は照首岳の山林が連なり海岸に迫る狭い地域に広がり、安波川と普久川が合流して海に流れ込むあたりにひろがる村である。ウコンの栽培を割りつけられ、木材の切り出しも行われている。狭い村内ながら牛や豚が飼育されている、と仲地は聞きこんでいた。

一行が村に着いたのは那覇をでてから六日目のことであつた。遅くなったが、牛の膿疱に変わりがなかった。祈りながら仲地はさっそく、村長の家に挨拶に行き、那覇からわざわざやってきた訳を話した。「この村にいる雌牛の乳房に膿疱ができていますと聞き、こうしてやってきた次第なのです。それがあれば、この琉球から痘瘡に罹る子供たちを救うことができます」と、縋るように祈りの気持ちを込めた。王府の禁令を犯しているから、役人から聞いたと言いつけない。村長の伊波は仲地より少し年上のようだが、丸顔に目立つ太い眉を寄せ、困惑した顔になった。

「と、言われても、仲地さん、牛のものを躰の中に入れて牛になると聞いています。そんな悪いものを子供の躰に入れるわけにはいかないでしょう。幼い子供を騙してはいけませんよ。牛にするわけにはいきませんからね」

「わたしは医家です。だから、子供を騙すなんてことはしません。それにこの子たちはみんなわたしには身内なのです。かけがえのない子ばかりです。牛はどこにいるのですか」

「折角、はるばるとここまで来なされたが、だめだ、教えられない。そんな非道なことを赦すわけにはいかないよ」

「うむ」仲地は思い切り奥歯を噛んだ。覚悟はしてきたが、根強い因習に負けてはいられない。目的の村に着き、まずは膿疱をもつ牛を確かめなくては先に進めない。仲地は両手をつき、礼を尽くして必死になって説得を試みた。仲地の執念であつた。だが、伊波は頑なに拒む。そのときヒコラがひと膝にじり寄り話した。「わしらの村で命定めといわれている麻疹がはやり、うちの親父の命が危うくなった時、先生に助けられました。ノロの呪いも祈禱も受け、護符もはりつけたりしたけど、よくはならなかったのです。先生は命の恩人なのです。その先生が命を懸けてこのヤンバルまで痘瘡の子供たちを救うために出掛けるというのでわしは是非にとお供をさせてもらっています。ですから、子供にしてはいけないというのなら、わしがそ

の牛の膿をもらいます」

伊波は口を噤み、なにも応えない。折角ここまでやってきて牛をみないで帰るわけにはいかない。どれほどの間であつたのか、仲地は伊波を押しつけて牛探しに出かけるつもりになり、おもむろに立ち上がった。そのとき、女が入ってくると伊波の耳元でなにやら囁いた。聞いていた伊波の顔が険しくなった。伊波が突然、「ついてきなされ」と立ち上がり、歩き出したから、仲地は慌てた。「孫に紅い発疹がでた」えっと、と愕いたが、伊波は先だつて行ってしまう。「ああ、ちょっと待ってください。用意するものがあります。それにこの若者と子供を連れて行き、他の者たちはここで休ませてもらいたいです」

もしや、と発疹が出た伊波の孫の症状も気懸かりだが、仲地は急いで種痘針とガラスの容器を手にしてヒコラとミノルを連れ出した。サホリの風邪は治っていたが、念のためミノルに接種することにしたのであつた。伊波は村のはずれにある農家に声をかけると勝手知っている様子で片隅にある牛舎に入ってしまった。仲地は胸が高鳴った。

広告承ります

文芸思潮への広告ご希望は広告部まで御連絡ください。 ☎〇三・五七〇六・七八四七

仲地は牛舎の中に足を踏み入れた。特有の臭気が鼻についたが、それもすぐに慣れた。三頭の牛が見慣れぬ闖入者に鳴き声をあげながら、ゆっくりとした足取りでえさ場に寄ってくると柵から顔を出した。ひと慣れしている。農家の男が入ってきて、一番奥にいる牛を指さした。仲地は男に従い柵の中に入り、牛の前に立ったが、大きな目が心なしかうるんでいる。身をかがめ、乳房を見た。仲地は、大きくひと息を吸い込み、ゆっくりと吐き出した。「これが」となにも頷いた。目にするのは初めてだが、たしかな膿疱だ。仲地は叫びたくなるのを抑えて牛の乳房に触れた。柔らかく暖かい。

「この牛が疱疹だとしても、死ぬ程は強くない。だから大丈夫だ。ひとの躰にいても牛になることはない。ひとにうつることもない。これで助かる。助かるんだよ」

仲地は、はつきりと伊波と農家の男に言った。そうと聞いても不安気に見つめる男達に牛を抑えるように頼むと、ヒコラとミノルを呼び寄せた。持ってきた種痘針を取り出し、痘液を吸い上げた。まずヒコラに腕をまくるように言い、接種するあたりを拭き赤黒い腕に針を刺した。続いてミノルの腕にもゆっくりとおなじように植えつけた。あとはうまく根つき発痘してくれることを祈るだけである。結果は三日後にわかる。仲地はさらにもつてきたガラス容器にも痘液を掬い上げて流し入れ、蠟ろうでしっかりと封をした。

かみしめ、呻き声をあげた。なぜだ、という疑いはもててもこたえがわからない。ふたたび、うむ、と言ったまま立ち膝をしていた。もしかしたら、あれは膿疱ではなかったのだろうか。ただの湿疹に過ぎなかったのか。いや、そんなことはない、あれはたしかにポーターリンから聞いていた膿疱であった。発痘はポーターリンからも三日から四日後だといわれていた、と思いだした。三日で定めならあと一日ある。仲地は気を取り直すとうやく座り込んだ。ヒコラや宗吉たちが心配げに周りに集まってきたから、仲地は頭をふり、気持ちを奮い立たせた。

「もう、一日様子を見る。たしかにまだ早いかもしれない」

このままですぐのこと帰るわけにはいかない。とはいえ、発痘しなければどうしたらいいのか。ただ、もう一度、膿疱を採取するつもりだが、手順でも間違えたのだろうか。そんなことはないと思いが、ポーターリンから借用した医術書で読んだり、教えられた手順をなぞった。

翌朝は逸る気持ちを抑え、明るくなるとヒコラとミノルを呼び寄せた。他の者達も心配してついていた。いつもの見慣れた腕がある。ひと呼吸置くと仲地はヒコラの袖をまくった。明るい陽差しの下でみてもおなじであった。仲地は目を瞑った。しばらくそのままだったが、ゆっくりと目を開け、祈りを込めてミノルの腕を引き寄せた。ミノルが

仲地は朝に夕にヒコラとミノルの腕を見た。ただふたりとも腕は胴金色をしているから余程気をつけて見ないと小さな紅い斑点は見つけられない。気が焦るほどには変化はない。仲地は発痘を待つ間に伊波の孫を診た。明らかに疱疹の徴候が見える。鳥袋の孫の面影がかさなり、種痘を受けなければ手遅れでなくなってしまうと迫ったが、伊波は接種を拒み続けた。そばにいたノロが胡散臭気に仲地をじつとねめつけている。仲地はそれをはねつけ、もし幼子がいなくなれば魂は他のものに、それこそ牛になって宿るかもしれないですぞ、と半ば脅したが伊波は頸を縦に振らないで、なにを言うかと睨みつけた。

仲地は疱疹がひろがっていないかと村内を歩いたが、まだ広がりにはなかった。その際に種痘を受ければ、疱疹にからなくなると農家の牛飼いの男や村人たちに繰り返し説いた。それでも、では、と進んで種痘を受けようというものはひとりもいなかった。伊波さえ頑なに拒み続けている。三日後の朝だった。いつものように仲地はヒコラとミノルの腕を手にした。震えた。祈った。そしてゆっくりとヒコラの袖をたくし上げた。銅金色した腕には何の変化もなかった。改めて目を凝らして腕を見たが、それらしい兆候さえ見当たらなかった。気落ちしたがミノルの腕をたくし上げるときには目を瞑り、祈りのことばを口にした。いざ、と肚に力を入れ腕をみた。やはりなにもない。仲地は唇を

申し訳なさそうに戸惑いを見せたが、仲地は袖を引き上げた。紅い小さな斑点がある。昨晩に見たときはなかった。仲地は明るい陽差しのある軒下まで連れて行った。そしてふたたび見た。

「ヒコラ」仲地はなお確かめようとヒコラを呼び、宗吉にも見るように言った。

「そうといわれれば、ヒコラが覚束ない声を出した。「なにを言っている。よく見なさい。あるんだよ、あるではないか」仲地の切羽詰まった声が響いた。宗吉は「ええ、たしかにほんの小さな紅い斑点がありますが、それがそうなんですか」

「そうだ、あの小さな紅いものが発痘したものだ。春になってようやく芽を出したばかりのようなものだ。そうか、見えたか」

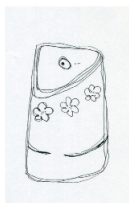
仲地は胸の裡からわき上がる歓びに震えた。これまでの無念な思いがいま報われ、これでまともに疱疹の病に立ち向かうことができる。琉球の人々の命を救い、痘痕あばた顔をなくすことができる。だが、ことはそう簡単にはいかないことは承知している。ただ、その端緒についた。仲地は拳を握りしめた。まだやらなければならないことばかりであった。なによりもまず、伊波の孫になんとしても種痘をしなければならぬ。その上で無事に那覇まで痘苗を持ち帰る。



成瀬健太郎

なるせ けんたろう

1944年生まれ
東北大学文学部卒業
大学在学中にサークル誌や同人誌に現代詩を発表
会社員退職後に地元在住の芥川賞作家宮原昭夫氏の小説教室に学び、創作をはじめ
同人誌などに小説を発表
神奈川県藤沢市在住



銀華文学賞 優秀賞 受賞の言葉 成瀬健太郎

奨励賞受賞から随分と時が経ちました。種々な「場」の提供を頂き、その「場」に参加するべく節目の八十歳を機に再挑戦しました。幕末期、本土の蘭方医らが江戸や地方で種痘を行なっていました。だとしたら鎖国中とはいえ諸外国と接触していた琉球でも行われていたはずで、本土からなにかと切り放される琉球（沖縄）に思いをよせ、小説として書き上げ、幸いにも受賞しました。これを励みにもうひと頑張りするつもりです。ありがとうございます。

仲地はミノルの発痘を見せ、牛になっっていない！と伊波につかみかかり、幼子の母を説得した。いつまでも拒んでいたが、いざ、出立しようとしているところへ伊波が孫を診てくれとやってきた。

「種痘とやらをしてくださらんか」

仲地はうむと頷き、「いいんですね」と念をおす。伊波がゆつくりと頷き返した。仲地は蠟でしつかりと密封したガラス容器を取り出し中にある液痘を種痘針でひと掬いした。孫は怯えた顔をして伊波にしがみついた。仲地はその腕に種痘を施した。

「膿んでくるから、日に二、三度きれいな布でいねいに拭き取ってやってください。そうしている裡に乾いた瘡蓋になります。瘡蓋は無理に剥がそうとしなくてもいいですからね。これで生涯掛けて疱瘡に罹ることはないですよ。決して牛になんぞならないです。ただ、食べてすぐに横になると牛になるかも知れないですけどね。あははは」

伊波が愕いたが、「あ、ははは」と泣き出しそうな顔で笑い出した。帰りは少し急げば五日ばかりで那覇に戻ることもできる。金武の間切りあたりで種つぎをしなければならぬだろうが、テラとサホリがいる。うまく種つぎはできそうであった。仲地は、伊波の孫の様子を見定めるために出立を一日延ばした。

仲地にはもうひとつの出会いであった。たいした出会い

であった、と胸の裡で繰り返した。

こうして仲地は痘苗を那覇に持ち帰ることができた。那覇に戻った仲地は早速ポーターリンに痘苗入手までの経緯を報告し、「諦めないでよかった」と改めて感謝のことはを伝えた。仲地の働きかけや王府の中でも仲地を後押ししてくれる役人もいたから、この年、琉球で初めて種痘が泊那覇、久米村で施術された。だが、それでもまだ漢方医や牛痘法に反対する医家やノロらが「牛痘法不審書」を王府に上程した。王府から大丈夫とのお墨付きが出されて広く普及するようになったのはまだこの先、さらに二十年の歳月を要し、仲地の寿命がつきる間際であった。何事も事を為すには永い時を要するということである。

一方、ポーターリンはこの年から六年後になってようやく米国艦隊を率いるペリー提督と共に琉球を離れ、メリケンに移住することになった。エゲレス本国が「東洋の楽園」と言われた琉球への伝道に見切りをつけたせいもあった。彼なりに琉球語訳の聖書を残し懸命に布教をしたが、信者はひとりも得られなかったせいでもあった。いや、信者になったものもいたがごとく国禁を護る薩摩藩の厳しい監視下にある筑佐事に連れ去れて行方知れずになり、生死さえわからないままになった。

大地の響

～わたしの音楽武者修行～

市原きみ子



青い眼が見た
幕末・明治

12人の日本見聞記を読む

緒方修
ブチャーナンの秘書官
ゴンチャロフ
米国の初代日本総領事
ハリス
ハリスのオランダ人通訳
ヒュースケン
米国の初代駐日公使
オールコック
約25年滞日した英国人外交官
アーネスト・サトウ
イタリアの通商使節
アルミニオン
デンマーク人海軍士官
スェンソン
お笑い打台技師
ブランドン
ロシア人革命家

幕府が崩壊し維新政府が誕生し、そして日露戦争に湧く時代に、日本にのめり込んだ欧米人たちは何を見たのか

ゴンチャロフ、ハリス、ヒュースケン、オールコック、サトウ、ペルツ、イザベラ・バードなど、幕末・明治期、重要なプレイヤーとして振る舞った青い眼の12人が残した日本見聞記を読み解く

芙蓉書房 2200円(税別)

パルス出版 1200円(税別)

線

北島雅弘

僕は生きていることが苦しくて食事が喉を通らなくなった。口に入れても物に味を感じられない。腹も減らない。それで食べることをやめてしまった。もうずっとパンのひとかけらさえ口にしていない。僕は少しずつ痩せ始めた。はじめ五十数キログラムあった体重は、五キログラム減り、十キログラム減り、二十キログラム減った。そうして痩せていった僕はついに一本の黒い線になってしまった。もう僕に体重はない。僕は軽々と、出歩くことができるようになった。

アパートを出て道を歩いて行くと、前から島津くんが歩いてくるのが見えた。島津くんは久しぶりに僕の姿を認めて、「やあ」と声をかけてきた。

「久しぶりだね。外へ出られるようになったんだ。よかったね。」

たね。あれっ、なんだか痩せた？」

「うん。あまり食べられなかったからね。痩せて、ついにこんな一本の線になっちゃったよ」

「あらら、大変だ」

島津くんは僕を上から下まで眺めてあまり大変でもなさそうにそういった。僕はただ頷いた。

「これから出かけかい。どこ行くの」

「わからない。ただ、外へ出てみたけなんだ」

「そうか。そりゃ、いいよ。天気はいいし。ていうより真夏の晴天で暑くてしょうがないんだけどさ。きみは線だからいいよな。太陽の熱を受けなくって」

「そうだね。その点は助かるよ」

「ぜんぜん暑かないだろ」

「ないね。面積がないからね」

「うらやましいよ。僕なんか、ほら、汗びっしょりだ」

彼は素肌に着たTシャツの胸を、親指と人差し指でつまんで見せた。

「でも、線になると困ることもあるんだ」

「ほう、そりゃあなんだい」

「何をしたらいいかわからない。何しろ、線だからね」

「そうかな？ 線だったら、何かと何かを分けるんだろ」

「分けるって？」

「たとえばノートの真ん中に線を引く。そうして左に今日やったこと、右に明日やることを書くとか、あるいは左に何かのメリット、右にデメリットを書くとか」

「そうか」

「きみは何を分けるんだい」

「僕は何を分けるんだろ。考えたことがなかったよ。何を分けたらいいと思う？」

そう問われて、島津くんはしばらく腕組みをして考えていた。

「自分と、自分でないものっていうのはどう？ あ、でも待てよ。自分自身が線になってしまっっては、自分はただ分けるものであって、『自分』ってないわけか」

そういうわれると、確かに僕は「自分」がないような気がした。

「僕は、もうないのかな」

「そりゃあ、ないでしょ。二次元なんだしき。上と下とか、左と右とかしかないんじゃないかな」

「それは困ったな。『自分』を取り戻すにはどうしたらいいんだろ」

「うーん、難しい問題だな」

島津くんは、また僕のことについて首をかしげながら考えてくれた。「そうだ。一つ丸くなって、先端と末端を結んでみたらどうだろう。いわゆる円だね。それで面積がでさるだろ」

「なるほど」

僕は身体を丸めて頭と足をくっつけてみた。円ができた。

「これでどう？ 円ができたよ」

「できたねえ。いいんじゃない。なかなかすてきだよ。面積も得られたし」

「そうかい。でも、僕としては何がどうしたってこともないんだけどな。ドーナツの穴になったみたいで、空疎だよ」

「きみって案外、欲張りなんだね」

「えっ、そう？」

「そうさ。線から面へ。飛躍的な進歩じゃないか。まだ何があるっていうの？」

「何だろう。何か、こう、確たる物が足りないというか、

もう少し満たされてもいいんじゃないかみたいな」

「じゃあ、そのまま日に当たって黒くなったらどう？ 黒い円なら存在感が主張できるじゃないか」

で、僕は太陽の真下で二時間半、身体を焼いてみた。でも僕は黒い円にはならなかった。そりゃあ、そうだ。真ん中は穴なのだから。焼けようがない。

「だめみたい」

僕がそういつたときには、島津くんはもうその場にいなかった。当たり前か。二時間半も、甲羅干ししている僕を見守ってくれるほど彼も暇じゃないだろう。仕方なく、僕はまた背をまっすぐに伸ばして歩き始めた。今度は前方から琴美がやってきた。僕の学校の同級生だが、このところ僕はうちにこもっていて会うのは半年ぶりくらいだった。

「Kくんじゃない。珍しいね、外へ出られたんだ。あれ？ 瘦せた」

「瘦せたよ。見りゃわかるだろ」

「線になっちゃってるじゃん」

「そうだよ。線になったんだ」

「あらら」

琴美は島津くんと同じようなことをいって、気の毒そうに僕を見た。実は僕は一回だけ、琴美と寝たことがある。合コンみたいなことをやって、みんなで飲んだときに二人とも酔っぱらって、自然そういうことになってしまっ

たのだ。気がついたらホテルのベッドの隣に琴美が寝いて、琴美のほうも気がついたら隣に僕が寝ていたというわけだ。したかどうかの記憶すらない。だから決まった相手とか、そういうわけでは全然ないのだが、一回は寝た相手なのでまったくの他人というわけでもないという微妙な関係だ。

「どうして線になんかなっちゃったの？」

「食べなかったからさ」

「食べなかったの？ どうして？」

「食べたくなかったから」

「どうして食べたくなかったの？」

「苦しかったから」

「何が？」

「わからない。何か、僕がここに在ることが苦しかったんだ」

「もう苦しくないの？」

「まあ、今のところは」

「どうやったら苦しくなれるの？」

「どうやったらって？」

「だって、苦しかったら、食べられなくて痩せられるんですよ」

何だ。そういうことだったのか。琴美は僕の心配をしているのではなくて、痩せる方法を知りたかったのだ。そう

いえば半年前より、一割方太ったように見える。中年になったら、きつと肉付きのいい体型になるだろう。その素質充分だ。でも身体に肉が付いた分、なかなか肉感的雰囲気は漂わせていて、今のところは悪くない感じだ。

「きみは悩みとか、ないのか」
「そりゃあ、あるよ。いろいろと」
「それでも食欲は減らないのか」

「悩みがあるとかえって太っちゃう方なの。よけいに食べちゃうから」
「そうか。悩みと苦しみは違うからな」
「へえ、違うんだ。どう違うの？」

「悩みは具体的で、苦しみは抽象的だよ」
「そうかあ」

といって琴美は舌を出して唇の端を舐めた。その舌のピンク色と肉厚が僕に、忘れていたものを思い出させてくれた。もうずっと誰ともしてない。一回寝たよしみで、この際やらせてくれないだろうか。

「これからどこ行くの？」
「図書館。調べ物しに行くの」
「急いでる？」
「ぜんぜん」
「昼ご飯、奢ろうか」
「ホント？」

「もちろん」

「でもきみ、食べられないんじゃないの？」

「僕は見ただけでいいよ。人が食べるところを見ていたんだ。ワインとかも飲んだらいいよ」

「マックとかじゃなくて、そんなちゃんとしたところへ連れて行ってくれるの。嬉しい。このところロクなもの食べてないのよ」

「じゃあ、さっそく行こう」

僕は琴美と並んで歩き始めた。はたから見たら、コーラの壺とニクロム線が並んで歩いているようで、不釣り合いなんだろうなと思いつつながら。

琴美を連れて行ったのはイタリア料理店だった。そこで琴美はスープとサラダとパスタがセットになったランチを食べて、白ワインの小瓶を一本飲んだ。僕はそれをテーブルの反対側からずっと眺めていた。食欲は地球にやってくるニュートリノの質量ほど感じなかった。

「ああ、お昼から飲んだら、なんだか気持ちよくなっちゃった」

「眠くない？」

「お腹いっぱい、けだるい」

「どこかで一休みする？」

「うん。このままどっかで眠れたら最高」

僕は琴美の反応を確かめるようにいったのだが、彼女は

まったくそんなこと気にする様子もなかった。

僕は琴美を連れて、近くのラブホテルに入った。琴美が汗をシャワーで流し、僕は汗もかいていなかったが、一応シャワーを浴びた。

「そういうば、以前にも一回、きみとラブホテルに入ったことあったね」

琴美はシャワーを浴びて、幾分けだるさも軽くなったようだった。

「あつた、あつた。お互い、何でこんなところで寝てるんだろうと思ったよね」

「そうそう」

彼女は笑いながら、ベッドの上で煙草に火をつけた。煙草を取るときに前屈みになったバスローブの胸元から、ピンク色の乳頭が見えた。身体全体がさつき飲んだワインで、薄紅色に染まっていた。僕は琴美が半分ほど煙草を吸うのを待つてからそれを取り上げ、灰皿で揉み消した。そしてバスローブの紐を解き、上からのしかかった。

「軽いね。誰も乗ってないみたい」

首筋に口を付け、それを乳頭にまで這わせたんだけど、彼女は一向に何も感じていないようで、目を開けたまま黙って天井を見ていた。

「感じない？」

「うん。感じない」

「これは？」

「ぜんぜん」

「これも？」

「まったく」

「どうしてだろう」

「だってきみ、線じゃない。無理よ、きっと」

「無理かな」

「無理だと思うよ」

「じゃあ、きみが僕のほうを頼むよ」

琴美が上になって、僕の身体の下の方に顔を移動した。

「ねえ、どうすればいいの」

下から彼女が途方に暮れたような声を出した。ないのだ。一本の線だから、僕は男ですらなくなってしまったのだ。

僕は大きなため息をひとつ付いた。琴美が横に来た。天井の鏡には琴美の肉付きのいい身体の横に細い一本の線が引かれている。

「やっぱりだめなのか」

「だめみたい。気を落とさないでね。そのうちきっとまたできるようになるよ」

「そうかな。そうとも思えないんだけど」

「セックスというコミュニケーションは諦めたほうがいいかも」

そうか。琴美に取ってはセックスもコミュニケーション

なのか、と僕は思った。

「じゃあ、もうきみとコミュニケーションはとれない？」

「セックスだけがコミュニケーションの手段じゃないでしょ」

「それはそうだけど」

「たとえば会話」

「会話ねえ。じゃあ、何を話そう」

「なんでもいいよ」

「僕の不幸な生い立ちとか？」

「そういうどっしりしたものはあまり聞きたくないなあ。軽い会話がいい。当たり障りのない、毒にも薬にもならない会話」

「この間ネットで、500ギガバイトの外付けハードディスクが3500円で売ってたよ。ハードディスクも安くなったものだね」

「そういうこと、あんまりわかんないの」

「そうか。ガンダムは好き？」

琴美は黙って首を横に振った。

「タンノイのスピーカーってわかる？」

また首を横に振る。

「僕たちの共通の話題って何だろう」

「何かしら。学校のこと？」

「授業の話しても面白くないよな」

「そうね。美鈴が中田教授の子供を堕ろしたことは知っている？」

「知らない」

今度は僕が首を横に振った。

「興味ないみたいね」

「あんまり」

琴美は「ふう」とため息をついた。「じゃあ、ちょっと寝てく？ せっかくホテル入ったんだし」

「いや、いいよ。眠くないんだ。もう出よう」

僕たちはそろってホテルを出た。

「じゃあ、あたし、図書館行くから。お昼、ごちそうさままたね」

「うん。じゃ、また」

僕たちはそれぞれ違う方向へ向かって歩き出した。

その道をしばらく歩いて行くと、さっき琴美が噂していた中田教授が茶色のくたびれた鞆を持って前から歩いてきた。すれ違う前に僕と視線があつたが、向こうは知らない顔をして通り過ぎた。僕の顔なんて覚えてないだろう。あるいは線になっちゃってるから気がつかなかったのかも。知らない。さらに歩いて、公園にまで行って、その中にあるベンチに腰を下ろした。夏の日の午後、太陽は斜めから黄色い光であたりを支配し、小さな噴水がいくつか吹き出している水遊び場では下着姿の幼児が何人が遊んでいる。

その脇の木陰に母親らしき女性が数人集まっている。夫は勤めに出ていて、家庭というものの典型的な一場面だ。ああいうものは、もう僕には縁がないものになってしまったのだろうか。この先、線として生きて行くにはどんな覚悟が必要なのだろう。そんなことをベンチに座ってぼんやりと考えた。空には夏の雲があつて、見るからに暑そうだが、暑さ寒さも僕は感じない。食べることも飲むことも必要ない。楽といえば楽かもしれないが、何もないことは楽といっていないだろうか。

そうしたとりとめのないことを考えながら座っているうちに、公園の中には誰もいなくなつて夜がやってきた。それでも僕はベンチに腰掛けたままだった。行くところも、特になかった。学校には、もう飽きていた。家には、もういたくなかった。夜が終わり、東の空が白み初め、朝がやってきて通勤の人々が公園の中を横切つていった。それから昼になり、幼児たちが水遊びを初め、夜になり、朝になり、木の葉の茂つていた緑の木が紅葉を始めて枯れ葉が落ち出し、枝々にすっかり葉がなくなると曇り空からゆつくりと白い破片が落ちてきた。辺り一面がうつすらと白く染まり、青空が現れてそれが溶け、また雪が降つて子供たちが雪だるまを作つて遊び、雪だるまが小さく汚い塊になつて泥に混じつた。そして木々がふたたび芽吹き、緑の葉を付けていったいに葉が茂り、空の上を限りない回数太陽が横断し

て、また何十回目かの秋が来た。僕は線だったのでベンチに座つていても誰も気にしなかった。いろいろな人が僕と同じベンチに座り、立ち去つてはまた腰掛けた。ある日、どこかで見たことがある人が僕と同じベンチに腰を下ろした。

「まだここにいたのか」

島津くんだった。島津くんの頭は薄くなり、背は曲がつて顔にはたくさん皺があつた。

「島津くんか。久しぶり。変わっちゃったんで、わからなかったよ」

「僕はすぐわかつたよ。きみは何も変わらないな」

「線だからね」

「そうだな。相変わらず線だな」

「進歩なしって奴だよ。きみのほうはどう？ 何十年か生きて、何か進歩はあつたかい」

「ないな。何もないよ。歳を取るといことはむしろ、後退することかもしれない。若さだけがすべてで、それが少しずつなくなっていく。ただそれだけだよ」

島津くんは「ごほん、ごほん」と五、六回、痰の絡んだ重い咳をした。

「喘息かい」

「寒くなつてくるとね。いろいろ調子が悪くなる。足腰は痛いし。きみは何も変わらなくていいな」

「そう？ いいと思つたことはないんだけどな。きみのほうは何かいいことあつた？」

「いいことか。そうだな。あつたかもしれない。でもいいことは忘れた。悪いことばかり覚えてるよ」

「どんな人生だった？」

「大学を出て会社に入った」

「うん」

「転職した」

「そうか」

「結婚して、離婚して、子供と別れた」

「ふうん」

「その子供がこのあいだ、四十六で癌で死んだ」

「まだ若いのに」

「孫が二人いる。それだけ」

「幸せな人生とっていいんじゃない」

「そうかね。僕にはそうは感じられない」

「どうして？」

「僕は何を得た？ 僕は何を残してここを立ち去る？」

「昔はそんなこといふことがなかったのにね」

「若い頃は何も考えなくてもいい。若さがある」

「いろいろな人がね、このベンチに座るんだ。いろんな話を聞いた。生きられただけで満足だという人もいたよ。」

『今』に満足しているんだって、その人はいつてた」

「それはけっこうなことだ。僕は明日医者へ行く。週に一回、足の水を抜いてもらいに行くんだ。足に水が溜まる病気でね」

「それはたいへんだな」

「きみは足がないだろう。身体もない。何もないのが一番だ。あればどこかしら悪くなる」

「でも、何もないのも虚しいものだよ」

「あつても虚しいものさ。悪いところがなければそれで満足しなければ」

「そうか」

「そうだ」

島津くんはベンチから立ち上がつて、左足を引きずりながら立ち去つた。そのあとに、一人の浮浪者がやってきて僕を押しつけるようにしてベンチの上に横になった。手枕をして暖かい日光に全身をさらしている。

「何を見ているんだ？」と男は僕に聞いた。

「何って？」

「ずっとここに座つて、何かを見ているじゃないか」

「日々の移り変わり。空気の色が変わったり、歩いて行く人の姿、そんなもの」

「面白いな」

「いや、特に面白いってことは」

「あんた、神か」

「とんでもない。単なる線だよ」

「単なる線か。俺はまたここに神が現れたのかと思った」

「どうしてそんなことを思ったの？」

「神は見続けるものだから」

「そうなの？ 僕、宗教にはあまり縁がないからよくわからないんだけど」

「宗教とは関係ないさ。宗教とは関係なくとも、神はいると考えた方が救いがあるだろう」

「どんな救い？」

「見守られていると感じるだけで救いだ」

「何も手を出さなくても？ 救いの手とか」

「そうだな。分け隔てなく、すべてを見詰め続けてくれるだけでいい。それでなければ、俺や、蟻や、毛虫の人生は何のためにあるのかわからない。蟻や毛虫の人生つても変だけどな」

「そうか。それなら、どうやら僕は見ることはできるといいたいだよ」

「それなら本当に神かもしれないな。俺の死ぬところも見てくれるんだろ」

「この公園の中でならね」

「死ぬときはここへ来るよ。ずっといるんだろ」

「うん。きつと。特に行き場所もないし」

「救われたよ。ありがとう」

「すまないね」

「謝ることないわよ。あなたのせいじゃないもの」

「いつも一人だけど、友達はいないの？」

「そんなのいっぱいいる。私はただ一人の時間を大切にしたいだけ」

「僕が邪魔？ 邪魔なら、きみが来たら公園を出ることにするよ。たまには公園の外を歩くのもいいことだ」

「邪魔じゃないよ。ぜんぜん。線だし」

「そう。それならきみの遊んでる姿を見てもいいんだ」

「七十三回目」女の子がいった。

「なんの回数？」

「私が来た回数。今日で七十三回目。ここへ来始めてからずっと数えてたの」

「きみが初めてこの砂場に来たのは春頃だったよね」

「そうよ。春に引越してきたの。お母さんがお父さんと別れて、二人暮らしを始めたから」

「そうなんだ」

「そうなの。この話、聞きたい？」

「きみが話したければ」

「話したくないよ。全然話したくない。忘れたくらい」

「じゃあ、話さなきゃいい」

「そうする」

女の子のスカートの色は鮮やかな黄で、カーディガンは

人に礼をいつてもらうのなんて、何年ぶりだろう。いや、何十年ぶりかもしれない。何の施しをしたわけでもないのに、奇特的な浮浪者もいたものだ。礼をいわれて、僕はちよつと気持ちよくなった。ベンチに座りっぱなしでも場所を占めない。誰の邪魔にもならないから浮浪者も僕を受け入れてくれるのだろう。僕は生ある限り、ここに座り続けることに決めた。

女の子が座った。七、八歳くらいだろう。よく、その砂場でいろいろなものを作って遊んでいる子だ。いつも一人でやってきて、一人で遊んで、一人で帰って行く。その子は僕とびつたり身体を寄せるようにして腰掛けた。

「あつたかくなーい」

「えっ？」

「身体をくつつけたのにぜんぜんあつたかくない」

「冷たいの？」

「冷たくもない。まわりの空気と同じ温度。冬になれば冷たくなって、夏には熱くなるかも。今は冷たくも熱くもない。きつとあなたには自分の温度というものが無いのね」

また新しい意見だ。何年線であっても、何かしらの発見がある。確かに、線に独自の温度はない。

公園の中の木々はいくらか黄ばみ始めている。日が西に傾いて空気が少しひんやりとしてきた。

「少しはあつたかいかんと思ったのに」

臍脂に近い赤。この季節にふさわしい色合いの服装だ。

「その服、よく似合うね」

女の子は欠けた前歯を見せて、嬉しそうな顔をした。

「ねえ、線さん」

「なに？」

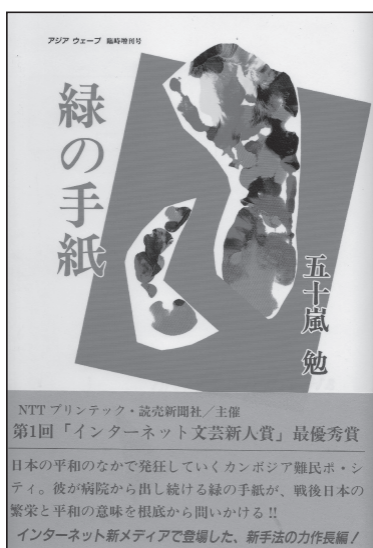
「線さんはいつからここにいるの」

「いつからかな。きみと違って数えるのが苦手なんだ。何年ここに座ってたかも数えてない。でも何十年か、ここに座っているよ」

「ただ座ってるの」

「そう。ただ座ってる。こうして人と話をしたりもするけど、たいていはただ座ってるね」

「何十年も座ってることは、線さんはもう大人なのね」



カンボジア難民の悲劇を描く
1700 円 (税込/送料共)
御注文はアジア文化社まで

「そうだね。大人の時に線になったから、もうお爺さんかもしれない」

「線になったんだ。最初からじゃなくって」

「そうだよ。あるとき、線になったんだ」

「じゃあ、わたしも大人になったら線になれるかな。線になるのに必要なことって何かある？」

「なきにしもあらずなんだけど」

「どういう意味？」

「あるんだけど、大人になればきつと自然にそれにまといつかれると思う。あとはそれから自由になりたいと強く願うことだね」

「なんだかわからないけど、むずかしそう」

「どうして線になりたいの」

女の子は黙り込んでしまった。きつと何か辛いことがあるのだらう。僕はそれ以上尋ねず、隣でただ線のままでいた。「あつ」と女の子がいった。太陽が向こうに見える家の後ろに隠れかけていた。「もう帰るね。お母さんが仕事から帰ってくる頃だから」

女の子は「バイバイ」と手を振って、走って公園を出て行った。その公園の入り口から、入れ替わりのように数人の中学生たちが入ってきた。一人の中学生が、四人の男の中学生に取り巻かれるようにして公園の木陰に立った。その中の一人がまわりを見回して僕の存在に気付いたが、僕

は線だったので誰も僕のことを気に留めなかった。「早く出せよ」

一人の背の高い中学生がいった。大木を背にして、彼らに取り巻かれた真ん中の小柄な中学生はズボンのポケットに手を突っ込んで、千円札を二枚取り出した。それをひたたくように取り上げた一人が、「冗談だろ」といって、拳でその中学生のみぞおちのあたりを殴った。殴られた子は「うっ」といって背中を丸めた。その丸めた背中の上を今度は別の男の子が両手を組み合わせて殴りつけた。男の子は前屈みになって木の根本に座り込んだ。その頭をまた違う子が足で蹴った。

「お前な。こんな額で許してもらえらと思ってるの」

男の子は頭を抱えてうずくまっている。その脇腹や尻を、四人が全員で蹴りつけた。

「明日、いっただけの金を持ってこい。でなきゃお前、パントもなしでここから裸で家に帰ることになるからな」

最後に一人が思いきり横つ腹のあたりを蹴り上げて、四人の中学生は笑いながら立ち去った。残された中学生は小さなうめき声を上げながら、しばらくのあいだ木の下でうずくまっていた。それから少し痛みが引いたのか、顔を上げて誰もいなかったことを確認し、その場で横になって大の字に寝転んだ。中学生は学生鞆を横に置いたまま、ずっとその状態で暮れかかる空の雲を眺めていた。流れる雲を

眺める姿は、僕と一緒にだ。僕は中学生の隣に行って、同じように横になり、雲を見詰めた。

「このあいだね」と中学生が隣でいった。「あいつらに取り囲まれて小便をかけられたよ。みんなが貧弱なチンポ出してさ。僕の顔と身体に小便、かけたんだ。家に帰って風呂で洗ったけど、まだ臭いがするような気がするよ。どう？臭わないかい」

「うん、大丈夫」

「今日もまた同じことをやられるかと思った。それで、これを用意してきたんだ」

男の子は横に置いてあった鞆を開けて、教科書の間に隠れていたカッターを取り出した。ナイフ状に先の尖った、刃先の鋭いカッターだった。「これであいつらのものを全部切り取ってやろうと思ってたんだ。残念だったよ。でも状況をよく考えてみたら、一本は切り取れるとしても、そのあいだに他の奴らはチンポをしまい込んでしまうだろう。そうしたらあと三本は切れなくなってしまう。そこが悩みどころなんだ」

「そうだね。切り取られるのを待ちやしないだろうね」

「そこであなたに僭越なお願いがあるんだけど」

「なに？」

「僕の仕事を手伝ってもらえないかな。後ろからあいつらの両腕を押さえつけて欲しいんだ。僕は奴らが近づけない

ようにカッターを振り回して、隙を見てそいつのを切る。次の奴の両腕を押さえつけてもらってチンポを出してまた切る。そんな風にして四人全員のを切ったら奴らの口にそれを押し込んでやるんだ。そんな汚いものを持っていたとしてもしょうがないからね」

「手伝いたいの山々なんだけど。残念ながら……」

「だよ、わかっているよ。いつてみただけ。あなたが線以上のものでないことは知ってる」

僕は少し、申し訳ないような気がした。線でなければよかったのに、と思うのは久しぶりのことだ。「雲が流れてる雲が流れるっていうことは絶え間なく時間が動いているっていうことだよ。それは飛ばすことも、止めることもできない。結局僕が切れるものはこんなものしかない」

半身を起こした中学生は右手で持ったカッターナイフで、白い左手首を切った。赤い血が流れて、地面に滴った。その手首にはいくつもの切り傷があった。

「時々、すべてが終わったら、と思うことがあるよ」

「僕がきみの力になればね」

「いいんだ。何も気にしてない。あなたはただ見るだけの人なんだから」

この時ほど、僕は自分の無力さを感じたことはなかった。「でもね、きみと僕はこの先何年も話し合うことになるよ」僕は自分が感じたことをいった。

「さあ、それはどうかな。絶え間ない時間の流れの中で、突然何かが起こる可能性だって捨てきれないでしょ」

「何かとはなんだろう？」

「何かとはなにかでしょ。あなたが線以上のものでないように、何かはなにか以上のものじゃない」

血は止まることなく、地面に落ち続けた。かなり深く切ったようだった。中学生の顔が少し青ざめていた。

「血が止まらないね」

「いいことだよ。悪い血が出ていくんだ」

「悪い血？」

「そう。悪い血。臆病で不決断な悪い血だよ。これが全部流れ出してしまえば、カラになった僕が残る。そいつはどんな奴だろう。そいつに僕は期待していいんだろうか」

ふふ、と中学生は笑った。「結局また僕だったたりして。

笑えるね、ほんと、笑えるよ」

僕は黙って彼の横に座っていた。そして僕は線だから、僕がどんな表情をしていたかは誰も窺い知ることとはできない。

「じゃあ」

中学生は身体を起こし、立ち上がった。血は少しは収まったが、まだ指の先から一滴、二滴と地面に落ち続けていた。

「それじゃあ、また」

カッターをしまい込んだ鞆を持った彼が、行きかけよう

「今日は学校、行ったんだろうね？」

「ノーノー、もう学校で学ぶことは何もないんだ」

「何いってんの。アホなくせに」

父は一言。

「このバカ息子」

二人はいつも息子を賞賛してやまない。

学校での俺のあだ名はキンタマというのだ。木俣という俺の名前から付けられたものだが、何のひねりもない月並みな命名である。

その生徒たちに会いたくて、久し振りに勇んで学校に出て行った。

ゴミの詰まった机の前に座って待っていると、教室に担任の教師が入ってきた。彼は生徒のことによく気がつく人で、教壇をはるかに離れた、一番後ろの席に隠れて座っている俺に気がついてくれた。

「お、木俣。珍しいな。きょうはどうしたんだ。みんな覚えてるか。忘れてるだろうな。おい木俣、立ってみなに自己紹介しろ」

俺は立ってウヤウヤしく頭を下げた。

「どうもどうも、わたくし、木俣であります。本日はお足の悪いなか、かくも大勢の方にお集まりいただき恐縮しごくでございます」

「ああ、もういい。座れ座れ」

として振り向いた。

「あ、そうだ。あなたに読んでもらいたいのがあるんだ。あなたにしか見せられないものなんだけど」

「なんだろう」

彼が黒いズボンのポケットに手をつ突っ込んで取り出したものは二枚の紙切れだった。その紙切れを持った手を突き出して、黙って立っている。それを受け取って開いてみた。こんなものが書かれていた。僕はベンチに座って読み始めた。

「日々是好日」

青空は広くて、明るくて、透明で、まるで俺の心の中のようにだ。

「大空を見上げる。そうすれば嫌なことはすべて忘れる」とはある高名な人物の言葉だが、広くて、明るくて、透明な心の俺にとって空を見上げる必要など何もない。俺は貧乏が大好きだし、優秀な教師や、フレンドリーな教室の仲間たちも大好きだ。もちろん、父母だって尊敬している。父はギャンブル好きで、時には生活費のほとんどをスツッてしまい、家には千円札一枚持っていないことがあるというのも愛キョウがあってなかなかかわゆい。母は毎日楽しみにパートに出て行って、気分リフレッシュして帰ってくる。家に帰ってくると決まって俺にこう聞く。

教師は笑いながら上下に手を振った。

昼休みになると、さっそく仲間たちが寄ってくる。

「おい、キンタマ。カネ持ってるか」

「悪いな。現金は持ち歩かない主義なんだ」

すると身体検査。校庭の片隅に行き、殴る蹴る。木の根元に倒れ込む。チャイムの音が響くと、品行方正、まじめな中学生たちは授業を受けに教室へ戻っていく。雨で土まみれ。服の汚れを払い、俺も教室に戻る。ユウジンたちが優しい視線で俺を迎えてくれる。

午後の授業。国語の時間。教師は三十五、六の婆さん。最近二人目の子供が生まれたらしい。

「将来、何になりたいか、職業と理由、二つ書いてね」

俺ははじめに考えた末、「一、天文学者。二、タクシー運転手」と書いた。天文学者は毎日空を見るだけの仕事で楽しそうだったし、タクシー運転手は父の職業で、毎日寝てばかりいられてラクそうだったから。

生徒たちが書いている間、机と机のあいだを歩いていた婆さんが、俺の横に来て立ち止まった。

「あら、天文学者？ 木俣くん、知ってるの、天文学者は大学に行かなければならないのよ。タクシー運転手なら中学卒業でもなれるけどね」

俺の父親は自慢じゃないが中卒だ。婆さん、教育熱心で生徒の家庭のこともよくご存じである。しかしなぜかこの

時ばかりは俺もいささか立腹いたし候。

「婆さん、何が一番だいじだい。赤子をひねり殺すくらいわけないんだぜ」

俺はそういった。しかしもちろん実際には「へへへ」と笑っただけであった。

授業が終わると、またあれだ。楽しいお遊戯。慌てて帰ろうとすると、ほらほら、やってきた。品行方正、まじめな中学生たち。

「キンタマ、キンタマ見せてやれよ」

俺はズボンで脱がされ、パンツも下げられる。これで温泉でもあれば最高ののだが。教室にはまだ生徒たちが残っている。黙って見ているものもあれば、さっさと帰っていくものもある。

「小椋、面白いかい？」

俺を取り巻いている連中の中の一人、はるか昔に友人だった奴に俺は尋ねた。

「黙ってろ。しゃべるな」とリーダーの木下。

お遊戯も、残念ながら今日はここまで。家に帰る。楽しい我が家。賃貸アパート四階建て。これでは役に立たない。近くに十一階建ての市営住宅あり。十一階の眺めはすばらしい。白、黒、灰色。家の屋根ばかり並んでいる。雨もやんで、秋の風が頬をなでる。手摺りに腰掛け、迷っている。と後ろから抱きつかれた。知らないおばさんだ。どうやら

「嬉しいんだとき。これでも笑えるか」

背の高い中学生が股間を蹴り上げた。彼はうめき声を上げながら腹を押さえて屈み込んだ。後頭部をもう一人の中学生が足蹴にした。彼は地面に膝を突いた。そして顔を上げた。

「まだ笑ってやがる」

それから。それから。それから。それが十分ほども続いた。中学生たちが去った後、彼は地面に膝を突いたまま背中を向けて屈んでいた。僕が近づくと、彼は顔を上げた。

「ほんとだ。また会えた。嬉しいよ」

鼻血が出ていた。彼はそれを手の甲で拭いた。中学生は身体を起こしてその場に座り込んだ。僕もその隣に腰を下ろした。「他人は変わらない。それは期待しても無駄なことだ。誰も変わらない。絶対に変わらない。結局、自分が変わるしかないんだ。そんなことに今ごろ気づいたよ。僕は馬鹿だね」

「一生、気がつかない人もいるよ」

「木の葉っぱが紅葉しかけている。それも今気がついたんだ。空気の色、木々の色、砂の色。それぞれが何万年もの年を経て今にいたっている。それらの色を単純に水色だ、茶だ、白だとはいえない。世界は何百万色もの色で溢れているんだ」

「そうだね」

若い男が好きらしい。

惜しかった。空は見上げる必要はない。空の上から見下ろせばいいと思ったのに。

僕はそれを読んで、紙を丁寧に四つに畳んで彼に手渡した。

「もう一度いけど、きみと僕はこれから何度も会うことになる」

「予言？」

「勘だよ」

「そうなんだ。あなたがいうんなら、きっとそうなるんでしよう」

僕たちは並んで黙ってベンチに座っていた。雀が足下まで来て、何かに驚いたように飛び立った。

「ねえ」

「何？」

「あなたはなぜ線なの」

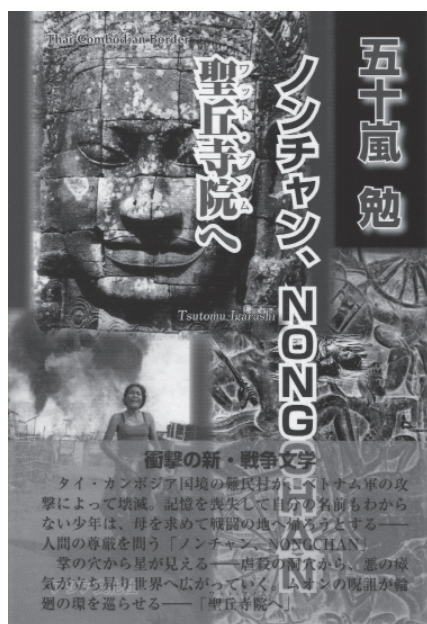
それは僕にもわからなかった。それでわからないと答えるしかなかった。

数日後、また同じくらいの時間に彼と、男の中学生たちがやってきた。そしてこの間と同じことが始まった。彼は殴られながら笑っていた。額に、眉根を寄せながら。

「なんだ、こいつ。笑ってやがる」

「さてと」

中学生は腰を上げて、服とズボンに付いた汚れを両手でパンパンとはいたした。「もう行くよ。あ、この間ね、線さんの夢を見たよ。線さんがね、僕にいろいろなことをいっぱい話してくれるんだけど、僕にはその言葉の意味が全然わからないんだ。僕が一生懸命線さんの話に耳を傾けていると、知らないうちに時が過ぎて、もう何十年も経っているのに線さんはまだ話し続けている。僕が困ったなあと、頭を掻いた時、それまで中学生だった僕が突然白髪の老人になって、線さんのいつていることをすべて理解するんだ。僕はそうだったんだと思って目を覚ますんだけど、目が覚めたら線さんが何をいつていたのか全然覚えてなかった」



五十嵐勉のカンボジア難民小説集
1700円 アジア文化社まで



北島雅弘

きたじま まさひろ

1953 年生まれ
小学校、中学校、ずっと不登校
なんとか中学を卒業し、私立の工業高
校へ
機械工になるべく研鑽を積む
高校卒業後、名古屋市の行政職職員に
なる
十年ほど勤めて退職
商売を始める
まだやっている



銀華文学賞 優秀賞 受賞の言葉 北島雅弘

優秀賞をいただきありがとうございます。
軽いタッチの作品なので、あまり評価はされないのでは
ないかと思っていました。
この作品は精神的に不安定になり体重が十キロ近く減っ
た時に書きました。
薬を飲むようになってから体重も以前より増え、今は平
和な気持ちで過ごしています。食べるものがうまいのでそ
のうちカバのように太ってしまうかもしれません。
そうしたら今度は「カバ」という作品でも書いてみよう
かなと思っています。

はは、と僕は笑った。

「僕にはそんな難しい話はできないよ。僕はただ一本の線
だからね。でも、今度きみが来た時には何か面白い話がで
きるように努力するよ。」といった僕が実際に経験した話
じゃなく、みんなから聞いた話ばかりなんだけどね」
「楽しみにしてるよ。じゃあまた今度ね」

「また今度」

僕たちはそうやって別れ、それから彼は時々僕のところ
にやってくるようになった。例のごとくあの中学生たちに
連れられて来ることもあったし、ぶらりと一人でやって来
ることもあった。そうして彼が一人で来る回数がだんだん
増えてきて、ある日を境にあの中学生たちと一緒に来るこ
とはぱたりとなくなった。彼と最後に会ったのは、彼が
高校を卒業して遠い学校へ行く前の晩のことだった。

「長いことありがとう」と彼はいった。

「いやいや、僕の方こそ」

「いろいろ助けてもらって」

「当てつけじゃないよね」

「まさか」

「じゃあいいんだけど」

「いつまでここにいろの？」

「さあ、いつまでなんだろう。僕にもわからない。きっと
いつかは時に浸食され、色あせて消えてゆくんだろうね」

「機会があったらまた来るよ」

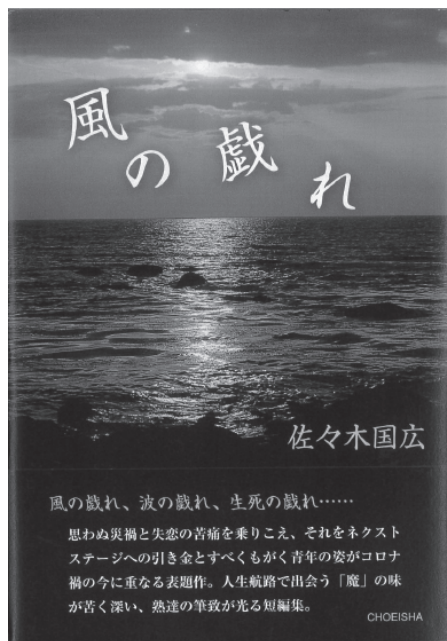
「うん、待ってるよ」

それ以来、彼とは会っていない。どこにいても、何があつ
ても、彼なら乗り越えられるのじゃないかなと僕は思っ
ている。

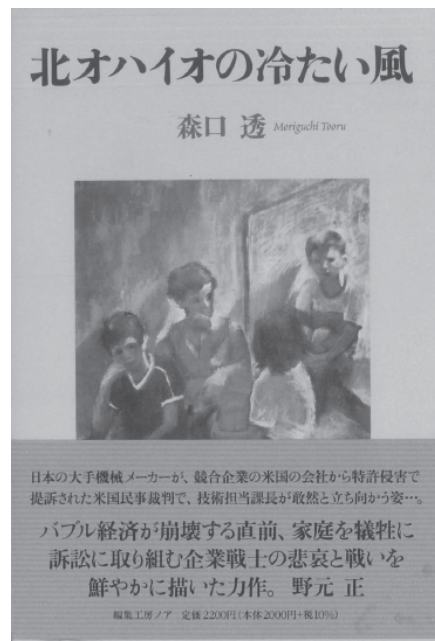
以前、僕のところによってきた砂場で遊んでいた女の子
は大人になり、仕事の帰り道などに時々この公園内を横
切った。彼女は僕と目が合うと、微かに笑って会釈した。

浮浪者は約束通り最期にこの公園にやってきて、僕はそ
の死を看取った。看取ったといっても、僕はただ死んでい
く彼の姿を眺めていたにすぎないんだけど。彼の最後は
思ったより安らかなものだった。皮肉というわけじゃなく、
どこの医者にかかることもなく、ただ生かされるためだけ
に手術されたり、たこ足配線みたいなパイプにつながれ
たりしなかったのがよかったのだろう。きっとこれが自然の
死なのだと思えるような死だった。

それから百年が過ぎ、千年が過ぎ、一万年が過ぎた。公
園は造成されてその上に家が建ち、家は取り壊されて道路
になり、その道路は朽ち果ててあたりは深い深い緑で覆わ
れた。周りの景色はすっかり変わってしまったけれど、僕
は相変わらず線のままだった。ただ、線。それ以上でも、
それ以下でもない。ただ単なる線だった。



佐々木国広短編集「風の戯れ」
鳥影社 本体価格 1,500 円



森口透（「あべの文学」）
「北オハイオの冷たい風」
編集工房ノア 本体価格 1,900 円

梯子の上のチベット

遊座理恵

一 妻の死

ヒロシの妻は、正月明けの寒い朝、突然亡くなった。洗面所から大きな音がして、何事かと見に行くと妻の清香が倒れていた。救急車を呼んだが、病院に着いた時には、もう息をしていなかった。あとのことはヒロシはほとんど覚えていない。通夜も葬式も家の一階に住んでいるヒロシの米寿の母と独身の姉が取り仕切ってくれた。

子供もいなかったし、清香はフルタイムで働く薬剤師でいつも忙しく、ケンカしたわけではないが、ほとんど話も

しない夫婦になっていた。それでも突然亡くなってみれば寂しくて、心にポッカリ穴が空いたようだった。ヒロシは母と姉がせっかく作ってくれた食事もほとんど手を付けず、二階で酒ばかり飲んで過ごしていた。

葬式も終わって二週間ほど経った頃だ。親戚の出入りや事務的な手続きなども済んで、ようやく少し落ち着いてきたある朝、充電したままの清香のスマホが微かに鳴った。ラインかメールが届いたようだった。清香の友達には亡くなったことは知らせたし、葬式にも来てくれた。だから、まだ亡くなったことを知らない仕事関係の人かもしれない。ヒロシは妻とはいえ他人のスマホを見るのは少

しためらったが、連絡洩れの人に説明する気持ちで画面を見た。ラインが来ていた。開くとケンという相手から

『今、どこ？ まさか槍ヶ岳に行つてないよね？ 今日には新宿で待ち合わせだよ』

という内容だった。プロフィール画像はケン自身の写真ではなくて、山の写真だった。ヒロシは驚いた。誰だ、ケンって？ 槍ヶ岳？ 新宿で待ち合わせ？ 何のことだ？

じっと画面を見つめていると、次の文面が届いた。

『何かあった？ なぜ返事くれないの？ ボクのこと、怒ってる？』

ヒロシはいきなり血が逆流した。ボクって言うからには絶対男だ。誰なんだ、こいつは。ヒロシは困惑と怒りで混乱しながら、画面を見続けていた。すると

『どうしたの？ ライン、読んでくれてるよね？ ボクも今日は帰る。大丈夫だよ。機嫌直してね。でも、来週は、槍ヶ岳で会おうね』

そして、クマがバイバイと手を振っている絵文字。なんと、来週、槍ヶ岳で会うつもりらしい。スマホを持っているヒロシの手がぶるぶる震えた。ヒロシは清香のスマホを探索し始めた。まずは、ラインのケンとの過去のやり取りを見ようと思ったがすべて削除されていて、何もわからなかった。スマホの電話の履歴にもなかった。しかしスマホの電話帳を開くと藤嶋健という名前が登録してあった。登

録されていた住所は練馬区で、ヒロシの家のある杉並区の隣の区だった。一応住所の場所をグーグルマップで見ていることにした。ヒロシとしては、こんなことをする自分が情けなかったが、どうしても自分を抑えることが出来なかった。

グーグルの写真を見ると、二階建ての非常に古い和風家屋だった。元は風格ある料亭のような家だったかもしれないが今は屋根が波打ち、樋も所々はずれて、家全体が今にも崩れ落ちそうだった。しかしヒロシはこの家を見た瞬間、これは清香の好みだ、と直感した。

清香の好みは「古くて壊れなかったもの」「錆びて崩れそうなもの」「枯れかかった花や熟しきった柿」などだった。清香と旅行に行くと、廃校になった昔の小学校の校舎とか、錆びた鉄の橋とか、崩れそうな藁ぶきの家などを、うっとり眺めていることがよくあった。どうしてそんな物に惹かれるのかとヒロシが聞くと「中身にすぐ触れるような気がして安心するのよ」と言っていた。ヒロシはそれがどんな意味かわからなかったが、清香の趣味としては納得していた。でも実際に家建てる時はヒロシの選んだ住宅メーカーの現代的な家に不満を言ったことはなかったし、食器や家具も新しい物ばかりで、清香の好みの壊れかかった骨董品を並べるようなことはしていなかった。だから、ヒロシは清香の趣味は知ってはいたが、日常生活を侵食するほ

どの執心ではないかと思っていた。でも、それは、もしかしたら違っていたのかもしれない。清香は、自分の好みの家に住むケンという男を気に入っていたのかもしれない。これは嫉妬というのかもしれないと思った。ヒロシはすぐにもこの家に行ってみたいと思ったが、まだかろうじて残っている理性がヒロシを引き留めた。

しかし次の日、ヒロシの理性は消えていた。朝の九時、ヒロシはスマホでグーグルマップを見ながら家を出ていた。ヒロシの家の最寄りの駅はJR阿佐ヶ谷駅、そこからバスに乗って、さらに私鉄に乗り換えて某駅で降り、そこから徒歩十分。住宅地のわかりにくい細い道を歩いた。やがて、まさに写真の通りの家の前に着いた。門の横に錆びだらけの郵便受けが二つ並んでいて、一つは田中、もう一つには藤嶋と太字のマジックで書いた紙がセロテープで貼ってあった。一軒の家に二つの名字ということは、親類同士なのか、どちらかが間借りでもしているのか、わからなかった。門の引き戸が開けっ放しなので、首をつつ込んで見てみた。すると、門から二メートルくらい先に、すりガラスの引き戸の玄関があって、玄関の向かって右側は朽ちた縁側がぶら下がっていて明治時代のような格子窓が並んでいた。向かって左側は小さな庭になっていてその先には隣家との塀があった。庭には錆びた鉄の梯子のような、手すり

のない外階段が、一階の屋根までかかっていた。いったい何の設備なのだろうとヒロシはしばらく眺めていた。雪深い土地ならば雪下ろしの梯子^{ハシゴ}ということも考えられるが、東京でそんな梯子は必要ない。二階の窓から出る非常口なのかもしれない。もっと詳しく確かめたかったが、門の中に入るわけにもいかず、ちょっと残念だった。すると、玄関から、真つ白な長い髪を束ねた百歳くらいの腰の曲がったお婆さんが出て来た。ギョツとしてヒロシが後ずさると

「ケンちゃん？ ああ、違った。ごめんなさいね、わたし、目が、よく見えないのよ」

気さくに話しかけてきた。ヒロシは一瞬で、家を見るだけでなくケンにも会おうと覚悟を決めた。

「藤嶋さん、いらっしやいますか？」

「あなた、ケンちゃんの知り合いなの？ ちょっと出かけたけど、どうせ近所よ。すぐ戻ってくるから待ってたらいいわ」

お婆さんの物言いは、この家の主人らしい言い方だった。さらにお婆さんは

「部屋はね、その庭から階段を上って、すぐ右。屋根から直接入れるわ。階段の上の方に腰かけて待つてなさいよ。見晴らしがいいのよ。いつもケンちゃんのお客さんが来ると、そうしてるから」

梯子のような外階段を指さすのだった。この梯子の上にはケンの部屋があるようだった。この階段が何なのか確かめたかったヒロシは嬉しかった。お婆さんは用事があるのか、そのまま外に出て行った。お婆さんの後ろ姿が見えなくなるとヒロシは庭に入って錆びた鉄の階段を上り始めた。手すりはなし、急勾配で、ヒロシは階段に身体を付けて一段一段用心深く登った。まったく登山道に付けられている梯子のようだった。そのまま上まで行くと、梯子がかかっている部分から一・五メートル四方くらい、瓦ではなくトタン葺きの平らな屋根になっていた。何も支えになりそうな物はなかったの、手を伸ばして這いつくばって何とか平らになっているその屋根の上に立った。すると、たった一階分の高さを登っただけなのに、青い空が広々と見えた。山の頂上のような感覚だった。お婆さんが言ったように、見晴らしが良くて、近所の公園の緑、さらに遠くには山も見えた。遠くだけでなく、隣家の庭で洗濯物を干していたお婆さんがヒロシを見上げていたのも見えた。目が合うと、意外に愛想よく会釈してくれたのでヒロシも首をちよっと下げた。普通は屋根に人がいたら驚くのに、見慣れている感じだった。それにしても、不思議な造りの家だった。肝心な部屋への入り口、というものがなかった。二階の羽目板部分に直径一メートルくらいの大きな丸窓があるだけだった。しかし丸窓をよく見ると下半分が外からも開閉できるように

取っ手がついていた。この窓が入り口といえれば入り口なのかもしれない。開けてみようかとちよっと取っ手を引き上げようとしたが、内側から鍵がかかっているのか、動かなかった。このままここで待っていようと思った。しかし、一・五メートル四方の平らなトタン屋根というだけで、柵も何もないから、何かあったら真つ逆さまに落ちるなあと考えた。何かあったら、というのは、ケンと殴り合うことを心のどこかで想定していたのかもしれない。ヒロシは、今日はここまでと決めて、また急勾配の鉄の梯子を下りた。下りながら、まったく登山道の梯子のようだった。

そして、気が付いたのだった。檜ヶ岳というのは、このことではないだろうか？ 檜ヶ岳で会うというのは、ここで会うという事ではないのか？ そもそも清香の登山は真冬の北アルプス登山をするような実力派ではなく、花の百名山を楽しむ、という程度だった。だから一月の今、来週、雪の檜ヶ岳で会うという約束など出来るはずはないのだった。このケンという人の部屋を『檜ヶ岳』という二人の間の秘密の暗号で言っていたのではないか。ラインの『今日は檜ヶ岳ではないよ。新宿だよ』というのは、今日はこの部屋ではなく、新宿で会ってどこかに行くということではないのか。また、『来週、檜ヶ岳で』というのは、来週はこの部屋で会うつもり、ということではないか。こんな暗号を使って不倫していたのか。ヒロシは全身がカッと熱く

なった。気が付いたら、何十年ぶりかで全速力で帰りの道を走っていた。

ヒロシ自身は本物の槍ヶ岳には何度か登っていた。父親の仕事の都合で中学から高校卒業まで、高山という北アルプスの玄関口の町で暮らしていたからだ。この町の子供は北アルプスの山々に、何かと学校行事で登ることになっていた。だから槍ヶ岳の頂上は槍の部分の急勾配を鉄の梯子と鎖でよじ登る、ということも何度か体験していた。それを思い出すと、あの部屋の梯子は、槍ヶ岳の梯子の感じに似てくもなかった。山で知り合った二人が、そんな秘密の合言葉で会っていたということだろうか。

ヒロシは家に戻っても、逆上した気分は収まらなかった。それで、清香とヒロシとの共通の友人の、篠原恵理子に電話をしてみることにした。恵理子はヒロシと大学時代の友達で、三人で一緒によく山に登っていた。まったく共通の友人で、清香のこともよく知っているから、清香の浮気について聞くのに最適だとヒロシは思った。ヒロシは電話で恵理子の声を聞くや、清香のラインを見たことや、浮気相手と思われる男の家に行ったことや、その家が槍ヶ岳の梯子そっくりの階段が付いていた話とか、洗いざらい話したのだった。恵理子は聞き終わると

「それってラインの誤送信じゃない？ ああ清香さんに男

ていた。ヒロシはこんな時はこんな返事をしようと心のどこかで思っていたかのように、けっこう落ち着いて返信をした。

「ゴメン。転んで足首を捻挫しちゃった（泣く）。あなたの家のあの急な階段、登れない」

「えっ！ 大丈夫？ 痛い？ もちろん今日は槍ヶ岳、お休みね」

「あなたの方から来ない？ 阿佐ヶ谷の改札口で待ってるよー」

「ボクに来说うの？」

「うん。午後二時頃、どうかな？」

「本気で言ってるの？」

「もちろん！」

「了解！」

クマがバイバイしている絵文字が来た。ヒロシは逆上している自分を抑えながら、何とかラインのやり取りを済ませた。やっぱり清香には男がいたのだ。「あなたの家の、あの急な階段、登れない」と書いたら「今日は槍ヶ岳、お休みね」という返事が来たわけだ。槍ヶ岳を暗号にしている者にしかわからないやり取りだった。

ヒロシは二時少し前に改札口に着いた。見まわしたが、女の人ばかりで、男は誰もいなかった。そのまま暗くなるまでヒロシは改札口をうろうろしていたが、たまに人待ち

がいるわけないもん。白衣着て真面目で清潔で、絶対に浮気なんかしないって。それより春になったら、栃木の石楠花の山に行かない？ 気分転換した方がいいよ」

明るく春の登山計画の話が始めたのだった。しだいにヒロシの気持ちも切り替えられて、落ち着いてきた。もともと、恵理子は姉御肌で、まるでヒロシの姉のような感じで付き合ってきたのだった。清香の控え目で静かな雰囲気恵理子も気に入っていて、家に遊びに来たり、三人で山に行ったりしていた。ヒロシは電話を切った時には、春山に登る楽しい計画が胸に広がっていて、ほとんど清香の浮気について考えることを止めていた。たしかにラインの誤送信はたまにあることだ。恵理子の言う通り、真面目な清香に男がいるわけなかった。

しかし、一週間後、やはり同じようにラインを知らせる微かな音が聞こえたのだ。そしてそれは、やはりケンからだった。

「どうしたの？ 何かあったの？ もう、二時間も待ってるよ。昨日、薬局に行ったけど、君の姿は見えなかった。店の人に聞こうかと思ったけど、迷惑かけるといけないと思って、我慢した」

誤送信ではなかったのだ。清香が薬局に勤めているのを知っているからには、相手は清香とわかってラインしているのだ。しかしヒロシは自分で思っていたよりは落ち着い

顔の男がいても、やがて待ち合わせの相手が来て、ケンではなかった。ヒロシはあきらめて、帰った。家に着くと全身の力が抜けて、居間のソファから動けなかった。

それ以来、ケンからのラインは来ない。ヤツは阿佐ヶ谷には来たのだろうか？ 何かラインの文面から清香ではないと感じて、来なかったのか？ ヒロシは悶々としたが『槍ヶ岳』の家に再び行ってみようとは思わなかった。無視することが、自分の誇りのような気がしていた。

さらに一か月後の二月末、高山の中学、高校時代の友達の川上良彦が家にやってきた。

「おさびし見舞いだよ」

言いながら、うどんをヒロシに渡した。

「うどん？」

「飛騨では、葬式とか納骨とか終わって、ちょうど一番寂しい頃に『おさびし見舞い』って、うどんを持っていくんだよ。どうして、うどんなのかは、知らないけど」

「飛騨って優しいなあ」

「ヒロシも、飛騨人だよ」

「中学から高校まで、おやじの転勤の間だけ、たった六年間だよ」

「一番、大事な時期やさ。その時期におれば、はや、飛騨人やでな」

良彦の優しい飛驒弁を聞くと、ヒロシは思いがけず号泣してしまった。良彦は

「飲んだらええやさ、なあ」

言いながらウドンその他に持ってきた飛驒の酒の一升瓶を、どぼどぼとコップに注いだ。ヒロシは恵理子には清香のことを洗いざらい話したのに、良彦には話していなかった。

男同士の見栄で、妻に裏切られたとは、口が裂けても言えないと思っていた。なのに、酒を飲み進めるうちに、少しずつ少しずつ、結局すべて話していたのだった。

「ヒロシの気のせいや。あの真面目な清香さんが浮気するわけない」

「じゃあ、見てくれよ」

ヒロシはスマホの画面を良彦に見せたが、ケンからの文面はすべて削除されていた。

「あれ？」

「清香さんのスマホ、勝手に見るのはやめな」

「確かにあったんだけど。オレからののは残っているから、やっぱり事実だ」

「もう、よせ」

「自分がみつともないことはわかってる」

「もうこの話、やめよう。おれたち夫婦にとっても清香さんは良い友達だった。四人で会うの、とっても楽しかった。亡くなっても清香さんは大事な友達だ」

ヒロシは、うなずいた。しかし真つ黒な疑念の塊がグワツと込み上げてきてしまうのだった。ヒロシにとって清香は、

恋人時代のような気持ちは薄れて、ただの同居人というような感じになっていた。正直言って、突然亡くなった喪失感は大きかったが、後を追って死にたい、などとは全然思わなかった。だからどうしてこんなに嫉妬してしまうのか、

ヒロシにもわからなかった。苦しくて気が狂いそうだった。良彦はヒロシのそんな複雑な気持ちまではわからなかったが、ヒロシに付き合っただけで夜遅くまで一緒に飲み続けた。

二 ヒマラヤ行

良彦は家に戻って、妻の佐知子に一部始終を話した。どんなに佐知子が驚くかと思ったのに、佐知子は

「清香さんはヒロシさんのワガママをずっと我慢してたからね。清香さんに好きな人がいたのかと思うと、むしろホツとするわ」

思いがけないことを言うのだった。

「ヒロシのどこがワガママなんだ？ 逆だよ、ヒロシはいつも誰にでも親切で優しいよ」

「誰にでも、というところが問題よ。日頃あまり優しくされてない女にもヒロシさんは優しいから、そういう女は自分分はヒロシさんにとって特別な女だと思ってしまうのよ」

自分の物が取られて苦しいだけ」

佐知子の辛辣な言葉に、良彦は何か言い返したかったが、言えはもつと怒られそうなので、ぐつと言葉を飲み込んだ。

良彦は、佐知子を絶対に怒らせてはならない事情があった。良彦は二カ月後の四月末、ヒマラヤに三週間ほど行く予定だった。良彦の仕事は佐知子と一緒に設計事務所を経営しているのだが、ヒマラヤに行っている間の仕事は佐知子に全て任せきりになる。佐知子の機嫌を損ねるわけにはいかないのだった。

今回のヒマラヤは大学山岳部の先輩の百川が声を掛けてくれたのだ。百川は、大学卒業後は山に近い長野県の市役所に定年まで勤め、長野山岳会に所属してヒマラヤの山々に何度も登っていた。元大学山岳部の仲間の中でも、もつとも山男らしい暮らしを続けられていた。今回の計画も百川のちよつと遅めの還暦祝いのヒマラヤ行きだった。

その計画は、五千メートル級の氷河キャンプの他にチベット仏教寺院見学も含まれていて、全部で六人、みなヒマラヤ経験者だった。寺院巡りがメニューに入ったのは、メンバーの一人の宮本が早期退職をして仏教の大学院に進学していたからだ。せつかくチベットに行くならチベット仏教の寺院にも行こうと、百川に勧めたということだった。百川も還暦を過ぎて少し考えるところがあった、その話に乗ったのだった。良彦はチベット仏教には興味はなくて、

氷河キャンプだけが楽しみだった。しかし、ここで良彦はヒロシを誘ってみようかと思い始めたのだった。あんなに苦しんでいるのだから、ヒマラヤの大きな自然に包まれれば気分転換になるし、チベット仏教とはどんなものかは知らないが、仏教は仏教なのだから、救われるかもしれないと思ったのだ。

まずはリーダーの百川に電話で聞いてみた。すると百川は

「ヒマラヤ経験者限定だよ。ヒマラヤ経験がないと高山病になってしまうから、ダメだよ」

にべもなかった。しかし数日後、百川から

「先日の話だけど、君の友達、もし行きたいなら一緒にどうかと思ってね。登山は無理でも、麓のホテルに待機していればいいから」

という電話があった。一緒に行く予定の一人が目の緊急手術をすることになり、ヒマラヤに行けなくなったのだ。

もう旅行社も六人ということで手配済みだから、代わりの人が行ければ助かるというのだった。良彦は、運命が動き始めたように思った。

良彦はヒロシに気分転換を勧めて誘うと、すぐに乗ってきた。良彦はホッとして、百川にヒロシを紹介し、無事にヒロシをメンバーに入れることが出来た。それからは順調に手続きも進んだ。メンバーの六人は五十代後半から六十

代で、市役所でまだ非常勤で働いている百川、フリーライターのヒロシ、設計事務所経営の良彦、仏教の大学院に行っている宮本、ペンション経営者の長谷川、山の写真家の前田だった。ヒロシ以外は同じ大学山岳部の先輩後輩だった。

三 チベットの空

そしていよいよ四月末、中国の成都に向かったのだった。成田空港で良彦はヒロシに

「ヒマラヤの空を見ると、この世のイヤなこと、すべて忘れるよ」

小声でささやいた。ちょうど、大学院でチベット仏教を勉強している宮本が近くにいて

「この世の全てを忘れますよ。別世界だから」

微笑みながら言うのだった。まるでこれから行くチベットという所が桃源郷のように二人は言った。しかしヒロシの予備知識では決してそんな夢のような所とは思えなかった。むしろ世界でも指折りの過酷な場所ではないかと思っていた。第一には『チベット』という国は今はないのだ。一九五九年に中国に併合されて、統治者のダライ・ラマはインドに亡命して今に至っている。チベット仏教も、中国共産党に弾圧されて、修行していた多くの僧侶もいなくなり、今では寺院の建物しか残っていないようだ。気楽にお

寺巡りなど出来るのだろうか。第二には、標高の高さが半端ではないことだ。ヒロシも山は好きで、富士山は毎年一

回くらいは登っていたが、チベットの首府ラサの標高が三六五〇メートル、すでに富士山と同じくらいだ。途中の車での峠越えでも、五〇〇メートル近い所がある。富士山でも空気が薄くて喘いでいるのに、耐えられるだろうか。

今回の旅行は中国の成都に着いたら、そこからは貸し切りのバスに乗り、車窓からヒマラヤの名峰を眺めたり、途中で降りてはチベット寺院を見学したりするのだった。そしてシャングリラという町に出たらまた飛行機に乗りラサを目指す、というのが前半の十日間。後半の十日間は、ラサからバスで三日がかりでキャンプ予定地のラロンパー氷河に行き、ラロンパー氷河から三時間ほど登った所で一回目のキャンプ。翌日はさらに六時間登ったところで二回目のキャンプ。そこから下山したあとは、また次のヤルン氷河を目指して二泊。そこから町に出てようやく飛行機に乗り成都に戻ることだった。成都からは来た時と同じように、ホテルに一泊し翌日には飛行機で日本に帰る、という旅程だった。

まずは無事に中国の成都に着いた。そこからは旅行社の人や通訳の人も参加して、貸し切りバスに乗りこんだ。車窓から見える成都の街は新宿高層ビル群のようで、初めて中国に来たヒロシはただ驚いていた。良彦も前に来たのは

二〇一〇年で

「今から九年も前だもの、全然変わったよ」

やっぱり驚いていた。

バスは六時間ほど走ると山間部に入り、ぐんぐん登り始め、最初の晩は摩西という街のホテルで泊まった。翌日からさらにバスは登りに登って、途中で七五五六メートルのミニヤコンカを眺めながら折多山峠を越えて新都橋で一泊。さらに次の日は四四三〇メートルのカツェラ峠に向かった。天気は曇りで、あたりの景色は何も見えなかった。峠の小休止でバスを降りると、ヤクが何頭も草を食んでいた。良い画題になると思ってヒロシは写生をしようとしたが、標高四四三〇メートルの薄い空気の中、息はハアハア喘ぎ、立っているのがやっとだった。

しかしその時、宮本がヒロシの傍らに来て

「ほら、巡礼の夫婦ですよ。これからラサまでの一七〇〇キロ、歩いて行くんですよ」

指さした。指さした方を見ると、普通のダウンのコートを着て、小さな手荷物をそれぞれ持った夫婦が、ストックもなしに山道を歩いていた。バスで乗って来ただけでも、息が喘いで頭もフラフラしているのに、さらにこれから同じような山道をラサまでの一七〇〇キロを歩いて行くとは信じられなかった。

「まさか！ 登山用の服や靴じゃないし。ラサまで標高

五千メートルの峠道もあるのに。絶対に無理だ」

「いや、それでも、ラサに行くの。それが巡礼。信仰のために生きるのがチベットの人生き方だから」

ヒロシは、ボンヤリしていた頭をいきなりガツンと殴られたような気がした。そんなにまでして巡礼する意味って何なのだろう？

「信仰すると何か願いが叶うのですか？」

「さうじて思っていますよ。歩くだけではなくて、五体投地しながらラサを目指す人もいます。五体投地って、身体を地面に投げ出して祈って、それから立ち上がって祈って、また身体を投げ出して、って繰り返しながら進むんですよ。腕立て伏せしながら身体一つ分ずつ進むようなものです。もうそうなると、願いを叶えるためというより、苦行そのものが目的だとは思えない」

腕立て伏せしながら一七〇〇キロ先のラサまで行く？

いよいよヒロシは何もわからなくなってきた。しかし巡礼の姿が見えなくなるまで、どうしても目を離せなかった。

さらにそれからバスで四、五千メートル級の峠を越えては降りるを繰り返して数日後、大きなチベット仏教の寺院に着いた。古く枯れ切った木造の日本の寺とはまったく違って、金色の大屋根、赤や金や緑の下派手な色を塗った

くった七階建ての巨大な石の城のような建物だった。チベット仏教には四つの大きな宗派があるのだが、この寺院はその中で一番大きなゲルク派という宗派の寺院だった。

開祖、ツォンカパという人の三十五メートルもある巨大な像が立っていた。仏像も日本では見たこともない金色の肌に極彩色の衣装を着て、真っ赤な口が裂けていて額の真ん中にも目がある三つ目の女神がいた。足で別の神を踏みつぶし、顔が無数にあるどんぐり目の仏様もいた。そして何よりもヒロシが驚愕したのは、カーラチャクラ尊という三つ目の四つの顔と二十四本の腕を持った巨大な裸体の男神と、その妃のやはり裸体のヴィシユヴァマーラーという女神が向かい合って立ったまま抱擁している男女合体の仏像だった。カーラチャクラ尊はガシツと黒く逞しい腕で妃を抱いていた。足を開いて抱かれています女神は真っ白な肌で、背中から腰にかけて裸体を隠すような布はなく、女神の背後から男神の金色の睾丸が見えていた。男神の足は異教の神々を踏みつぶしている。沢山の手には豪華な飾りのついた武器や花などを持っている、非常に多くのメッセージが込められているということだけはヒロシにもわかったが、とにかくグロテスクだった。日本の古色蒼然とした静かな表情の仏像から受けるメッセージとは全然異質だった。なのに、いきなりヒロシは切なさがこみあげてきた。突然、清香を思い出したのだ。女神の真っ白な肌から清香を連想

したのかもしれない。抱き合う男女神から目には見えないエネルギーが降り注いで、すっかり忘れていた若いころの清香との性愛が急に蘇ったのかもしれない。ヒロシは涙が目から吹き上がるようにこぼれて来た。しばらく、どうしようもなく、ただ涙が止まるのを待っていた。誰にも、清香を渡したくなかった。二人で一つだったはずだ。しかし、それなのに、清香が裏切っていたとしたら。またヒロシの心に黒い疑惑が込み上げて来た。涙は止まった。気が付くと宮本が隣にそっと立っていた。ヒロシは恥ずかしくな

って、宮本にさりげなく話しかけた。

「激しい仏様ですね。これが仏教なんて信じられないですよ。欲望を捨て去ること、特に男女の愛欲を捨て去ることが仏道の第一歩だと思ってたから」

「違いますよ。これは愛欲の姿ではないんです。究極の悟りの象徴なんです。宇宙の頂点です。仏教の教えを最終段階までつき進めていくと、この男女尊のお姿になるんです」

何やら意味深い話なので、ヒロシがもつと聞こうとすると、百川がやってきて、

「立ったままやっている最中だな。すごいな」

指さして、大笑いするのだった。宮本は困った顔して、その場を離れた。ヒロシも清香のことは、また心深くに封じ込めて、その場を離れた。

その後、マイクロバスに乗ると、百川が急に激しい頭痛

を訴えた。熱も高く、バスの中で横になり、動けなくなっていました。風邪をひいたと百川は言っていた。しかし良彦は

「高山病だよ。ヒマラヤ経験者なのにねえ」

笑いながら小声で言った。宮本も

「仏像指さして笑ったりしたからだよ」

罰が当たったというようヒロシに囁いた。

次の日は、朝八時にマイクロバスで出発して、徳欽へ向かった。途中、六七四〇メートルの梅里雪山を眺める予定だったが、厚い雲に覆われて何も見えなかった。その日もほとんど標高三、四〇〇〇メートルの移動で、バスの中でも息苦しく、沿道は今日から五月なのに広大な雪原が広

「文芸思潮」は下記の書店でも
店頭販売されております。

【東京】

ジュンク堂池袋本店

紀伊國屋書店新宿本店

【山梨】

山梨朗月堂書店

【大阪】

MARUZEN&ジュンク堂梅田店

【インターネット】

アマゾン

がつていた。それでもヤクがたくさん放牧されていて、こんな過酷な環境で日々暮らしている人々がいるのだとヒロシは思った。気温は車内は温かったが、小休止で止まった峠は氷雨が降っていた。寒くて、厚い雲で何も見えず、空気は薄く、吸っても吸っても肺に入ってこなかった。人が生きられる限界だと思った。なのに、タルチョクという五色の祈りの旗がびっしり雨に濡れていて、ここを多くの巡礼の人がいつも通っているのだとわかった。ヒロシは先日見た巡礼の夫婦を思い出していた。あの夫婦はこの氷雨の中を今はどのあたりを歩いているのだろうか。生まれた時からこの土地で暮らしていると、こんな空気が薄くても慣れてしまって、全然苦しくないのだろうか。いくら慣れても、ヒロシもチベットの人も同じ人間という身体だ。人間の身体としての絶対の限界というものはあるだろう。この土地は、絶対の限界が身近に迫っている土地だと思った。緑も水も豊かにある日本の自然の中で暮らしているのと、存在出来るギリギリで暮らしているのでは、存在に対しての姿勢が根本から違うのではないか、などとヒロシは考えていた。すると、宮本が傍らに来て話しかけて来た。

「息、苦しいですか？」

「苦しいです。吸っても吸っても肺に入ってきません。チベットの人たちですごくですね。こんな薄い空気の中で暮らしているのだから。やっぱりこんな厳しい自然の中で

生きていると、日本人より生と死についての感覚が鋭いかなって考えてました」

「そうなんです。チベットの人は遠い先に死があるのでなくて、生と死は実はびったり隣り合わせだと感覚で知っているのかもしれない。だから、存在とは何か、を突き詰められたのだと思います。元々にそういう哲学力があつたから、チベット仏教が成立出来たんでしょう。西暦千二百年くらいに、インドの仏教はイスラムに滅ばれます。その時チベットは、インドから逃げて来た高僧を引き受けて、全ての経典をチベット語に翻訳したんです。元々のチベット語が思索的だから、インド哲学を全て翻訳できないでしょ。お経はみんな漢文だ。哲学的な言葉は漢語に頼るしかないんです。インド哲学を訳せる言葉そのものが日本語にはないから」

「意外ですね。こう言つては悪いけど、チベットはアジアの後進国だと思つていました。もともと今では、国でさえないけど」

「千年前、日本の平安時代頃、チベットが唐に勝つたこともあるんですよ。未来に何があるか、まだわかりませんよ」

この極限の地にいると、今が、途方もない壮大な時間のほんの一部であることをヒロシは自然に実感していた。

その夜は、シャングリラという所のホテルだった。ヒロシは

良彦と一緒に宮本の部屋に行き、仏教の話を知ろうと思った。これくらいよいようサに行くのだから、予備知識が欲しかったのだ。宮本は機嫌よく部屋に招き入れてくれた。ヒロシは開口一番、昨日の男女仏について尋ねた。

「昨日のお寺の男女仏ですが、どうして悟りの象徴なんですか？ 仏教、何も知らないんです。釈迦が作ったってことしか知らない」

「うーん。仏教って、キリスト教みたいに天地創造の神がいるわけじゃないんですよ。真理なんです。釈迦は仏教を作ったのではなくて、その真理を伝えた人ですかね」

「真理？ かえって難しいですね」

「ええ、難しいですね。話は逸れますけど、僕は、高校生の息子が事故で急死して、それで仏教の勉強を始めたんです。息子が突然死んで、何かしようって意欲が全くなくなつてしまつてね。仕事も辞めてしまいました。救われたくて、それで仏教の大学院に社会人枠で入りました。学校だからね、救われるって感じにはなりませんでしたけど、だんだん勉強は面白くなってきました。仏教って、宗教らしくないんです。存在とは何か、という事とことん追求していくんです。釈迦には『生起する性質のものはすべて滅び去る性質のものである』という教えがあります。つまり、生じたものは必ずなくなるってことで、これは有機物だけじゃなくて無機物もね。石のかたまりだって、いつかはな

くなるでしょ。それから釈迦が亡くなって五百年くらい経つと龍樹という人の『中論』という教えが広まります。どんな教えかと言うと『すべてのものは独立固有の実体性はなく、空である』というの。どんな意味かっていうと、旋火輪の例えって有名ながありますよ。松明をぐるぐる回すと火の輪が見えるけど、実際にあるのは刻々と移動している一つの松明だという話。人間も一つの形に見えるけど、実際には動き続けるエネルギーがたまたま形に見えるだけってことかと僕は思いました。つまり僕たちが物物として思っているのは、形や色や動きなどの顕れで、本当の実体というのではない、ってことです。でも、そうは言つてもね、僕はここにいないわけだし、息子はいないわけです。だから、理屈としての仏教は面白いけど、救われるわけではないと思いました。ところが、息子はいたんです」

「ここからは、笑い飛ばしてもいいですよ。一昨年のことです。妻の姪が子供を連れて遊びに来ました。四歳の、幼稚園に入ったばかりの男の子。すぐに飽きてしまったから、僕は庭に連れて出たんです。四月末で、庭の二本のハナミズキが満開でした。そうしたらその坊やが『あの時は重かったね』って言ったんです。二本のハナミズキの木は、息子がまだ生きていた頃、僕と息子と二人で植木屋で買った物なんです。まだ細い苗木だったから、一本ずつ持つて家に帰りました。でも、苗木でも、意外に重かったんです。僕

も息子も『重い、重い』って言いながら家に着いて、二人で植えたんです。それだけのことで、息子と僕だけしか知らないことです。なのに、姪の子供が、それをスラッと言ったんです。僕はその子に『なんで知ってるの?』って聞こうとして顔をのぞき込みました。そうしたら、その子が僕をじっと見たんです。僕の目と合って、そうしたら、もう、お互い目が離せないんです。息子の目でした。あんまり懐かしくて、目が離せませんでした。一分くらいだったか、もっと長くて五分くらいか、僕は息子と見つめ合っていました」

「しばらくして、元の子の目に戻っていました。それから、時々遊びに来てくれますが、いくら目を見ても、その子の目のままです。でもたまにチラッと振り返った時、息子の目で笑っていることがあります。気のせいだと言われてもいいんです。でも僕はそれ以来、息子はこの世に見えないけれど魂はずっとこの世と繋がっている、って思っています」

「先ほどお話ししたように、仏教では、この世のすべては宇宙のエネルギーが形や色や動きとして顕れているだけで、それを実体だと人は錯覚している、と説いているわけです。ではその宇宙エネルギーは何か、というところで諸説あります。すべては虚無だ、という考え方もあれば、いや無でもなく有でもない中間の何かだ、という考え方もあります。

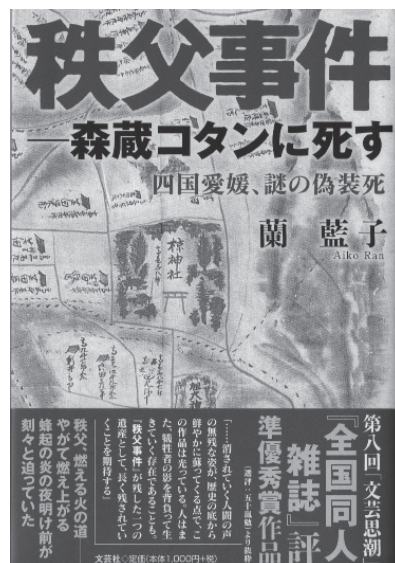
ともあるのか、いちいち頷きながら聞いていた。しかしヒロシは途惑っていた。あまりに今までのヒロシの考えとかけ離れていて、ついていけなかったのだ。ヒロシにとってのこの世は、映画のスクリーンのような感じで、登場人物が画面から消えればそれで終わりだと納得するしかない世界だった。だから宮本の、この世は宇宙エネルギーの顕れで、そのエネルギーに肉体を捨てて合一する事が至福である、というのは全然わからなかった。ただ宮本が命がけで息子を愛していた、という熱い気持ちはよくわかった。そしてこの世というところはそんな命がけの真剣なエネルギーが渦巻いているところで、それが宇宙の壮大なエネルギーと繋がっている、という感覚も何となくわかった。そう思うと、映画のスクリーンのように平面だったこの世が、もう少し立体的で生々しい物に変身したような感じになった。それくらいだったが、今までとは何かが少し違う感じにはなっていた。

翌日は飛行機でラサに飛んだ。飛行機から降りると、カダという白い絹のマフラーのような布を首に掛けてもらった。飛行機からはまた専用マイクロバスで高速道路を六〇キロ、約一時間でラサに着いた。神秘の秘境のイメージだったのに、高層ビルがぎっしり建っていた。しかし次の日の早朝、ヒロシは散歩に街へ出て、ポタラ宮に着いた。すると

そしてさらにその先には、壮大な宇宙エネルギーと自分が一つになることを目指す密教というのがあります。チベット仏教は密教の中の密教で、最後まで突き詰めた頂点の教えなんです。あらゆる仏典を何十年も勉強して、ヨガによって肉体の器官や機能を知り尽くして、自分の意志で肉体をコントロール出来るまで肉体を追いつめます。そんな修行の最後に、肉体が消えて、仏性という清らかな魂だけになり、宇宙エネルギーと一体になるんです。最後の修行で、男女仏を瞑想します。これは実際に女性と合体するのではなく、観想するだけです。どうして、男女なのかといえば、一体化の象徴だからです。宇宙エネルギーと合一するというのは、男女の性愛の、狂うほど一つになりたい気持ちと恍惚感に一番近いからかもしれません。それは幸福の極み、宇宙の頂点という事でしよう。そういう性愛ではないですが、僕が息子に会いたいという一心が宇宙のエネルギーを引き寄せて、姪の子供に息子の魂が一瞬宿ったのかも知れないと、勝手に僕は考えています。僕には至福の時でした。それで今は、せつかくこんな体験が出来たのだから、魂が肉体を突き抜けるまで修行して、いつか完全に時空を超えて宇宙エネルギーと合体したいって思っています。恍惚の極み、宇宙の頂点です。変な話だと思われるでしょうね。笑ってください」

良彦はヒマラヤ登山などで、神秘的な体験をしてきたこ

こちに五人、あつちに十人と朝の五体投地をしている人たちがいた。まさに老若男女、若い人たちもあるし、かなり年取ったお爺さんお婆さんもいた。長座布団のような敷物を敷いて、手にグローブのようなものをはめ、ザッと地に身を投げ出して、祈りながら立ち上がって行く。五体投地は、動きとして見れば、激しい腕立て伏せだ。そんな腕立て伏せを百八回、こんな空氣の薄い所で人々は黙々と続けているのだ。昨日の宮本の話聞いていなければ、チベット仏教やチベットの人々のことをただの好奇心で眺めていたとヒロシは思った。宮本から教えてもらったおかげで、五体投地を続ける人たちの求道の心に畏れと尊敬を感じていた。本気で宇宙との合一を祈る人々がこんなに沢山いる。他に何も望んでいない人々たちを見ると、ヒロ



シは自分も今までより清浄な生活を目指さなければと思うのだった。妻の浮気など何ほどのこともない、この世で何かあったとしても、もう妻は死んでいるのだから、自分は清浄な世界を目指したいと思った。

こうして、旅行の前半が終わり、あとは予定通りの氷河キャンプだったが、どういうわけか季節外れの吹雪が続き、すべて取りやめになった。代わりにチベット寺院ばかり拝観することになり、山男たちはがっかりしていたが、ヒロシは充分満足出来たチベット旅行となったのだった。

四 槍ヶ岳の家

ヒロシのチベット旅行は終わり、いつものような日常生活が戻った。やがて、七月になり、清香の新盆も近くなった。ヒロシはまた、あの槍ヶ岳の家に行ってみようと思った。チベットで、もつと清浄な生活を目指そうと思った身としては、事実は事実として受け止め、宇宙の大きな視点から許したいと思った。ヒロシはケンと会って話すつもりだった。新盆の七月十五日に行くことにした。

前回通りのコースを辿って、ヒロシはケンの家の前に着いた。着いたはずだった。でも、そこには家はなかった。きれいに整地された空き地があるだけだった。ヒロシは、驚いて声もなかった。あたりは静かな住宅地で、誰も道路

を歩いていない。ヒロシは、隣の家のインターフォンを勇気を出して押してみた。奥さんらしい人の声がして、隣の藤嶋の知り合いだと言うと、出てきてくれた。あの藤嶋の家から出て来たお婆さんよりは若い、落ち着いた感じの中年の女の人で、不審そうにヒロシを見つめた。けれどヒロシが名字の沢田を名のと、奥さんの顔はパツと明るくなった。

「沢田さんって、沢田清香さんの？」

「清香は妻ですが。ご存知なんですか？」

「もちろんですよ。わたしも清香さんがケンちゃんの所に来た時は、持病の薬の相談とかいろいろお世話になってましたから」

「薬の相談？ どういうことですか？」

それから隣の奥さんは、ヒロシが思ってもいなかったことを話し始めた。清香は薬剤師として定期的にケンの薬を持って来ていた、というのだった。しかもなぜわざわざ薬を持って来ていたかといえは

「藤嶋さんは四十才くらいから難しい病気になってしまっ
てねえ。もう十年以上になるかな。身体がだんだん動かなくなってきたの。ここ数年は車椅子だったんですよ」

と言うのだった。ヒロシは驚いた。清香は身体の不自由な人に薬を届けていたのだ。浮気ではなかったのだ。浮気だと思い込んで、藤嶋を許そうなどと偉そうに思ってた今日

は来たのに。ヒロシが立ちずくんでいると奥さんはさらに話し続けた。

「清香さんは薬を持ってきてくれるだけじゃなくて、車椅子を押してケンちゃんを都心の美術館や映画館にも連れて行ってたのよ。田中さんはありがたいて言っていましたよ。田中さんはね、ケンちゃんの母方の伯母さん。ケンちゃんの両親が亡くなったんで中学生くらいから一緒に暮らしてたのよ。わたしもお隣だから、その頃からずっと知っていました。ケンちゃんは山男で、就職した後も、よく大きなリュック背負って出かけてました。山が恋人で結婚しないって田中さんが嘆いてましたっけ。そんな元気だったのに病気になるってしまっただけ。それから家は家の中に閉じこもっていて、誰とも会わなくなったのよ。でも、清香さんが来るようになってからはすっかり明るくなったわ。清香さんはあの屋根にかかっている外階段を山の梯子みたいって気に入って、いつも梯子を登って丸窓を叩いて、窓から家に入るの。時々、ケンちゃんを窓から引つ張り出して、階段にすわって一緒に遠くの山を眺めてました。ケンちゃんにとつて、それがどんな大事な時間だったか。なのに、清香さんが亡くなったって聞いてね。すごくショックだったの。清香さんは、ケンちゃんの女神様だったから」

「そうだったんですか……。それで、家がなくなってますが、藤嶋さんは今どこに？」

「ケンちゃんは今もういません。ケンちゃんは食べるのをやめちゃったの。それで亡くなったの。田中さんは認知症が進んでいたからケンちゃんが食べなくなっているのにも気がつかなかった。それどころか、亡くなったことにも気がつかなかったの。伯母さんだけじゃない、誰も気が付かなかった。ケンちゃんは清香さん以外の外部の人とほとんど付き合わなかったから。わたしも、清香さんが亡くなって来なくなったから、またケンちゃんは閉じこもってしまった、と思っていました。でもそのうちコヤシみたいな臭いがしてきてね。嫌な予感がして、それでわたしは警察に連絡したんです。ケンちゃんは四月の末くらいには亡くなっていたって警察の人が言っていましたよ。警察が田中さんの弟さんに連絡してね、その人が後始末を全部してくれました。田中さんは施設にはいって、すぐに亡くなったそうです。それで弟さんが家を取り壊したの」

しばらくヒロシは身動きも出来なかった。いったいどういうことなのだ？ なんて藤嶋は食べるのを止めたのか？

ヒロシはおそろおそろ奥さんに尋ねた。

「藤嶋さんは、なぜ食を断ったのでしょうか」

「それは、決まっていますよ。清香さんの後を追ったのよ。あなたには、わからないの？ あなたにとって、清香さんは女神ではなかったの？」

奥さんの声が清香の声のようにヒロシに聞こえた。ヒロ

吉祥寺の

AKTU 10 秋生騷

真里亞

大学や社会が混乱する1960年代末
〈国争〉に巻き身をやつした男の告白
金井潤とは何だったのか――

ボクが死を迎えるとき 1950年(1952)
真里亜は見届けてくれるだろうか

主文英社 東京海峽新聞社 1-1D-1
TEL: 03-5369-2400 FAX: 03-5369-2404

ご注文は近所の書店、またはブックサービス
0120-29-9722への電話注文、ネット書店に
お申し込み下さい。

シはその場をどうやって離れたのか、記憶がなかった。気が付いたら、家のソファに座っていた。ガタガタと震えが止まらなかった。藤嶋の餓死がたまらなく恐ろしかった。どうしてそんなことが出来たのだ？ オレは清香が死んでも、清香の後を追おうとは思わなかった。それどころか気晴らしにチベット旅行に行ったり、女友達と春山に登ったりしていた。オレがそんな気晴らしをしている間、藤嶋は食を断っていたのだ。二カ月、あるいは三カ月近く、一途に少しも揺るがずに死に向かっていたわけだ。藤嶋の清香への絶対の愛だった。槍ヶ岳という暗号の梯子の階段に座って、清香と藤嶋が遠くの間を眺めているところをヒロシは思い浮かべた。藤嶋は身を捨てて女神と一つになったということか。チベット男女仏はこんな身近にいたというのか。清香と藤嶋は一つになって、永遠の宇宙エネルギーの一部として生き続けているのかもしれない、とヒロシは思った。それなのに一方の、身を捨てることなど少しも考えなかったヒロシは、こうして一人で震えているのだった。ヒロシは、この世は映画のスクリーンのように終わりのある場所ではなく、真剣で命懸けのエネルギーが呼応し合って、永遠の宇宙に繋がる聖なる場所だと、ようやくわかったのだった。



遊座理恵

ゆざ りえ

東京都中央区出身
1976 早稲田大学第一文学部日本文学科卒
1998 らいらっく文学賞受賞（朝日新聞北海道支社主催）「美しい記号」
1999-2000 朝日新聞北海道版夕刊週一回エッセイ「窓辺のミルクティー」一年間連載
2001 浦安文学賞受賞「キヒメ」
2009 ちよだ文学賞特別賞受賞「空見子の花束」
2017-2022 高野山大学院 通信課程在学
2022 （株）幻冬舎ルネッサンス新社より「白川郷一聖なるものの村ー」出版

嬉しくて、夢のようです。二〇一七年から高野山大学院の通信課程で密教を勉強しました。あまりに奥深い思想で、心身ともに修行をしなければ何もわからないというのとだけはわかって、挫折しました。挫折したのに、こんな小説書いて、良いのか悪いのか、不安でした。でも選んで頂けたので、急に自信満々になりました。年取っているのに残り時間はあまりないのですが、もう少し書いていきたいです。ありがとうございます。

銀華文学賞 優秀賞 受賞の言葉 遊座理恵

三蔵法師の鍋

た な
田名トモ

長安、大慈恩寺の南門にそびえる巨塔を前にして、道昭は声もでなかった。

ぶ厚い城壁よりはるかに高く、首を折るほどに見上げる五層の仏塔は、この世のものとは思えない威容で、飛鳥の山里から大海を越えてたどりついた若い留学僧にせまつてきた。

中大兄皇子があらかたの反対をおしきつて、二十三年ぶりに遣唐使節の派遣を決めたとき、道昭は幸運をかみしめた。いまだ大化改新の衝撃がくすぶる国内では、仏門の中心である飛鳥寺といえども経典をおさめた蔵は閑散とし、

教えをこう師僧はわずかである。読経と祈祷が日課の学問僧にとつて、いにしえの英知を凝縮した仏典が累々と積まれた大唐の地をふむことは、命をかける意義があった。

総勢二百四十一人、二艘に分かれてのりこんだ第一船に、奇妙な童子がいた。内臣、中臣鎌足の長子で十一歳のみならい僧、定慧である。難船をおそれて棄権するものもいるなかで、まだいとけない顔が不安と緊張に耐えていた。内臣は時の権力を独占し、その威勢を恐れられていたが、さすがにこの青々と剃りあげた小さな頭の同乗者には、皆あわれみの目を向けた。

「それだけ必死ということだな」

ぶやいた。うしろにいたはずの第二船の船影を途中で見失つてからというものの、船内には日々小さないだちがつつつている。

道昭は、この素朴で正直な男が好きだった。飛鳥寺で最新の教説を学ぶ道昭が、覚勝とつるむのをまわりは不思議がったが、覚勝は育ちのよい大寺の学僧よりよほど深く仏典を理解していたし、それらの歴史にもあかるかった。あまり大人になつかない定慧のことを氣にかけ、大波に船がたたきつけられるたびに宙に飛ばされる小さな体をかばつて、体中を打ちつけている。たいていは船酔いで役に立たなかったし、融通がきかないうつとしさもあつたが、覚勝と語りあうのは楽しかった。

いよいよ大陸が近づき万感胸にせまる日がきて、第二船の行方は知れなかった。唐土上陸後もしばらくその到着を待ったが、結局、第一船の一行だけで長安にのぼることとなり、皆々氣をとりなおして進むなか、定慧だけはのつぺりとした青白い顔をゆがめて、いつまでも航海の恐怖をひきずっていた。

「こうして一艘は無事に着いたのだから、上々ですね」

もれ聞くとところによると、今回遣使船を二艘立てたのは、一艘は難船もやむなしという内臣の判断だったらしい。それでも、次々と現れる大陸の偉観に皆々の心がわきたつてゆくのを、定慧もまた素直なよろこびで見つめていた。

まずは黄河の巨大さ、地の果てしなさに度肝をぬかれ、ついで大運河にむらがる雲霞のごとき人と舟に愕然とする。洛陽の天街をかつぼするさまざまな色肌の西域人たちを、穴のあくほど見つめては、その姿かたちに色めき立った。

「ひとくちに西域人といっても、いろいろなのだな」

唐土より西は、怪異の世界である。見るもの聞くものすべてに驚嘆し、興奮さめやらぬ一行が長安城に入るころには、春明門に朔風がたちはじめていた。

朝貢使節は皇城にむかえられ、学僧、学生は修得すべき学問や技能にあわせて配属先を決められる。道昭は、大慈恩寺における唯識教義の修学を願い出た。唯識は、かの三蔵法師玄奘が印度で学んだ大乘仏典の新説である。十七年をかけて西方をめぐり、唐土に多くの経典をもたらしした彼の偉業は倭国までとどろき、飛鳥寺でも唯識の研究がはじまった。貴重な経典を保存し、漢訳する拠点が慈恩寺であり、そこには学僧だけでなく国中の碩学が集まっている。「そんなところに唐語もあやうい倭僧が出向くなど、笑われるのがせいぜいだ」

ほかの学僧はそう言つてとめたが、道昭の意はゆるがなかった。ようやく唯識の正解に手がとどくところまできて、恥だの威信だのと官吏のようなことばかり口にする官僧たちが、道昭にはいじましく思えた。身の丈は低く、短い眉に小さな目鼻の地味な相貌ながら、道昭は足腰が強く、胆

力もあった。

「わしは、民を救う法を学ぶつもりだ」

京師郊外におもむく覚勝が得意げにそう言うのと、皆しらじらとそしらぬ顔をした。倭国で「民」とはだれをさすのか、つきつめるものはいなかったし、まして「救う」などと大口をたたく覚勝は、やはり泥くさい田舎者でしかなかった。「しかし、この国ではすでに民にも仏法をひろめていると聞くぞ」

覚勝はそう言つて息まいたが、道昭もこればかりは彼の熱意をくむ気になれなかった。覚勝らしい発想ではあったが、仏法の威徳にあずかるには、ある程度の素養が必要だと思つたし、なにより、道端でだれかれなく説法をする僧形には受け入れたいものがあつた。

一方、定慧は京師の西門に近い慧日寺で、正式な僧になるための修行を積むこととなった。そこは、西域人が雑居する区域のそばだと知つて不安がる小さな肩を、覚勝はなんども叩いて励まし、三人はそれぞれの修学先へと向かつた。

大慈恩寺は、三蔵法師のために建立された大寺院である。巨塔をおおぎその広大な敷地に足をふみいれると、宮殿とみまがうほど絢爛に荘厳された院殿楼閣がたなびくようにあらわれた。緊張と感動で身ふるいする道昭を、ひとり

の沙門がひきかえる。

名を、窺基。道昭は、極楽のごときこのきらびやかな場所、あまりに似つかわぬ相貌を見て興ざめた。ぼこりとつき出た腹に岩のように巨大な頭、赤ら顔に浮き出る濃いひげ剃りのあとが生々しく、とび出た眼はきらきらとして、不快な生気をあらわにしている。この異形の同門が新参と聞いて、道昭は二度おどろいた。

「尉遲の出だ。といつても知らんだらうな」

窺基によると、尉遲は魏王朝以来の名門だが、変わりものの彼は出家も一時の気まぐれだろうと、親族からぞんざいに扱われているらしい。虫の羽音のような、甲高く、すれた笑い声をあげながら、窺基はひとごとのように身の上を語っていた。

「まったく、この寺は広くてかなわん。車に乗りたくらいだ」

巨体をゆらしして歩く窺基がおもむろに指さすほうを見て、道昭は息をのんだ。

「あれが、玄奘和尚が仏典を漢訳する翻経院だ。ここでもっとも銭のかかった建物だな。なにしろ梁や柱は玉や金銀、妙をつくした画や金環で囲まれている」

感慨で立ちつくしたまま、道昭は、まだ数百歩は先であろう院をおおいだ。横でおもしろげにようすを見ていた窺基が、ふたたび甲高い声をあげる。

「そう期待するな、ただのじいさんだ。最近では体調が悪くてな。古参の訳経僧たちが幅をきかせてかなわん。まあそのうち、わしが訳経に加われば風通しもよくなるだろうよ」

窺基のあけすけなもの言いに、道昭は慥然とした。慣れない唐語を、おのれが聞きちがえているのではと疑つた。窺基は道昭の胸のうちなど気にするようすもなく、重たげな体をかたむけ、存外の早足でふたたび歩きだした。

道昭の新しい暮らしがはじまったが、期待に反して三蔵法師にまみえる機会はおとずれなかった。少しまえまで、学僧に経を講じたり若い門弟に教戒をさすけたりと、懇切に後進をみちびいていたらしいが、最近では印度でわずらった冷病が悪化し、調子のよいときでも翻経院に顔を出さくらいだと聞く。道昭は冷病がいかなるものか想像もつかないまま、法師の回復を願うほかはなかった。

留学僧はおおぜいたが、なにしろ倭人はめずらしく、道昭はなにかと好奇の目を向けられた。辺地の「倭夷」と見下されることもしばしばだったが、どういふわけか倭人は長命と思われていて、妙な質問を受けることも多かった。それでいて、学僧は皆、舌をまくほどの達弁で、道昭の学識ではまともに論議に加わることもできない。講経の末席についてもその大半を解せないまま、低い身の丈をさらにちぢめて唐語を追う目がつづいた。

「そう気落ちするな。唯識ぐらい、わしが教えてやる。高

僧の講義は長つたらしいばかりで、的を射んからな」
あいかわらず人をくったような窺基の態度に眉をひそめることも多かったが、そのあけひろげで裏表のない性分は心やすく、道昭にはありがたいものだった。
留学僧はかなりの銭貨が支給されるため、あい間はつれだつて京師の見物にでかけた。

なかでも西市は、西域人の商いでにぎわう小さな異国である。窺基はこの区域にたいそう精通していて、車を調達してはくり出してゆくのだ。

露店でうめつくされたせまい通りを、駱駝や馬が見物人とひしめきあい、熱気に入りまじった獣や香料、食べものの強烈なおいが鼻をつく。若い沙門がとびつくのは、焼餅やほう飴といった小麦の粉食だ。口いっぱいにはおぼると、あまりのうまさに倭国の貧しさが身にしみて泣きそうになる。

「倭国には羊がいなのか。残念だな、饅頭のなかみは羊肉が一番だぞ」

窺基が本当に肉を食らうのではと気をもみながら、小屋がけの戯場にあふれる音と色に、道昭は目をまわしそだった。琵琶や笛の音にのせて、西域の女たちが色とりどりの長い袖をまわし、片足でまわる。雑伎はくるおしく樂はせつなく、遠い異国の華やきが、なぜか郷愁をさそつた。近くには定慧の修行する寺があるが、道昭が訪れてもよう

十師に任ぜられた道登が、仏法の伝授以外の道を示したことに、道昭は新しい僧の姿をみていた。

菊花もあせ、急に朝晩が寒くなるころ、窺基が道昭の僧房にとびこんできた。

「道昭、支度しろ。和上がお目にかかるぞ」

寺でおこなうたいのことに物遠い窺基が、息をはずませ、赤ら顔をさらに紅潮させている。その目からたわむれでないことを察すると、道昭はおどりがつてよろこんだ。「どういう風の吹きまわしか知らんが、倭僧に会いたいとおっしゃったのだ」

窺基はまるで、おのれが招かれたように興奮していた。

彼は法師の人となりを聞かれるたびに、そっけない応えを返していたが、やはり師への憧憬はあるのだ。慈恩寺に来てこのかた、幾度か遠目におおいだその姿は、つねに多くの高弟に囲まれていた。

道昭は身支度をととのえと、ふためく窺基と転げるように外へとび出し、法師の待つ西院へとかけ出した。

そこには、歴々の高僧が座していた。

普光、神泰を筆頭に、神昉、嘉尚、そして唯識の先達とよび声たかい新羅僧円測と、講経の末席にかじりつくのもやつとの訳経僧ばかりである。道昭は、おのれがとんでもない苦境にあることに気がついた。背につたう汗にふるえ

すを知ることではできなかった。刻限をすぎれば各所に設けられた門はとぎされ、寺からもしめ出されてしまう。帰りはいつも大あわてで車をとばした。

黄塵がおさまると長安の夏はこのほか暑く、かわいた熱が甕を焼く。

窺基はしょりもなく西市へ誘ったが、道昭は暑さを理由にのがれていた。長安育ちの窺基は肥えた体に似ず、暑さが苦にならないようで、滝のような汗をながしながら西域の美女の話に花を咲かせている。

なにかと不遜なふるまいの目立つ窺基が、じつは抜きんでた才俊だと知つたのも、このころである。「唯識くらい教えてやる」と豪語していたとおり、彼はどんな問いにも即妙に答えた。こうなると、その横柄な態度もむしろたのもしく、周囲には彼の歓心を買おうと寄りつどう若僧で、さながら小さな僧団ができていった。

一方、道昭の関心は、京師の内外に築かれた水路や橋にうつっていた。

長安の治水技術は漢代までさかのぼる。城内に引きこまれた水は順々に分かれて隅々へゆきわたり、ゆるやかに反つた大路は雨水を側溝へみちびいて排出する。道昭はすこぶる感心し、ひまをみつめてはこうした技巧を見てまわつた。窺基はあきれていたが、道昭は宇治川に橋をかけた飛鳥寺の僧道登に、深い感銘を受けていた。大化元年に

深々とたれた頭をあげると、重ねた綿入れに大事そうにくるまれた人が目に入った。

あご先までくるんだ首巻からのぞく肉のない頬は、褐色のかわいたしみにおおわれ、目元や口元は大きくゆるんでいたが、瞳は深く、引きこまれるような力がある。

「遠路よくいらした。慣れぬ土地で気苦労も多いであろう。つつがなく勉強にはげんでおいでか」

三蔵法師である。国禁を犯してひとり砂漠に出たという豪胆さはそこになく、きぶくれた細い体が動きにくそうに座っていた。長病みで声は弱く、まぶたは重く疲れていたが、その端正な面立ちには、ある種の清らかさがある。道昭は呆然としてその姿に見入つたが、脇から浴びせられるいくつもの痛烈な視線に追いたてられ、同朋に教えをこいつつ学んでいると、うわづった声を出した。

「同朋とは沙門、窺基のことか。ずいぶんと気ままなふる

文芸思潮編集部

編集・事務アルバイト募集

週二日／三日 5／6時間 時給二二〇〇円

インデザインソフトが使える方

時給一六〇〇円

委細面談

TEL 090・8171・9771 五十嵐

mail: bungeisc@asiawave.co.jp

まいをしているようだが」

かたわらから投げられた声に不意をうたれ、道昭は身がまえた。高僧のなかではいくぶん若い、円測だった。白晢の長い顔に薄い眉、細くさかしげな目には不審の色がのぞき、道昭をとまどわせた。気ままといえばそのとおりだが、それは彼の不羈の才であり、道昭は窺基のために、いくらか弁明すべきではないかと思った。しかし、言葉をさがしあぐむ道昭より先に、かの三蔵法師がだれにともなく語りだした。

「幼いころ、倭人は裸足のうえに単衣をまとい、顔を黥をほどこすと聞いていた。大業三年に来た倭国の使節を、兄につれられて洛陽まで見に行ったことがある。ところが、どの倭人も黥はなく、履もつけていた。こども心にひどく落胆したものだよ」

のどかな師の言葉に一同の顔には笑みがこぼれ、道昭は胸が熱くなった。大業三年の使節とは、かの聖徳太子が隋の煬帝につかわした一行である。円測は笑っていないかったが、それ以上窺基についてたゞそうとはしなかった。

高弟たちは、もともと円測の言葉を気にかけていないようすで、倭国の内政や人の暮らし、僧尼の務めについてかわるがわる道昭にたずねた。その後進ぶりを冷笑するものもいたが、道昭には三蔵法師の反応以外、気にならなかった。師のおだやかなまなざしには、酪酊するような心地よ

ろが、道昭の心配をよそに、法師はひざを打って合点したのである。

「なるほど。慈恩寺の南池は曲江とつながり、早のさいには溜池となる。考えたこともなかったが、まことによきことであるな」

興味深げによるこぶ法師は少年のようであり、どこか悲しげでもあり、道昭は、なぜか涙がこみあげるのをこらえた。結局その後はなにごともなく過ぎ、道昭はひきつづき精進するよう励まされて西院をあとにした。

ふらふらと僧房にもどると、窺基が多くの若僧に囲まれ、大乘小乗の質疑になんなく答えていた。道昭はそれをひとまわり外からながめ、円測の細長い顔を思いかえした。新羅や百済の僧も、唐での扱われようは倭人とそう変わらな。円測の顔には長年の労苦にもまして、憎しみにも似た怒りがしみついていた。うれしげに近よってきた窺基に、道昭はかいつまんで院でのようすを話したが、円測のことは黙っていた。

「それで道昭、鍋は見たか？」

「はあ、鍋？ そんなものはないが」

なにを言い出すやうと目を白黒させる道昭に、窺基は「なんだ、つまらん」と吐きすてた。どういいうわかれか、法師はある鍋をととても大切にされていて、眼福にあずかれば霊験あらたかと寺内でうわさになっているらしい。

さと、かすかな威圧と、なにか得体のしれないものからめとられる不安をおぼえた。緊張のとけなまま息をつめる道昭に、高僧のひとりが別の問いを向けた。

「そなたは南池の尺を測っているそうだが、それはなにゆえか」

道昭は冷水を浴びたように声を失った。慈恩寺の南池は道昭がたびたび足をはこぶ治水の好例だが、よもや、それを見とがめられようとは思ってもいなかった。緊張とかわきでのどがあかない道昭にむかって、法師の脇に座す普光が、ぼそぼそとしわがれた声で返答をうながした。彼は、この場のだれより「老僧」という言葉がしっくりきた。

「心配はいらん。和上はおもしろがっておいでだ」

道昭がおそろおそろ法師の顔をのぞくと、なるほど柔和な笑みに好奇の気色が見える。道昭はひとつ大きく息を吐き、腹をくくってひと言ひと言をふりしほった。

「倭僧は、朝廷に貢献する技を期待されております。多くは儒学や老莊、医術などを学びますが、拙僧は体をつかうほうが性にあい、治水の技巧を見学しております」

道昭は、おのれの言葉から熱が失せていくのを感じた。学業の遅れを痛感しながら、池やら橋やらにうつつを抜かすとは、倭僧の底がしれると思われても言いぶんはない。実際、倭国では官僧が国造りになうのは当然だったが、そこまで内情をさらすのは、やはりなさけなかった。とこ

「まあ本当にご利益があるのなら、和上を長生きさせてほしいものだ。経論だけあっても、唯識はわからんからな」

窺基がめずらしく学僧らしい気概をのぞかせたが、道昭には、彼のこの言葉は不穩当にひびいた。そもそも、そんなありがたい物があるなら先に教えてくれと思う反面、あの夢のような場で鍋をさがす余裕などあったはずもないと、道昭は感慨にひたっていた。

この日以降、道昭は勉学に専念した。ちやうど沈没した第二船の詳細がつたわり、ほぼ全員が海に散ったと知ったことも、彼を本来の使命にかりたてた。ふんだんに燈火を使い、夜がふけるまで、むさぼるように浄机にむかった。他寺でひらかれる講經にもいさんで出かけ、廂の下までむらがる学僧のすき間に身をねじりこんで聴講した。

そうして槐樹の葉もすっかり落ちたころ、道昭は覚勝に会った。

使いで京師に来たという彼は、炉に炭を入れる季節だというのに襪もつけず、慣れないからと素足に履をつけていた。道昭が三蔵法師に謁したことをつげると、「さすがに飛鳥寺の僧はちがうものだ」と、たれた目をいっばいに見ひらいて感心した。

「わしは、まだ唐語もよくわからん。わしの唐語は通じないことが多いのだ」

ふざけて笑う覚勝のものの言いに、道昭は彼の修学がうま

くすすんでいないことを察した。人よりよく心づくというのに、覺勝は周囲から軽んぜられることが多い。彼の口からか体からか、かすかになにかが腐ったような臭いがして、道昭はたまらず顔をひいた。不当な扱いを受けているのではと氣をまわしたが、覺勝は話をはぐらかした。

「そんなことより、いま善導法師の説法が人を集めているのを知っているか？」

道昭は大きくうなずいた。南無阿彌陀仏をとなえれば、だれでも浄土往生がかなうという念仏の教えは、身分をこえて人々の心をとらえている。西市にほど近い光明寺で、念仏の大合唱がうなるように地をひびかせているのを、道昭も聞いたことがあった。

「わしは、あれがよいと思うのだ。倭国の民にも」

覺勝はよろこびを分かちつように語り、道昭もまた学業とは違う熱を感じた。しかし、だんだんと彼の目が、夕ぐれ of 赤黒い空に呼応するように気味の悪い光を帯びてゆくのを、道昭は身の毛立った。虚空を映し、放心したそれは、屠られるまえの獣に似ていた。光明寺念仏堂につどう人々のなかにも、同じ目と同じ臭いのものたちがいた。

「三十年もたてば、わしも、ものになるやもしれん」

覺勝は一瞬正気にもどった顔でならびの悪い齒をみせて笑うと、かたく黒ずんだ藁の実をふたつ、もったいらしく道昭にわたして、歳末のかわいた大路に消えていった。

つい、ありきたりな言葉が口をつき、道昭は首をすぼめた。窺基が聞きのがしたことを願ったが、やはりそこは窺基で、「そりゃ、そうだ」と一笑してわん飽を呑みこんでいた。手のなかに残った藁の種がふたつ、道昭はかたくりぎりしめた。

まもなくして、窺基は唯識の支柱をなす文書の修学を許された。ほかの唐僧と比べても異例の進学だが、とうの窺基は高僧の講義がつまらないと言ったと言わなかったとかで、よけいな不興を買っていた。

二度目の春がすぎ、花を散らす雨がかわきをいやすころ、道昭はふたたび三蔵法師の院によばれた。いぶかしむ周囲の僧を尻目に、道昭は喜色もかくさずとんでいった。唐土の風習にも慣れ、多少の学識を得た自信もある。法師の脇には普光、嘉尚の高僧二人がひかえていて、道昭は法師の面前に立った。

「よく日にやけているな。座学にふけていると聞いて案じたが、杞憂だったようだ」

訳経僧がならんだ前回より、法師はいくぶん血色よく、道昭は愁眉をひらいた。窺基が言うところの鍋をさがして周囲を見まわしたが、それらしいものはない。気恥ずかしさで苦笑する道昭にむかい、法師はひとつ明るい声音で語りかけた。

「道昭よ、経論は宏遠で究めがたい。それより、そなたは

正月元宵、京師中に燃えたつ提灯のあかりで巨大な城壁が闇夜に浮かびあがり、人々は夜の街路へとくり出してゆく。

高句麗への遠征が近いと、窺基がさも飽きたようずでわん飽をすすりながらつぶやいた。

「高句麗と百済が新羅を攻撃したのだ。新羅はいま、唐の後援を受けているからな。三韓の僧たちは、いきり立っているぞ」

高句麗は、隋、唐の侵攻をことごとく防いできた強国である。「何度負ければ氣がすむやら」と、決まってもいない出兵に窺基はあきれていた。

道昭は覺勝がくれたかたい藁をかじりながら、きれいにならんだ提灯をながめていた。

口には出さずとも、三韓の僧たちは、それぞれに対する確執をかかえている。倭人が加われば、さらに心情は複雑だ。窺基にも話したことはないが、道昭の祖は百済から倭国に渡来した帰化人である。百済が特別な存在に違いはないが、そのことで百済僧に親しくされるのも、敵対する新羅の僧にげんな顔を向けられるのもいやだった。いまの道昭には、覺勝がおだやかな正月をむかえているかのほうが、よほど大事だった。

「仏法は無力だな」

禪を学ぶのがよろしかろう。ついでには相州隆化寺の慧満禪師のもとへ行き、師のもとで禪行を修めよ」

道昭はあつけにとられ、言葉も出なかった。なにかのまちがいでとは、ふたりの高僧にかわるがわる顔を向けたが、道昭が期待する反応は返ってこなかった。総身がくずおれるのをこらえ、「お待ちください」と、ようやくしぼり出した。「拙僧は弥勒の妙法を得るために、生涯をついやす覚悟でございます。どうか、このまま末弟にお加えくださいませよう、伏してお願いたします」

道昭はこのとき、法師の左右の瞳がほんの少しずれていることに気がついた。まなざしはどこを見ているのか、その視界に入らんとどき込むほどに、船酔いにあつたような氣分の悪さにおそわれ、足元はたよりなくふらついた。醜態をみかねたのか、またしても普光がぼそと聞きとりにくい声であいだに入ってきた。

「慧満禪師は、かの達磨大師の法を継ぐ名僧である。もとより唯識は行の実践を旨とし、論議は真理を明かすものではない。よき話だと思いがな」

指先であごをなぞりながら、こともなげな普光のの言いに道昭はいらだった。法師が少しせきをしたので、横にいる嘉尚が近づこうとすると、法師はかるく手をふってそれをしりぞけた。袖口からのぞく手首には氣脈がうき出し、男のものとは思えないほど薄く、青白かった。おし黙る道

昭にむかい、法師はしずやかに語りかけた。

「そなたは勇健で力強い。狭量の拙僧には行けなかった道も行けるだろう。唯識の教義を倭国につたえることは、そのうちだれかがやればよい」

悄然と肩を落とす道昭に、法師は小さな経をさし出した。「般若心経である。拙僧が若いときに原文をさずかつて以来、つねに誦して西方の旅でも難儀をしのぐことができた。漢訳をしたためたから、持ってゆくとよい」

道昭は頭を下げた。かしこまって経を受けとり、西院をあとにした。ひとりになって経をひらくと、存外ふくよかで明るい書があらわれ、ますます頭は混乱した。すぐにも長安を發つこととなり、あまりの急転に心も体も乱れたまま、ため息ばかりがもれた。話を聞きつけた窺基も、道昭のまわりをどかどかとうろついては、言葉をはき出した。「あんな、車輪もくだけるといふ山中に行くのか。和上はなにを考えておられるのだ。銭を持っていけ。うまいものをたらふく食っておかんと、身がもたんぞ」

道昭は正直、窺基とはなれがたかった。いろいろと評判の悪い窺基だが、てらうことなく道昭と接したのは、彼だけだった。

同朋の倭僧たちが知れば、それみたことかと溜飲を下げることだろう。進取の気性をあきられ、うらやましがられもした道昭だったが、結局は彼らの忠告どおり、学才及

ばず慈恩寺を出されるはめになったのだ。

数日後、道昭は長安をはなれた。街路につらなる柳から白い絮が散りおちて、水溝にたまっている。春明門の城壁は重く、灊水にかかる石橋を見る余裕もないまま、二年前、歡喜にふるえて上京した道を下っていった。

相州は洛陽から北上した河北道にあり、峨々たる太行山のふもとに大小何本もの河川が蛇行する勝地である。急峻な山あい建つ隆化寺は、小体ながら国中の求法僧がつどう名利だった。

慧滿禪師は三藏法師と同じ年配と聞くが、こちらはずいぶん老けていて、七十でもとおる見目である。たれ下がった眉とまぶた、白髪のはげは剃り残しが目立ち、ひどく風采があがらない。猫背にうもれた首は鉞のように曲がり、小柄なのか大柄なのかもわからなかった。

ところが、禪師はその身に似ず、おどろくほど快活に動いた。毎朝けわしい山道を下って托鉢にまわる健脚たるや、若僧も及ばないいきおいである。猫背のままのし歩く姿は異様であり、爽快でもあった。道昭はもつれる足で必死にあとを追ったが、追いつく間もなく履はやぶれ、すり切れた足の痛みでようやく眠気をさました。

托鉢もさることながら、もつとも道昭をさいなんだのは、飢えた。禪師はあえて貧しい村をまわって齋を求めた

ため、粟柄や高粱の粥に豆粉や乾酪をまぜたものを口にす

るのがせいぜいだった。すき腹をかかえての座禪はいっそ

うつらく、若い体にこたえる。苦しむ道昭を尻目に、禪師

と高弟たちは平然と日課をこなしていた。

「なに、そのうち慣れる。わしなど、うまいものを食うと腹をこわすくらいだ」

禪師にからかわれても、道昭は返す言葉もないほど萎えていた。しかも、各々が好きなときに好きなところで座る自由が求められ、いよいよ身の処し方がわからない。学僧の論争かましい慈恩寺に慣れた道昭には気をまぎらすすべもなく、身をよじってはひたすら耐えるよりほかはな

かった。懐にいだいた『般若心経』だけが、火のように熱い。

年がかわつても京師の喧騒が相州にとどくことはなく、隆化寺の僧は肅々と座し、履を編み、薪を割った。南の斜面をおおう山桃が色づくと、皆々好んで伽藍の外に座るようになる。道昭は覚勝がくれた棗の種をひとつ、継ぎのやぶれたばら袈裟のなかに縫いこみ、もうひとつを日あたりのよい斜面にうめた。芽吹いて覚勝の運氣が上があればよし、ゆくゆく実がなれば、さらによい。行者（雑用係）のひとりが「春はたいへんです」と、くぐもった声でつぶやいた。鼻の下の長い、猿に似た面の行者は、その体軀も貧弱で、手足の小さい猿そのものである。彼の言葉は少々不如意で、つまりは一帯の乾燥がひどいため、種が育つのはむずかし

いということらしい。十五にも四十にもみえる小男は、あされるでもないやな顔をするでもなく、重い水瓶をはこんでは棗の種に水をまいていた。

一見豊かな黄河の流域は、人にも作物にも過酷だ。春の旱魃をしのぐと、つぎは洪水と冠水の危険にさらされる。磨臼による製粉の普及は大規模な小麦の栽培を可能にしたが、水車の設置はしばしば従来の水路をさまたげ、農民同志のいさかきをうみ出していた。

五月も末、三藏法師危篤の知らせが、その後回復したという結末とともに舞いこんだ。

厄除けにつるした菖蒲の香が僧房に満ち、京師の強烈な暑さが体をよぎる。法師の身を案ずる間もなくすすんだ事の顛末に、道昭はいつまでも慈恩寺一門の気であるおれがなさけなかった。

「わしは若いころ、一度だけ玄奘に会ったことがある」

おどろいてふり向くと、そこには慧滿禪師が立っていて、道昭は尻をつきそうになった。師は道昭に目もくれず、山波に浮かぶ白雲をあおいで、ほうけたようにつぶやくのだ。「ふたりとも、まだ二十歳そこそこだった。いやあもう、その麗しいことといったらなかつた。わしは、あやつ之才より見目がうらやましくてならなかつた」

そう言って齒の抜けた口で奇しき笑いをこぼすと、師はひどい猫背のまま立ち去った。こころなしか弾むようなそ

の足どりは、師もまた三蔵法師の無事をよるこんでいるように思えた。

座禅も托鉢も、つねに腹がへっている状態にも慣れたころ、道昭は窺基が訳経僧として翻経院に入ったことを知った。異例の躍進ながら、本人にはしごく当然のことだろう。周囲の騒ぎなど歯牙にもかけない不遜な顔が、道昭には間近に見えるようだった。

七夕がすぎると、あちこちで橋や堤の修繕がおこなわれる。橋脚の基台があらわれるほど水の引くところもあり、河床の堅さにあわせて形を変えた切石のほぞ穴に、五角や六角の木柱、あるいは石柱を打ち込んで強度を保つ。その精巧なつくりを維持するために、おおぜいの男たちが張りつくように働いていた。

秋はまた、春以上に小麦の畑地が深く耕される。表土をくつがえて地中の水分を保ち、地力を回復させるのだ。長足で進歩する耕具の威力で、大地は生きものが這い出すように掘りおこされていく。

「お釈迦さまは、たがやされる土地にもあわれみを生じました」

猿面の行者が、まさに猿が蚤を取るかっこうで小麦にまじった砂をとりのぞきながらつぶやいた。思いがけない知識におどろいて道昭が聞きかえすと、子どものころ齋会に出むいたという。

けたと笑ってことを決めてしまふ。

「なに、長く座ったからどうというものでもない。尻にたこができるだけだ」

師のいう「騒ぎ」は、道昭も承知していた。高句麗に出征した唐軍は、さしたる成果もないまま侵攻と撤退をくり返し、今度は水軍の増援が噂されている。泥沼化する三韓の状況に、百済や新羅の僧たちも衝突をはじめていた。倭人もこれに無関係とはいかず、昨春秋に入唐した朝貢使節の一行は、洛陽で帝に拝謁したのち、京師に抑留されるという異常な事態におちいつている。いずれ解放されるだろうと禅師はいうが、事がそう簡単にはこぶかはわからない。いまが帰国のころあいとは思えなかったが、結局、道昭は隆化寺をはなれて帰国の算段を立てることにした。禅師が帰れと言うなら、それ以外の選択はないとも、それが最善とも思えた。行者は顔中をしわだらけにして別れをおしんだ。いまだ芽の出ない藁の種に、彼はうれしげに水をまいている。修行僧が生涯かけて達せんとするところに、彼ははじめからいた。道昭は合掌し衷心より謝意をつたえろと、つばみの色づいた山容をおしみつつ、隆化寺をあとにした。

道昭は、覚勝をつれ帰ると決めていた。不精不徳を叱責されても、覚勝のいった「三十年」というものから彼を引きはがすが、漠然とではあるが確固とした使命のように

「近くの寺にえらい僧が来て、お経を読んだあと、粥や餅をくれました。この寺には来てくれないので残念です」

道昭は思わずふき出した。貧しく、無学の行者は禅師のいつけを守ってよく手を洗い、楊枝をかんて不思議と身ざれいである。目のまへの食べものをむさぼることなく、大根や蕪菁を塩に漬け、豆を蒸して豆ちを作る。数ある説法のなかから彼がおぼえた一説を聞けば、山寺の厳しい暮らしにも仏の恵みがあると痛感する。わずかな小麦を粟にまぜて粥にする日を待つのはうれしく、行者とふたりで砂をとるのも楽しかった。

何度季節がめぐったか数えなくなったころ、三蔵法師は慈恩寺の座主を辞し、訳経の場を坊州の玉華寺へ移すことが決まった。危篤を脱したあとも、たびたび病に伏す法師は、ついに京師をはなれて閑静な地へ移ることとなったのだ。道昭は、おのれが慈恩寺にもどる機を逸したことを、凍える禅院でひとり受けとめた。

「道昭、そろそろ国に帰れ。あちこち騒がしくてかなわん。ちようど倭国の使節が京師に来ておるだろう」

背後からかけられる声に慣れた道昭も、このときばかりは思いもよらない師の言葉にうろたえた。いまだ漫然と座しては食うことばかりを考え、ひまなおりに橋や畑地を見にいくという、およそ「禅行を修める」とはほど遠い半可である。またしても残留を願う道昭を尻目に、禅師はけた

思われた。あばらが浮き出るほど肉のおちた体はおどろくほど力強く大地をとらえ、十代のころでも考えられなかった速さで、道昭は長安にのぼった。

久方ぶりの京師はいっそうの活況をていし、この世の春に突入していた。

城門の出入りはきびしく制限されていたが、道昭はなんとか慧日寺までたどり着いた。再会に心おどる道昭のまえにあらわれたのは、丈高く、目鼻立ちのすずしい若僧だった。定慧である。じつに七年ぶりに会う彼に、船室の隅で泣いていた面影はなかった。しなやかな長い手足に均整のとれた立ち姿は、唐人そのものである。定慧は近づくほどに視線を下げながら、どちらにとつても久しい倭言葉を発した。

「なんと、おなつかしい。見違えましたぞ」

まさに口に出そうとした言葉を先にかけれられ、道昭は苦笑した。さまざまな典籍に通ずるという定慧の目には自信と充足がのぞき、若い体から弾むような力がもれ出ている。道昭が帰国の意をつたえろと、定慧はおおいに得心し、年のわりには低い声で話をついだ。

「拙僧も唐水軍の出征を倭の朝廷につたえるすべをさぐっておりますが、なにぶん不意な行爲はつしまねばなりません。よもや、百済に援軍を出すとは思えませぬが、か

の地における倭国の權益を唐国が認めぬ以上、朝廷のお考
えも割れましよう」

長身の定慧に下からのぞきこまれ、道昭は思わずあとず
さりした。その薄いくちびるからこぼれる倭言葉が、ひど
く不自然に聞こえた。一緒の帰国をすすめる道昭に、定慧
はもうしばらく動勢をみるつもりだと言った。そのうえで、
無事帰国した暁には、道昭がすぐにも重要な官職につけ
るだろうと興奮ぎみに語った。

「慈恩寺を選ばれたのは、じつに英断でございました。拙
僧も神泰法師に唯識の講義を受けましたが、とうてい三藏
法師のご威光には及びませぬ」

あどけなさの残る笑顔ににじむ、いつわりのない称賛に、
道昭はとまどった。早々に慈恩寺を出されたことへのあわ
れみなり、あざけりなりをいくらかでも含むほうが健全で
はないかと思うほど、定慧は道昭の約束された未来をよろ
こんでいた。

「どうぞ、父を頼みになさってください。父も皇子も、古
き豪族が政事に口を出すことを厭い、真に才あるものを集
めて新しき国を創らんとしておられます。かの三藏法師に
師事したとなれば、道昭さまの出自をとにかく言うものは
おりませぬ」

道昭は、まぶしいほどにつややかな定慧の若い顔を、ま
ばたきもせずに見つめた。彼は皇宮の内情から各地に散ら

もとは先帝の離宮だったという玉華寺は、まだ冷気が肌
をさすほどに春浅かった。

仏法を邪教とよんだ先帝も、三藏法師だけはそばからは
なさず、晩年は訳経に障るほど召し出していたと聞く。先
帝崩御のおり、法師が漢訳したのが、かの『般若心経』で
ある。深い竹林を抜けて薄墨の空がひらくと、春寒にたた
ずむ伽藍は、やはり美しい殿宇だった。

道昭の到着を知った窺基が体から真っ白な息をはいて駆
けより、「よく生きていた」といびつな顔をこすりつけて
きた。素食でどうしてここまでなるのか、ますます肥えて
三人分はあろうかという尻の幅である。いまや唯識論漢訳
の筆頭として名を得る彼は、いずれ慈恩寺を継ぐとまでい
われている。しかし、円測はもとより普光や嘉尚とまで対
立したと一笑する傲岸ぶりに、道昭はうれしいやらあきれ
るやらだった。

「西市にでも入りびたっていたのか？ 和上がお待ちかね
だぞ」

道昭は満身が熱くなった。慧滿禪師が手をうっていたの
は知っていたが、それでもたちまちに気おくれし、体中を
さわって風体をたしかめた。窺基は道昭のあわてぶりを笑
い、からかいつつ、巨体をかたむけ法師の住まう肅誠院
につれていった。

ばった倭僧の近況まで、こまかく語りつづけた。道昭は終
始気おされ、その半分も耳に入らないまま、覚勝の名がな
いことに気づいて聞きかえした。

「あのかたは昨年の秋に亡くなられました」

事柄の一つをつぶすように話していた定慧は、道昭が色
を失うのをみのがした。

「死んだ？ なぜ？」

「それが、よくわからないのです。事故だったとも、自死
だったとも」

ふいに二人の近くを通った唐僧に気をとられた定慧は、
そちらに向かって流麗な唐語を二三はなった。それは、あ
たかも音曲を聴くような、なまりのない完璧なものだった。
道昭は黄河の泥のように重く、にぎったものが身にまとわ
りつくのを感じながら、定慧に短い別れをつけると、逃げ
るように長安をあとにした。

長大な渭橋をまえにして、道昭は足を止めた。いにしえ
より伝わる木橋の橋脚は防護板におおわれ、流水はなだら
かに移ってゆく。水面に覚勝の歯をむき出した笑顔がにじ
んで流れていった。おそらくは孤独のうちに死んだ覚勝の
悲痛に胸がつぶれそうになりながら、一方で荷を下ろした
ような安堵をおぼえ、道昭は暗然と流れをみつめた。凍え
る橋のうえでどれくらいの時がたったのか、道昭はその足
を北にむけた。

小さな院はうらかな陽光をうけて、ひっそりと建って
いた。

内垣を横切って歩みを入ると、かすかな甘い匂いがた
だよってくる。小さな細い枝に五弁の白い花がふたつ、みつ
つと咲いていた。

「それは、梅の花だよ」

道昭がふりかえると、三藏法師が五年の歳月を一瞬でわ
たつたようにたたずんでいた。

「先帝が江南より何万本もとり寄せられたのだが、北の地
ではうまく根づかなかった。ここは、ほかより暖かくして
もらっているせいかな、生きのこった枝が花をつけたようだ」

それは、秋月を映し出すように、透明で硬質な白だった。
丈の高い法師の立ち姿はいっそう細く、あごや首の肉は見
苦しくおちていたが、目の奥にひそむ純一な光は失せるこ
となく、道昭には、かえってそれがつらかった。

「すぐにはかなわないうが、倭国にわたる船の段取りは、わ
たしがつけよう。持ちかえる経論や舍利の用意もするから、
まかせておくれ」

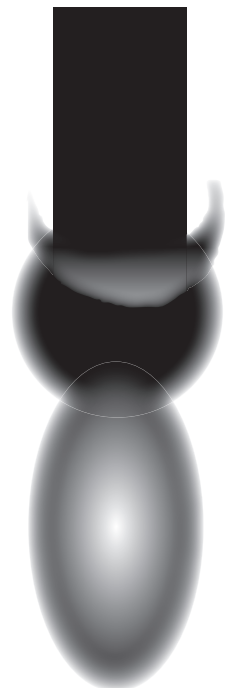
道昭は頭を下げつつ、寛大すぎる法師の厚意を受けとめ
されずにいた。よもや蕪菁や大根を漬けていたとも言えず、
歯切れの悪い返答がもれ出るばかりである。急に、大唐で
すごした歳月が、京師にただよう砂のように意味も価値も
ないものかと思えて、道昭はやせさらばえた醜い手を、袖に



田名トモ ——— たな とも
1964年生まれ
退職教員
島根県出雲市在住

銀華文学賞 優秀賞 受賞の言葉 田名トモ

文筆活動経験のない素人に受賞の知らせが届き、うれしい限りです。三蔵法師に関する本をいくつか読み、小説にしたいと思い立ちました。なにぶん文才乏しく、四苦八苦しなうが百回は書き直しました。なんとか他人に読んでもらえる仕上がりになったのだと、今回の受賞で知ることができました。ありがとうございました。



かくして背を丸めた。

「慧満は奇矯な男だろう。あれは、昔も今も、わたしのよ
うな学僧を鼻で笑っているのだよ」

突然、声をたてて笑う法師に、道昭はおどろいて顔をあげた。そのずれた瞳はまっすぐに道昭をとらえ、慈恩寺では想像したこともない、屈託のない笑顔がそこにあった。当惑する道昭に、法師は底の浅い鍋をとり出してみせた。遊牧の民が使うというそれは、鉄の鋳物とは思えないほど軽々と、法師の手指を支えにゆれていた。

「わたしが生死の境にあるとき、これをたずさえた人がむこうからやって来て、梨の羹を作ってくださいました。持ちはこびがよいから、もってお行き」

機嫌よく鍋をさし出す法師の姿に、道昭はいたたまれなくなつて声をあげた。

「そのように尊いものは、ただけませぬ。どうか、和上のおそばに置かれますように」

しずかに座る三蔵法師は面持ちよく、息もとのつていたが、道昭は師の余命がそう長くないことを満身でとらえていた。鍋を手ばなせば、その冥加もはなれるのではないのか。法師は鍋の重みがつらくなつたようすで、道昭に手を出すようながした。

「おまえが凍えた人に粥でも作つてやれば、わたしが西方を旅したことも無駄ではなかったと、慧満に言つてやれる

だろう」

道昭が袖ごと底を持って抱きよせると、鍋は袈裟にふれ、かすかな音をたてた。そこには、覚勝がくれた棗の種があった。春の陽光をうけた金物は人肌にあたたく、ふしくれ立って割れた手指をいたわるように熱がつたわってくる。身は削げ、かわききつた道昭の体からこぼれ出る涙を受けとめ、鍋は瑠璃色にかがやいていた。

三蔵法師玄奘が寂したのは、三年後の春二月である。窺基（正しくは「基」）は、のちに慈恩大師とよばれ、法相宗の祖となった。定慧は謎が多く、帰国後に早世したとされる。道昭は飛鳥寺の隅に禪院を建て修禪をする一方、各地に井戸をうがち、池や堤を築き、架橋に尽力した。持統天皇の御世、彼は薬師寺で経を講じている。薬師如来が日光、月光菩薩をともし地上にあらわれる姿を、その目で見たかもしれない。覚勝は唐土で没したことが伝わるのみである。



明治文学の草創期に彗星の光芒を放って文芸批評の先駆をなした若き文学者斎藤緑雨。樋口一葉の才能を早くから鋭く見抜き、「私たちが願っているのはあなたの大成です」と率直にぶつけた早世の批評家の軌跡を、群像新人賞受賞文芸評論家がここに蘇らせた。畢生の「斎藤緑雨」文芸評論集。

1512円（税込／送料共）
御注文はアジア文化社まで



幕臣たちの肖像

BAKUSHINTACHI NO SYOZOU

柴田耕平

手宮工場で組み立てる終えた第2台機関車（市川市）

「文芸思潮」推薦本／中西出版発行
柴田耕平著

震災下の脳手術

石垣麗子

その日は、敏夫と里子が、それぞれ勤める中学校の卒業式だった。しかし、二人がいるのは、名取市にある宮城県立がんセンターの四階の病棟の個室である。

「その時」は突然訪れた。ゴォーという地響きの音とともに、病室の壁に一気に縦の亀裂が入った。二人には、一瞬何が起きたか分からない。今までに体験したことのない激しい揺れに、病室が真つ二つに裂けるのではないかという恐怖が走った。里子は、とっさにベッドの上で身動きできない夫の敏夫の胸にしがみついて、ベッドが動くのを押さえようとした。

敏夫は、今朝の脳外科外来の診察で、脳腫瘍の診断が出て、そのまま緊急入院することになった。つい先程、手術

の術前検査で造影剤の検査をしたばかりの敏夫は、起き上がることを禁止されていたのだった。

何？ 何が起きた？ 里子と敏夫は見つめ合う。ただ息を飲んで見つめ合う。無事だった。言葉はなくとも二人ともそう感じていた。

担当の看護師がやって来て

「小林さん、大丈夫でしたか？」と声を掛けてくれた。

「はい。なんとか。壁がこんなになっちゃって、もう、びっくりしました」

「今、皆さんの無事を確認していました」

「あの、看護師さん。夫の手術はどうなりますか？」

遠慮がちに尋ねる里子に、看護師は顔を曇らせ困惑した

様子で応じた。

「それは、ちょっと、ねえ。今はこんな状況ですから」

「そうですか。そうですよね」

聞かなくとも分かるようなことを聞いてしまったなと、里子は思った。でも、確認せずにはいられなかったのだ。敏夫はこれからどうなるのか。

七階では水道管から水漏れしたとか、上層階の被害状況が耳に入ってくる。ナースステーションで流れたラジオから、どうやら相当大きな地震が起こったことが分かった。それはそうだ。四階の病棟だったこともあるが、建物が倒壊するのではないのかと思うほどの強く大きな揺れだったのだから。……アナウンサーは冷静な声で「震度七、宮城県北部。震度六強、宮城県中部。震度六弱、宮城県南部。身の安全を図ってください。落ち着いて行動してください。津波の恐れもありますので今しばらくお待ちください」と伝えていた。

保育園に預けてきた三歳の守を、今日に限って、里子の実家の母にお昼に迎えに行くよう頼んでおいてよかった。とりあえず、守の所在は、逢隈の実家にあることは確実だ。みんな、どうか無事でいてほしい。この状況では外はどうなっているのかさえ分からない。とにかく、母に連絡をしなければと携帯電話を手にとると、異常なまでに電池が減っている。つながらない。里子は自分自身に言い聞かせ

るように口を開いた。

「守はきつと、ばあちゃんの所で大丈夫だよ」

「そうだな」敏夫は短く答えた。

里子は守の身に何か起こったかと思うと、気が気ではなかった。守は、さぞや怖かったことだろう。里子は守の顔を見たくなった。今すぐ守を抱きしめてあげたいと思った。父ちゃんも母ちゃんも、無事だということを伝えたいと思った。

学校は大丈夫だったろうか。卒業式は午前中だったから、生徒達は下校して在宅中だったはずだ。大きな被害が出ていなければいいなと、無事を祈るばかりだ。

ラジオからは津波情報が流れてきた。「津波」という言葉が耳に入った途端、不安が過ぎった。亘理荒浜の漁港付近には里子の母方の祖父母と叔父夫婦が住んでいるからだ。本当に津波は来るのか。里子には津波というものがどれほどのものなのか、ピンとこない。でも、今回はやはり言いようのない胸騒ぎがした。里子がいつも通っている美容院はどうだろうか。その美容院は海にほど近い荒浜中学校の向かい側にあった。荒浜の人達は、みんな、ちゃんと避難しただろうか。自分たちが無事だった分、様々な人のことが気にかかりだす。

「みんな、大丈夫かな」

里子が漠然とした不安を漏らす。

「大丈夫だよ」

敏夫がなだめる。脳腫瘍の敏夫は、傾眠状態にあり意識が朦朧としている。そんな中でも、何か大変なことが起きているということは理解しているようだ。

病院では非常食の配給があった。缶詰のおかゆとサバ缶一つだった。エレベーターが使えないので、階段で看護師や職員がバケツリレー方式で物資を運んでいる。こんな光景を目の当たりにして、「これはただ事ではない」と、つくづく思った。医療が完全にストップしている。もう、敏夫の手術云々というレベルではない。まさに非常事態だ。

もし、敏夫の手術ができないなら、病院に留まる意味もないのだが、造影剤検査をして身体を動かすことを制限されている敏夫は、病院に残るしかない。敏夫の体には点滴と導尿の管が痛々しくのびていた。里子は夜の八時半を回ると、看護師に敏夫のことを頼んで、とりあえず、守が待つ実家に行くことを決断する。

「敏夫さん、アタシ、守のところに行ってみるよ。明日また来っからさ、動かないで安静にしてるんだよ。看護師さんの言うこと、ちゃんと聞いてね」

「ああ」

敏夫は機械的に答えた。里子は、本当は病院に残った方がいいのだろうと思ったが、三歳の息子のことも心配だった。敏夫には医師や看護師が付いてくれるから、敏夫

夜の十時近くだった。

懐中電灯の弱い光の中で、守は里子の父方の祖母、おばんちゃんの膝に抱っこされていた。守にとってはひいばあちゃんだ。御年九十歳のおばんちゃんは、長時間同じ姿勢で守を抱っこして腰が痛くなったに違いない。

おばんちゃんと母が、里子を労うように言った。

「うわあー、ようやく帰って来れだねえ。あれ？ トスオちゃんは？」

「敏夫さんねえ、脳腫瘍だって。造影剤の検査をして、身体を動かさないから、病院に頼んできた」

里子の頬はいつの間にか濡れていた。一瞬空気が凍り、一同ため息をつき、やっぱり肺がんが脳に転移していたのかと氣を落とす。場を取り繕うかのようにおばんちゃんと言う。

「守なれ、こーれ、こいなく、ずーっと、オラさ、抱がさってんだあ。母ちゃんが来てよがったなれ。守やあ」

「守。母ちゃんだよ。おばんちゃん、ありがどねえ」

「守、おいで。怖かったよねえ。」

里子が呼ぶと、守は無言でそっと身を寄せてきた。

「守、おばんちゃんたちとお留守番して偉かったね」

里子は守をギュッと抱きしめながら、

「みんな、大丈夫だったんだねえ」と言った。

母が状況を説明してくれた。

の身に何事が起きたときにはどうにかなるだろう。そう無理矢理な理由をこじつけて、迷いに迷いながら病室を去った。一階のロビーに降りると、奇跡的に実家の母と携帯電話がつながった。

「今からそっち」と言ったところで、ブツツと里子の携帯電話の電源は落ちた。

後ろ髪を引かれる思いで、病院の外に出ると、市内は不気味なほど真っ暗な闇に包まれていた。いつも点いているはずの電灯が消えている。停電だ。里子は勇気を振り絞って、闇の底からエンジンをかける。車のヘッドライトの灯りだけが頼りだ。店の灯りも信号も消えている。街中が停電していて、どこがどこか分からなかった。いつも走っている道路はガタボコに隆起している。里子は前屈みになり、車を走らせる。とにかくゆっくりと走る。いつもなら数分で駆け抜けている道が、これほどまでに長いと感じたことはなかった。

里子の車が、県道から国道四号バイパスに右折で入ろうとすると、車列は交互に道を譲り合っていて、里子もほどこなくして右折できた。里子は、日本人とは何と素晴らしいのかと感動を覚えた。真っ暗でも、信号がなくても、この非常事態に我先にではなく、お互い譲り合いの心が生きている。お陰で安全に国道四号線に入ることができた。そこから国道六号線に進み、逢隈の実家へとたどり着いたのは

「地震が来た時、たまたまさつ、みーんな茶の間さ居て、三人の子供らを、おばんちゃんとオレと美香の大人三人で、一人ずつ抱っこでぎだんだよ」

「そうだったんだ。そりゃあよかった。荒浜は？」

母は興奮気味に答えた。

「避難して無事だったやあ」

里子はホッと胸をなで下ろした。

「みんな、大丈夫だったの？」

「屋敷はさつぱと津波に持っかけて駄目だけれども、みんな、町の体育館に避難して、命だけは助かったよ。さつき、ハルちゃんわざわざ来て報告してたんだ。今日に限って、ハルちゃん仕事休みで家さ居だんだ。十メートルの津波来るって放送聞いた途端、ハルちゃんでは、これはホントに津波来るぞって、財布と通帳とはんこだけ持って、避難すんのばやんだがるじいちゃん、ばあちゃんばギリギリ連れで、とつとつと車で逃げだんだとさ。おんちゃんも仕事だったけど、そつからすぐに避難して、避難所でハルちゃん達と合流できだんだ。まるで、津波が来っこと分がって、ハルちゃん仕事は休みにしてだみいだな」

「奇跡だね。良かった。本当に良かった。どうなることかと思っ心がザワザワしたよ」

「んでもさ、町中、停電だし、水も出ないんだよ」

「えっ？ 水も駄目なの？」

里子は、病院では水が出たので、まさか断水しているとは思わなかった。インフラが断たれている。余分な水がないことを知る。

カタカタという揺れは何度も何度も続いていた。子ども達は疲れ果てて眠りについていたが、大人達は誰もが一晚中眠ることはできなかった。

ああ、敏夫の手術はもうなるのだろう。明日、病院に行つて確かめなければ。それにしても、地震が起きた時に頭の手術でなかったことだけは幸いだった。でも、このまま手術できなければ、あとどれくらいの命なのだろうか。里子の不安は募るばかりだ。

夜明けとともに、里子は、亘理の自宅を確認しに向かった。自宅の室内はめちゃめちゃだった。壁のあちこちに亀裂が入り、床にはひっくり返ったテレビや物が散乱している。ガラスの破片も飛び散っていたが、片付ければ何とかなることが分かった。

早朝にもかかわらず、お向かいの木村のおばあちゃんが訪ねてきてくれた。普段から守を実の孫のようにかわいがり、何かと声をかけてくれる気のいいおばあちゃんだ。年齢は八十そこそこといったところだ。

「おはようさん。里ちゃんの車がなかったから、心配してたんだよ。無事でよかったわあ。ほんまに怖かったよねえ」

「守は実家の母の所に預けてきたんです」

「そうなんやねえ。色々大変やねえ。困ったときはお互い様だよ。何かあったらいつでも守ちゃんの面倒を見てあげるから、心配せんで旦那さんとこ見てあげなねえ。まあ、ほんまにえらいこっちゃ」

木村のおばあちゃんの言葉が心に染みて、里子の瞳は潤んだ。「負けてらんねっちゃ」と里子は自身を鼓舞し、家の片付けを素早く済ませ、一旦、実家へと戻った。

実家には、母方の荒浜の八十代の祖父母が、身を寄せてきていた。昨夜は、体育館に避難したものの、高齢なためトイレをはじめ集団生活は難しいだろうとのことで、母が迎えに行ったのだ。祖父母は憔悴しきった様子だった。祖父母が靴代わりに履いてきたボロボロになったスリッパが、着の身着のまま避難してきたことを物語っていた。里子の叔父夫婦は、体育館での避難生活を余儀なくされた。母が避難所で聞いた話では、さっさと避難した人達は助かったが、「津波が来るんだべか？」と堤防に様子を見に行つた人達や、準備に手間取った人達は、逃げ遅れて、轟音とともに押し寄せた黒い渦の犠牲になってしまったという。中にはペットの犬を助けに家に引き返して津波に襲われた人もいたらしい。

「何なんだ」と里子は心の中で叫んだ。本当に一体何が起きたのか、里子は混乱する。深呼吸をして心を落ち着かせ、

「わあ、木村のおばあちゃん。おはようございます。本当に怖かったですね。うーん、それが、無事は無事だったんですけどね。実は、敏夫さんに脳腫瘍が見つかってしまつて、手術をするはずだったんです。でも、地震で手術どころではなくなってしまつて。もう、どうしたらいいのか頭の中が混乱しているところなんです」

「んまあー。なんだべえ。そりゃあえらいこっちゃあ。病院はどごなん？」

「名取のがんセンターです」

「それは、ちよつと遠くて難儀やねえ。家の亡くなった主人もがんセンターに入院してたことがあったけども、看病しに行くのに遠かったよねえ」

「そうなんですよね。遠いですよね。丁度ガソリンもなくて、入れないといけないんです」

「里ちゃん、それがねえ、ガソリン、手に入らんみたいんよ」

「えっ？ そんなあ」

「地震があつた後、あそこのガソリンスタンドに駆け込みで長い行列ができてね、もう、全部のうなつたつて聞いたんよ」

「そうだったんですか。じゃあ、別な所でガソリン入れないと」

「そうだねえ。それがええねえ。ところで、守ちゃんはどうしたん？」

自分が、今、何をすべきなのかを考える。

「母さん、アタシ、とにかくがんセンターに行つてみるよ。敏夫さんどうなってるか、見て来つからさ。悪いけどさ、守のこと頼むね」

里子の父は早世している。母の立場にしてみれば、九十歳の姑おばんちゃんと、荒浜の八十代の両親、三歳の孫の守を預かつたうえに、同居している弟夫婦には二歳の子と生まれたばかりの赤ん坊がいた。高齢者が三人、幼児が二人、乳児が一人、そして母と弟と弟の妻。食事の用意も難しい状況だ。乳飲み子を抱えた義妹の美香は、不安と空腹で母乳が出ない。かといってミルクを作る水もわずかだ。実家の母も大変だろうと思つたが、守を預かってもらうしかなかった。

車を走らせると恐ろしい光景が広がった。昨夜、よくこの道を走つたものだとながら感心するしかなかった。斜めに傾いた電信柱、鋭利に隆起したアスファルトの道。大きく陥没した道。突き出たマンホール。よくもまあ、そこにはまることもなく、タイヤもパンクすることもなく、走り抜いたものだと思つた。

病院はいつも増して静かだった。四階の病室に着くやいなや、看護師が来て言った。

「小林さん。夕べ、夜中にご主人が立ったんですよ」

「えっ？ 立ち上がっちゃったんですか？」

「起き上がるのは禁止してお伝えしたのに、危なかったです。命にかかわることですからね」

「ああ、それはすみませんでした。アタシが付き添えればよかったんですけど。三歳の幼い子どもがいるもんで、どうしても付き添えなくて。すみませんでした」

「小林さん、今日、外泊されますか？」

「えっ？ 外泊してもいいんですか？」

「県外とか家が遠い方は、お迎えが困難なのでお声掛けしてませんが、小林さんは亘理だから、お家に帰れる方には許可が出ますよ」

「じゃあ、外泊させてください。自宅の様子を見ます。お願いします」

里子に迷いはなかった。思いがけず外泊の許可が出て、喜んだのもつかの間、昨日よりも敏夫の意識が朦朧としていくことに気付く。導尿の管を外してもらった敏夫は、尿意を感じるのが鈍くなったのか、やっと着替えたばかりのスラックスを濡らしてしまった。病室の床には水たまりができた。敏夫の下半身をタオルで拭いて、仕方なく、バジヤマのスボンに履き替えさせて、再び身支度を調えた。それだけで、もう精一杯だった。里子は、水たまりの処理まで手が回らず、そのまま放置して病室を出た。敏夫はフラフラとして足取りもおぼつかない。左の手足に麻痺が出ている。こんなに激変するのか。

ガソリンさえも容易に手に入らないと知った里子の不安は、一層大きくなる。今後、無駄な運転はできない。

震災か、脳腫瘍か、どつちかにしてくれ。なぜ、一度にこんな苦難が押し寄せてきたのか。里子の心は穏やかではない。

誰が悪いわけでもない。普通に生活して、普通に幸せだった。それが「あの時」を境に木っ端微塵に飛び散った感じだ。実家に立ち寄り、預けていた守を引き取る。これでやっと親子三人が揃った。これが当たり前だと思っていた日常が、当たり前でなく尊いものだと気付かされた。

「家の中はごちゃごちゃだけどね、石油ストーブもカセットコンロもあるから大丈夫だからね。あったかいご飯を食べようねえ」

自宅に到着した里子は、車内に敏夫と守を残して、家の中をざっと見回し安全を確認した。敏夫と守を家の中に順番に連れて入る。ふらつく敏夫を守は不思議そうに見ていた。

「守、父ちゃんね、病気なんだよ」

「とうちゃん、びょうき」

「そう、父ちゃん病気ね。優しくなでなでしてね」

里子はカセットコンロに鍋を仕掛けご飯を炊いた。冷蔵庫にある物で傷みそうな食材から使うことにする。卵と鶏肉が目に入った。敏夫が食べやすいように、鶏肉を細かく

エレベーターが止まっているため、四階から一階までは階段を使わねばならない。行けるのか？ 行くしかない。ここにも、支給されるのは缶詰のおかずだ。これから手術を受けようとする患者が、おかゆ一缶では体力を奪われてしまう。自宅に行けば、何かしら食料はある。

「敏夫さん、お家に帰ろうね。行こう」

里子は身長百八センチ、八十キロの敏夫の肩を組んで、一段、また一段、階段を降りた。火事場の何とかとは思ったもので、自分のどこにそんな力があるのかと思っただ。売店で辛うじて残っていた大人用の紙オムツを購入した。「いっち、につ、いっち、につ」と、かけ声を掛けて、病院前のバス停のベンチにたどり着き、ゆっくりと敏夫を座らせた。里子は、つまづきそうになりながら駐車場までダッシュで車を取りに走り、車をベンチのそばに乗り付けた。敏夫は座位を保てずに、ベンチに横たわっていた。何とか敏夫を担ぎ、車に乗せてシートベルトで固定して、帰路につく。

途中でガソリンを入れようと考えていたが、その考えは甘かったと里子は思い知らされる。どこも開いていないのだ。朝、がんセンターに向かう時には、車の大行列があったガソリンスタンドが、今は閉まっていてシンとしている。行列に並んでは病院に着くのが遅くなると考え、ガソリンを入れるのは帰りで良いかと思ったのが間違いだった。

刻んで、親子丼にしよう。

敏夫と守は石油ストーブのそばで暖をとりながら遊んでいる。と言っても、敏夫はただ、ままごとで弁当箱におもちゃのおかずを詰めている守の姿を、ぼんやり眺めているだけだ。

「火のそばだから、危なくしないでね」

敏夫からの返事はない。

「はい、ご飯できたよ。三人で食べようね」

「いただきます」

守の発声で、敏夫はスプーンを持ったが、口の右側から食べているそばから、左側からボロボロとご飯がこぼれるような状態だった。麻痺が進んでいる。

守は上手に食べている。

里子は敏夫を介助し、何とかご飯を食べさせて、座敷に敷いた布団に寝かせた。シーツの下には、ゴミ袋を敷いて粗相をしても大丈夫なようにした。即席の防水シーツだ。

「敏夫さん、ガサガサ音するけど我慢してね。ここは敏夫さんのお家だから、ゆっくり休んでね」

病院にいた方がよかったのか、自宅にいた方がよかったのか。冷えた空気が里子の心に刺さる。

と、その時、地区の役員が訪ねてきた。

「小林さん、居だがい？ 班長さんは、これから各家庭に毛布の提供をお願いして回ってける。集まった毛布は公

会堂さ運んで、そいづば支援物資として、体育館に避難している人達に届けるんだってよ」

小林家は地区の班長を務めていたのだった。里子は、役員に事情を話し、手分けして班の十八軒のお宅を一軒一軒訪問して、毛布類の提供を呼びかけた。家を留守にして敏夫と守の二人だけにするのはとても心配だった。班の住人の善意で、結構な数の毛布が家に集まった。それを公会堂まで運ぶまでが仕事だ。小林家の非常事態を知った近所の工藤さんが駆けつけ、リヤカーで全部運んでくれた。本当にありがたいと里子は思った。

隣家からは、飲み水と豆腐一丁とネギの入った鍋料理が届けられた。畑を作っている方からは白菜や大根をいただいた。情に厚い地域だと里子は泣けてきた。食料や物資の少ない中を分け合って支えてくれようとする精神に、この災難を乗り越える力を得た。

敏夫と守との三人暮らしは三日ほど続いた。病院とは連絡がとれず、病院に戻るタイミングが分からない。病院に戻っても、食料が不足しているのでは困ると思った。敏夫の傾眠はどんどん進んでいるように思えた。自宅に居る限りは介助すれば食事は十分に摂れる。今後、嚥下障害が出てくるとそれも難しくなるだろう。このまま敏夫の死を迎える覚悟をせねばならぬのか。

木村のおばあちゃんの家には、避難所を二日で出て、身

へ避難させようとしたのっしや。家を出る時、隣の家のずんつあんば見かけたから、ずんつあんもあばいん！ って叫んだげんとも、隣のずんつあんニコニコして、オラ行がんともいいす、って手を振ったのっしや。それが最後の……」

言葉に詰まった姪御さんは嗚咽した。木村のおばあちゃんが声を震わせてつぶやいた。

「あんた、ほんとに辛い思いしたんねえ」

姪御さんは再び話し始めた。

「こっつは、校庭に津波が上がってきて、体育館ではダメだつうことで、今度は校舎の三階まで、足の悪い舅を連れて階段は上がったのっしや。ホントに生きるか死ぬかの瀬戸際。オラあ、必死で舅は引っ張って持ち上げたのっしや。階段のあつこどあつこど。おどげでねえ階段のぼつて何とか命助かったのっしや。隣のずんつあんはさあ、一キロぐれ離れた工場の裏で傷だらけで……」

助かったってこと？ と里子は思った。すると、木村のおばあちゃんが言った。

「隣のずんつあんは亡くなつてはったんやね？」

姪御さんは涙を流しながらうなずいて続けた。

「んだ。傷だらけで。波と瓦礫に巻き込まれで服ひきちぎられだんだべな。何と丸裸の状態で見つかったのっしや。あん時、無理矢理にでも連れでこればいいがったのっしや。

を寄せている荒浜の姪御さんがいた。木村のおばあちゃんと姪御さんが、サバ缶と黒飴をもって現れた。

「里ちゃん、敏夫さんの具合はどうなん？ 少しでも栄養とらんとあかんよ。風邪なんかひいたら大変や。これ、敏夫さんと守ちゃんにと思って、少しだけど食べて」

「おばあちゃん、ありがとうございます。姪御さんも大変でしたね。お見舞い申し上げます」

「まあ、どうもねえ。今まで、大変つう言葉、簡単に使っただけどさ、大変つうのはこんな時に使う言葉なのっしや」

「そうですね。きつとお辛い思いをされたんでしょね」

里子が返すと、姪御さんが口を開いた。

「まあ、十メートルば軽く超えた津波だったのっしや。その破壊力つたら言葉にできね、想像もつかねもんだつたのっしや。波ばもろにかぶった人で形がまどまなのは、まあ、ねえのっしや。棺桶の数が足んねくて、板で簡単な箱は作ってB&Gの体育館に遺体安置してんのっしや」

形がまども？ 棺桶の数が足りない？ 一瞬、里子は言葉の意味を理解できなかった。どれだけの人の命が奪われたのか。これからどれだけの箱が必要となるのか。「あの時」何が起こったのかという生の声を聞き、里子はガタガタ足の震えが止まらない。声も出ない。うん、うん、とうなずくので精一杯だ。姪御さんは話を続けた。

「オラは、足の悪い舅を車に乗せて、荒浜小学校の体育館

本当に気の毒なごどしたあ。助けられたはずの命ば、オラ助けらんねがったのっしや。もぞこいごだ」

あまりにも壮絶な話にショックを受けた里子は一言も発することが出来なかった。

避難所では、荒浜の祖母の九十代の友人が高熱を出し、そのまま肺炎を起こしてあつという間に亡くなったという。せつかく津波から逃れて生き残ったというのに、避難所で命を落とすとは悲しすぎる出来事だった。

里子の従兄弟の公太兄ちゃんは、相馬の会社からの帰りに、国道六号線の渋滞を避けて、あえて海沿いの道に入り、走行中に黒い渦にのまれてしまった。車内にいたため遺体に傷がなかったのが、せめてもの救いだつた。里子にとって、幼い頃から兄弟のように仲良く育った公太兄ちゃんが亡くなったのは、我が身を引き裂かれたような痛みが走った。これが現実なのか、信じられなかった。里子は慟哭した。

そんな中で、敏夫は生きている。傾眠状態で意識が朦朧としながらも生き残っている。息をしているのだ。まだ可能性はある、と里子は信じた。

「小林さーん。盛山です。ご在宅ですか？」

里子が務める中学校の校長がわざわざ安否確認にやってきてくれた。敏夫はその声にパッと目を見開き、布団から

這いずり出て挨拶しようとした。朦朧とした意識の中でも、自分は教員であるという自覚はあるのか。敏夫はボサボサの髪で

「ありがとうございます」

と、ろれつが回らないながらも、校長に挨拶をした。パツと敏夫の意識が元に戻った瞬間を目の当たりにした里子は、敏夫をがんセンターに戻さなくてはならない、病院に行けば何か進展があるかもしれない、そんな直感が走った。

校長は、小林一家の無事を確認すると、

「職場はなんとかなるから、この非常事態の今は、旦那さんのそばについてあげなさい。介護休暇制度というのがあるんだが、記入例が脳腫瘍のものだったんだよ。旦那さんが脳腫瘍なら、一度申請してみてもどうかかな」と優しい言葉を掛けてくれた。里子は感謝の気持ちで一杯になった。そして、絶対に敏夫の命を助けようと思った。

「敏夫さん、病院に戻ろうね」

里子の言葉に対する返事はなかった。

ただ、途切れ途切れに敏夫はつぶやいた。

「あた、ま、いた、い」

一刻も早く病院に戻ろう、里子は決断した。急いで荷物をまとめ、守をお向かいの木村のおばあちゃんに頼んだ。里子は敏夫を車に乗せて、がんセンターへと向かった。このガソリンであと何回、自宅と病院を往復できるのだろうか。

か。

病院に着くと、看護師が口を揃えて言った。

「小林さん、無事でよかったです。連絡つかなくて心配しました。大丈夫でした？」

「はい、食事は何とか摂れてましたけど、頭が痛いって言い出したんです」

「そうですか。じゃあ先生に相談しましょうね」

病室に戻ると、壁には、あの日の地震の生々しい疵痕が残っていた。ほったらかしにした三日前の水たまりは、乾いて、黄色いシミになっていた。

脳外科の医師の説明によれば、

「頭蓋内亢進といって腫瘍のために急激に内圧が高まって頭痛が起こっています」

とのこと。なるほど、脳ミソの中に余分な物が入っているのだから圧が高まるのは里子にも分かる話だった。医師は続けて

「そのために腫瘍が神経を圧迫して、麻痺が起きており、このままでは命が危険です。だからその余分な物、腫瘍を取り除けば、とりあえず、本当に一時しのぎだけれど、頭痛と麻痺はとれます。でも、その手術が、被災した今の手術室の状況ではできないんです」

と言った。

誰にも分からない。でも、一つだけ確実に言えることは、生きていれば希望があるということだ。

敏夫の頭痛は、まさに分刻みに悪化し、それと同時に、頭の形がいびつに盛り上がり変形していった。七センチほどの腫瘍が入っているという。このままでは本当に命が危ないと感じた里子は、翌日、敏夫の職場に状況を伝えた。震災後の混乱の中、敏夫の職場の管理職をはじめ同僚の生方や友人も、幾度となく見舞いに来て励ましてくれた。中には、「職場への通り道」だと言って、毎日見舞ってくれる同僚の先生もいた。

連日、敏夫は頻繁に頭痛を訴える。痛み止めを打っても打っても、敏夫の頭痛は治まることを知らなかった。里子は見ていられなくて、

「先生、どうにかならないでしょうか？」

と脳外科の主治医にすがりついた。

「僕も早く小林さんの手術をしてあげたいんですが」

医師が敏夫の手をぎゅっと握る。医師の話では、手術室の機能が復旧すれば、一番乗りで敏夫の手術する予定とのこと。しかし、その日がいづなのかが分からないのだという。医師のそのことへのものどかしい思いが、里子にもひしひしと伝わってくる。先の見えない恐怖が、里子を包み込んでゆく。

津波で命を落とした人々、避難所で命を落とした人々、病院のベッドに横たわり唸り続けている敏夫。「人生って不思議だな」と里子は思った。いつ、どこで、どうなるか、

時を待つことようやく三月二十九日、敏夫の手術が行われることとなった。震災後の手術室の復旧で、一番乗りでの手術だという。敏夫と里子にとっては待ちに待った手術だ。人は、たった十八日間の待機期間だと言うかもしれないが、それはそれは長い時間だった。手術日が決まったので、医師から事前の説明を受けた。

「頭の皮膚をみかんの皮のようにむいて、頭蓋骨に円形に数カ所ドリルで穴を開ける。蓋をパカッと取るような感じで頭蓋骨を開け、浮いている豆腐のような腫瘍をスプーンですくい取る。あとはフィブリノゲンという糊で頭蓋骨の蓋を閉める。頭皮膚を縫い合わせる」

というような内容だった。

「腫瘍を取り除けば傾眠も麻痺もとれるんですが、万が一、神経に触ると麻痺が残る場合もあります。腫瘍は脊髄などにも転移している可能性もあるので、がんそのものが治るということではない、ということを理解してください」と医師は繰り返し言った。

「今より良くなるのならそれだけで良いです。お願いします」

先々のことを心配しても仕方ない。頭痛にもだえ苦しむ

敏夫の姿を見殺しにはできない。生きる可能性が少しでもあるのならば、危険な手術も挑戦するだけだ。敏夫もそれを望んでいる。

人生の中で一番長い一日だった。手術は無事に成功した。敏夫のスキンヘッドには、まるでカチューシャをしたかのような三十六針もの黒い大きな縫い目があった。それを白い包帯がとぐろを巻くように覆っていた。

ふと、ベッドサイドに目をやると、手術室の看護師からの手作りのメッセージカードが添えられていた。淡い桃色の台紙に、黄緑色と水色の型抜き花がしらわれたかわいらしいカードだった。色合いから春の息吹が感じられた。

「小林敏夫さま 手術お疲れさまでした。頭の手術ということですが不安だったことでしょう。震災のために予定していた手術が延期になり、大変お辛い思いをされた伺い、胸が痛みました。また、震災直後の手術という不安もあったかと思いますが、よく乗り越えられましたね。震災の影響で、これからもまだまだ落ち着かない日々が続くかと思いますが、前向きに進んでいきましょう。どうぞお大事になさってください。一日も早いご回復をお祈りしております。二〇一一年 三月二十九日 手術室 伊東」

手術室に入る時に、たった一目だけ会った伊東さんという看護師からだった。がんセンターの医療従事者の中にも被災者でありながら勤務している方が数多くいると聞いて

六ヶ月というエビデンスを、敏夫を超える可能性だってある。医師達の救いたいという思いは十分に伝わっている。

この震災で医師や看護師は、一体、いつ自宅に帰って、ご飯を食べて、睡眠をとっているのだろうか、と思うほど病院に留まっているのを里子は知っていた。だからこそ信頼できる医師の元で治療に臨みたい。

「敏夫さん、大丈夫。ここまで頑張れたんだから全とうまくいくよ」

「里子さん、ありがとな。オレ、里子さんと結婚して良かったよ」

敏夫が急に柄にもないことを言うので、里子は言葉が見つからなかつた。

「葬式は、悲しくないように、とびきり明るく出してくれよ。みんな！ ありがとって」

「じゃあ、ビデオレターでも用意しておく？」
ちよっとおどけて言う里子に、敏夫は姿勢を正して改まり

「えー、皆さん、本日は、ワタクシ、小林敏夫のためにお運びいただきまして？ いやあ。そこまではいいかなあ」

と笑った。里子のことを気遣ってか、表面上は明るく振る舞っていた敏夫だが、里子には、敏夫の静かな死への覚悟が感じられた。色々な生き様があるのだな、と里子は思っ

いた。そんな切羽詰まった中で、一体いつ、作成したのだろうか。職務を全うする医療従事者の、深い温もりを感じた瞬間だった。一筋の希望の光が見えた気がした。里子は麻酔から覚めた敏夫に見せた。敏夫はとても感激していた。二人はこのメッセージカードを「一生大切にしよう」と話した。

敏夫は放射線治療の後、髄膜までがんが及ぶであろうことを告げられた。残された道は抗がん剤治療だという。その抗がん剤は、医師曰く「とてもよく効く薬」とのこと。里子と敏夫は期待を込めて、新たな主治医となった内科の医師に尋ねた。

「先生、どれくらい延命できるんですか？」

医師はさり気なく答えた。

「最新の薬なので事例は多くないですが、六ヶ月という記録が出ています。人それぞれ違いはあると思いますが」

「ろっ、六ヶ月？ 六ヶ月ですか？」

医師が穏やかな口調で続けた。

「小林さん、どうしましょうか」

六ヶ月。たったの六ヶ月。されど六ヶ月。この薬を使わなければ、もっと早くに別れの時が訪れるということか。

敏夫と里子二人とも動揺を隠せない。

「分かりました。先生、どうぞよろしくお願いします」

里子は敏夫の手をぎゅっと握り、きっぱりと返事をした。

た。死は誰にでも平等に訪れる。ただ、早いか、遅いかの違いだ。

脳の手術をして、後遺症で脳波が乱れている敏夫は、いつ脳の発作を起こすか分からない体になった。里子は、できる限り敏夫のそばに付き添った。

幸いなことに、抗がん剤治療は順調で、懸念していた副作用もなく、敏夫の体調が良い時に外出届を出して、里子が運転する車に乗って、菩提寺を探し回った。ここは檀家料が高そうだから、急な坂がネックだとか、ああだこうだと言って、敏夫が「雰囲気が良い」と言った十文字という地区にある寺の檀家になることに決めた。その集落はその昔、十文字城があったという。義経に仕えていた源綱安が、衣川の戦いに敗れた後に、この地で城を築き十文字氏を称したと言われている。歴史好きだった敏夫らしい選び方だ。その後、数件の墓石屋を訪ねて、敏夫の好みの石を吟味し「河北山崎」という種類の石を選んだ。墓石には、お参りに来てくださった方々に対するお礼の意味を込めたいという敏夫の希望で、「感謝」という文字を刻むように注文

広告承ります

文芸思潮への広告ご希望は広告部まで御連絡ください。 ☎〇三・五七〇六・七八四七

した。葬儀場を三カ所見学し、会場を決めた。香典返しの品物も決めた。最期に会いたい人の面会リストも書いた。これがいゆる終活というものなのかと里子は思った。全ての段取りをつけた後、敏夫は不意につぶやいた。

「オレさ、死ぬのは怖くないんだけど、里子さんと守に会えなくなるのが、嫌だな」

死ぬのが怖くないなんてあり得ない。誰だって怖いはずだ。死ぬのは怖くないなんて、敏夫の優しい嘘だ。

十月に入ると、敏夫の病状は急激に悪化し、起き上がることも、話すこともできなくなった。里子にできることは、毎日穏やかな笑顔で敏夫に付き添う事だけだった。医師から余命一ヶ月の宣告を受けてから、里子は毎日の帰り際に「また明日会おうね」という約束の意味を込めてキスをした。敏夫は目で「ありがとう、また明日ね」と応えていた。敏夫は目で「ありがとう、また明日ね」と応えていた。敏夫の前では絶対に涙を見せなかったが、一歩病室を出ると溢れ出す涙を止めることはできなかった。この世に、敏夫のいない世界なんて考えられない。里子は息ができないほどの苦しさを覚え、崩れ落ちた。全てが悪い夢であってほしいと願った。

十一月に入り、医師に呼び出された里子は、「舌根沈下が起きているので、もう長くありません。会わせたい方々に連絡をして、面会に来てもらってください」

んはもう泣かないよ。守、ありがとうね」

里子は守をギュッと抱きしめた。遺された母子の会話は、聞いていた周囲の人々の涙を誘った。

敏夫の葬儀から六ヶ月経った頃、里子が世話になっていた美容院から、町内に移転開業したという案内の葉書が届いた。早速、里子は美容院を訪ねた。家と美容院は跡形もなく流されたものの、美容師さんは避難して無事だったのだ。美容師さんは避難する途中、海の方へ向かって走る車を何台も見えたそうだ。「戻れっ！」と叫んだけれども誰も引き返す車はなかったという。その事をとて無念そうに語った。

「いやあ、それにしてもさっ、人生は本当に分かんないっちゃねえ。まさかこの歳でさあ、ゼロからの出発どころかマイナスからの出発だっちゃあ。瓦礫の中をさまよい歩いて、流された金庫の中からお客さんの名簿が出てきた瞬間は、ただただ嬉しくて泣いちゃねえ。そのお陰でこうして葉書が出せなんだっちゃ。いやあ、また会えてよかったあ。くよくよせずに前を向いて生きていかんとね。もう笑うしかないっちゃねえ」

美容師さんは豪快に笑った。里子の脳裏に、「復興」の文字がよぎった。

と告げられた。里子は、敏夫が以前準備して書いた面会リストを見て、各人に連絡を入れ、足を運んでもらった。いよいよ、覚悟を決めなければならない時がやってきたのだ、と里子は思った。

三十六回目のキスを交わした日、なぜか、里子は、一階のロビーに降りてから、再び敏夫のいる三階の病室に引き返して、もう一度キスをした。後から思えばそれが最期のキスだった。三十七回目のキスを交わした翌朝、敏夫は永遠の眠りについた。とても寒くて静かな朝だった。

自宅に搬送され座敷に敷いてある布団に横たわっている敏夫を見て、守はつぶやいた。

「とうちゃん、いつ、おきるんだ？」

「守、あのね、父ちゃんはもう起きないんだよ」

「おきないのか？」

「そう、天国に行ったから起きないんだよ」

「てんごくって、どこ？」

「うん、遠いお空の向こうかな」

「そうなのか。かあちゃん、もう、なくな。あたらしい、とうちゃん、かってやるから」

「守。残念だけど、父ちゃんはお店では売ってないんだよ」

「そうなのか。じゃあ、どこにいる？」

「守の父ちゃんは、ここにいてる父ちゃんだけだよ。母ちゃん

二〇二二年、おばんちゃんが百二歳で、木村のおばあちゃんが九十一歳で、相次いでこの世を去った。「大往生」と人々は言った。敏夫の倍も長生きをした二人の女性の人生には、どんな物語があったのだろうか。若き日には、戦争を乗り越え、宮城県沖地震を経験し、晩年には、東日本震災とコロナ禍を過ごし、波瀾万丈の物語だったに違いない。いつか別れの時がやってくることは分かっているけど、里子にとっては、とても辛い別れだった。「大切な人は、みんなあの世にいつてしまっんだな」と里子は思った。

二〇二三年、震災の犠牲者と同じく敏夫も「十三回忌」を迎えた。菩提寺の住職の話によると、「十三回忌」というのは、仏様になった故人が、大日如来様と一つになる日で、とても重要な意味がある日なのだそう。十一年間、教え導かれた故人の悟りが、どれだけ深まっているかを見ていただいた上で、さらにその先に導いていただけがある。ありがたい日というこららしい。住職の話を聞いて、里子は一つの節目を迎えたような気がした。

大切な人々を失った里子の深い悲しみは、癒えることはない。でも、悲嘆に暮れて塞ぎ込んでいる里子の姿を、決して敏夫は望んではいないだろう。どんなに悲しくても、生かされている限り、前に進まねばならない。そう里子は思う。

里子は、高校生になった守の横顔に、ふと敏夫の面影を

見た。守には当時の出来事を話したことはない。守は、父親のことを「ぼんやりとしか覚えていない」と言う。これまで、守に、父親について少しでも話してやりたいという気持ちがあったものの、里子にはどうしても話すことができなかった。言葉として表に出すまでには、相当な時間とエネルギーを要していたのだ。

時を重ねて迎えた十三回忌の節目に、守に、看護師からもらったこのメッセージカードを見せて、敏夫のことを話してみよう。ようやく、そう思えるようになった。

十一月の十三回忌の法要の後に、里子は、守にメッセージカードを見せながら、当時の出来事をボツリボツリと話した。実に、十二年の時を超えての記憶の再生だった。守にとっては、初めて耳にする話ばかりだった。当然のことながら、守自身が発した言葉も覚えてはいなかった。少し戸惑いながらも、守は里子の話に耳を傾けた。

「ええっ、親父が死んだとき、僕、新しい父ちゃん買っちゃるなんて、そんなこと言っちゃったの？全然覚えてないや。だけど、病院にお見舞いに行きたくなかったことだけは覚えてるよ」

「どうしてお見舞いに行きたくなかったの？」

「なんかさ、親父が、どんどん弱って、どんどん変わっていく姿を、見たくないっていう嫌な気持ちがあったことだけは、覚えてるんだよね」

「うん、分かった」

そう言って、守は早速、一枚のDVDを携えて、そのまま二階の自分の部屋へと上がっていった。守は、どんな顔をして、画面の中の父親と再会しているのだろう。

DVDに興味をわいた守は、二十四枚全てのDVDを見終えて、新年を迎えた。

里子は深く深呼吸をした。今まで胸につかえていたものが、一つだけ、とれたような気がした。

手術室の担当だったあのメッセージカードを書いてくれた看護師は、今、どうしているだろうか。



石垣麗子

いしがき れいこ

1973 宮城県生まれ
宮城学院女子大学学芸学部日文学科卒業
元宮城県公立学校教諭

「そうだったんだ。だからお見舞いに行きたがらなかったんだね。やっと分かったよ。それで、せっかく病室に連れて行っても、ギョッと目をつぶっていたんだね。ずいぶん辛い思いをさせたね」

「まあ、仕方ないよ。親父、病気と頑張って闘ったんだね」

「そうだね。色々な人に支えてもらって、前向きに闘ったんだよ。守が小学校に入学するまでは生きたいと言っていたんだよ。一日でも長く生きようとしてたんだよ」

「そうだったのか」

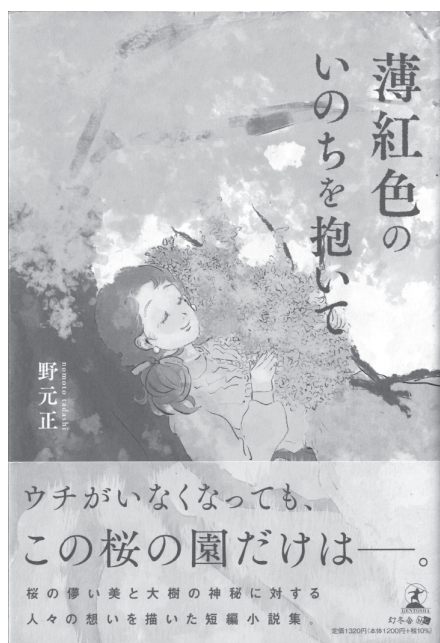
「父ちゃんが生きてた頃に撮ったビデオがあるけど、見てみる？父ちゃんが死んでからはビデオを撮るのは、すっかりやめちゃったけどね。守が四歳の時までのビデオはあるよ。全部DVDにしてあるから」

「へえ、そうなんだ。じゃあ、見てみようかな。でもなあ、なーんか怖い気もするな」

「なんで怖いのか？小さい頃の守は、すっごくかわいかったよ」

「それじゃ、今は、かわいくないわけ？てかさ、うーん、なんかさあ、親父がどんなふうだったか、見るのがちょっと怖いかな。あとは、小さい頃の自分を見るのも」

「記録映像と思って再生してみれば、きっと面白いと思うよ。電車で家族旅行をした時のことも、たくさん撮っているし。ここに置いておくから気が向いたら見てよ」



幻冬舎 1200 円(税別)

銀華文学賞 優秀賞 受賞の言葉 石垣麗子

この度は銀華文学賞優秀賞を頂きありがとうございます。通知を手にした瞬間、驚きでいっぱいでした。

三・一一東日本大震災発生から二〇二三年に十三回忌を迎え、二〇二四年十一月十七日には五千日が経過しました。本作は、震災下の敏夫と里子の物語を軸に当時の様子を写し出したものです。鎮魂と復興への祈りを込めて書きました。今後も自分のペースで創作活動に励みたいと思います。

クリスマスの御馳走

鈴木和子

九月に入り、穂先の紅い薄がたおやかに風になびく頃、
「次に病院に行くときは一緒にいった方がいいと思うよ」
夫が他人事のように言った。

「病気でも見つかったの？」

夫は眉尻をさげ、困り顔をした。

「さあ。これから検査するみたいだよ」

夫がこの夏の職場の定期健診で血便が出たのは知っている。しかし今回が初めてというわけではなく、五年前に小学校の教師を定年退職するまでも幾度か血便が出たことがあり、その都度大腸のポリープを取っていた。どれも良性だったから血便が出ても慌てない習慣ができていた。でもわざわざ言うのだから何かあるかもしれないと思い、次の通院にはついて行った。そして前立腺がんの疑いがあると

知らされたのだった。次々と渡される検査の書類に夫が署名しているのを見て、不吉な感じがした。

「十一月に検査結果をお知らせして、これからの治療を相談したいと思いますけれど、できましたら他のご家族の方もお呼びください」

看護師に言われた。厚木に住む私は名古屋にいる長男と仙台のいる次男に連絡をした。三十八歳の長男は独身で、三十六歳の次男は妻と息子一人、娘二人の五人家族である。面談の日にはどちらも仕事の都合をつけて来るとのことだった。

田圃のあぜ道に咲く赤い彼岸花を見て、綺麗というより悲しいと思ったのは、何かの前触れだったのだろうか。秋

た。

「9です。前立腺を六か所検査しましたが、どれにも見つかりました」

「手術をするのですか？」

「もう……。これからするのはホルモン療法、抗がん剤治療、放射線療法です」

息苦しさが増してきた。

「あとどれくらいですか？」

夫が重い口を開いた。

「二年くらいでしょうか。他の場所に比べると前立腺の癌は進行が遅いですから」

具体的な数字が心に刺さる。

「治療は早いほうがいいのですか？」

「はい」

「じゃあ、今日からお願いします」

私と担当医の抑揚のない声が静寂を深めた。

廊下に出ると私はトイレに駆け込んだ。涙が溢れ、震えが止まらなくなり、鼻水も出てきた。声を抑えて泣いた。

こういうことになるとは思ってもいなかった。涙を拭いて、診察室の前に戻ると夫がいなかった。

「お父さんは注射を打ちに行っているよ」

次男が言った。

「他の病院に行かなくてもよかったのかしら」と気になっ

ていたことを尋ねた。

「セカンドオピニオンか。だけど黒いところが多かったから仕方ないんじゃないかな」

次男が言った。

「お父さんは何と言っていたの？」と長男が聞いてきた。

「病院は変わらないとずっと言っている」

「なら、いいんじゃないの」

夫が処置室から出てきて、「さあ、帰るぞ」と私たちを促した。来たときと変わらない表情で会計に向かった。

行ききの車の運転は夫がしたが、帰りは次男がした。助手席に座っていた夫が、

「お袋だけには言わなくてくれ」と呟いた。仙台に住む姑は五十歳を迎える前に夫を亡くして女手一つで四人の子を育てたのだった。末っ子の夫は母親の苦勞を見てきただけに、悲しませるのが耐えられないようだった。

「でも、伯母さんに言ったらすぐに伝わるぞ」

次男が言った。姑と同じ町に住む義兄も義姉も夫によくしてくれていたので、本来ならば真つ先に伝えなければならぬ相手だった。

「仲がいいものね」

たとえ義姉が言わなくても姑に伝わってしまうだろう。

「ここだけの秘密ということにしたらいんじゃないか」

次の朝、息子たちが帰った。たった一日ですべての状況が変わったのを、夫も私も受け入れられないでいた。

「もう病院に行かない。行っても無駄だ」

夫は苛立ちを隠せないように言った。夫の気持ちが荒んできたのが伝わってきた。私は目を見開いたまま夫を見つめた。夫の余命宣告だけでも辛いのに、激高した夫の感情まで受け止められそうになかった。

「今までと同じようにして。それ以外はできそうもないの」頼むように言った。夫はハッとしたように私を見つめ返した。

「やっぱり今まで通り病院に行くよ。来年の三月までは仕事も続ける」

いつもの夫に戻ってくれた。

冬休みになると仙台から孫たちが遊びに来た。子供好きの夫は孫たちの誕生をなによりも喜んでいた。仕事を休んだことのない夫なのに、孫たちが生まれたときだけは早退したり休暇をとったりして病院に駆けつけ、とろけるような目で孫たちを見ていた。孫たちが来るたびにあちらこちらに連れて行ったり、玩具を買ってあげたり、遊びを教えたりしていた。癌になっていちばん悔しかったのは、成長する孫たちを見られなくなることらしかった。「俺の分まで頼んだぞ」と私に託した。

長男が提案した。私たちに異存はなかった。

「香奈には？」

次男が自分の妻のことを聞いた。

「いいんじゃないの。お嫁さんには」

話し合っているうちに四人の結束が固まっていくような気がした。帰る予定だった息子たちも離れがたそうにしていた。

「鰻を食べに行こうか」

重い空気を吹き飛ばすように夫が言った。

「おれ、今日は泊っていけるよ」

長男も快活に言った。

「仕事の都合がつけば僕も泊っていける」

次男は会社と仙台の家に電話をした。四人で鰻を食べに行くことに決まった。

鰻屋では全員が鰻重の竹を注文した。食べている間ずっと会話がなかった。茶を飲むとき、夫がズボンのポケットからハンカチを取り出して、脇に当てた。

「目やニが出るんだ」

言い訳をしたけれど、そうじゃないのが私たちにはわかっていった。

家に帰ってから一緒に過ごした。夫と私はテレビを観て、長男はゲームをして、次男は酒を飲んだ。誰も何も言わなかった。

その年もいつものように将棋をしたり、剣玉をしたり、人生ゲームをしたりして遊んだ。ホルモン治療を始めてからも夫の髪の毛はふさふさとしていて、肌にも張りがあったので、孫たちは病気に気が付かないようだった。

長男が結婚相手連れて来たのは、バレンタインデーの前日だった。翌日籍を入れた。父親に安心してもらいたかったようだ。

「しっかり家族を守るんだぞ」と夫は長男を励ました。

三月に入ってから検査でホルモン療法がきかなくなっていることがわかった。

「次にするのは抗がん剤治療ですが、初回の点滴の後には入院することになっています」

担当医に言われた。入院日は九日に決まったが、その日は私が秋田に行かなければならない日だった。私は四年前から遠距離介護に行っている。二年前に父が亡くなったので、今は足の悪い母の介護をしていた。夫は自分のことは気にしなくていいから、行ってきたさいと言った。そして入院当日なのに最寄り駅のアメックスまで車で送ってくれた。

「早く帰ってくるよ」と私に言った。

「ベッドに寝ているだけだから平気だよ。お義母さんによろしく言ってくれ。一週間くらいは入院していなければいけないから、帰りはバスに乗るんだよ」

「もちろん、わかってるわよ」

秋田での用事が終えて、三日後には東北新幹線に飛び乗った。小田急線で海老名を通ったあたりに夫からラインがあつて、〈駅まで迎えに行く〉と書いてあつた。短い時間なら帰つてもいいと病院で言われたそうだ。愛甲石田駅で夫の顔を見たときは元氣そうではあった。しかし退院してから、髪の毛が抜けたり、食欲がなくなったり、得体のしれない歯痛に悩まされたりして、抗がん剤の副作用が出てきた。この頃からコロナのことが話題に出るようになった。

その後、コロナの勢いはとどまることを知らず、神奈川県に緊急事態宣言が発令され、母の遠距離介護もあきらめなければならなくなった。秋田のケアマネージャーとの連絡を密にすることで、母の生活がまわるようにしてもらった。

厚木では夫の体調のいいときを見計らって一緒に買い物に出かけた。夫の用事を済ませることもあつたが、私の衣類を買ってくれることもあつた。

「あなたア、これはどう？」

試着室から顔だけ出して夫を呼んだ。それまでは自分の好みの服を買っていたが、今は夫を選んでくれる服が欲しかった。

りを焼いて食べた。私は気づかれないように夫の写真を幾枚も撮った。帰りの車窓から太陽が反射して細かにきらめく海が見えた。夫と海を見るのはこれが最後だろうと思つた。

九月の予約日に病院に行くとPSA*の数値が上がっていた。別の抗がん剤を打つことになり、夫はまた一週間ほど入院した。退院してから足腰に力が入らなくなり、車の運転ができなくなった。日常の生活も難しくなり、トイレに行くのも風呂に入るのも手伝いが必要となった。風呂上がりにソファァーに並んで座って、アイスマナカを食べながら泣いているのか笑っているのかわからない顔をして見つめ合つた。

「でも、あなたは幸せなのよ」

「なんで？」

「だって私がいるんだもの。私のときは誰もいないのよ」

夫はしばらくアイスマナカを食べていた。

「……俺はいつまでいるかわからないんだよ。俺が死んだら、どうするつもりなんだ？」

重たげに口を開いた。

「どうするって？」

「秋田に帰るのか？」

私は激しく頭を振った。

「それはちょっと。こっちの方がいいぞ」

夫の腕には深緑色のチェックの室内着と辛子色のブラウスがかけられている。

「試着してみるね」

「似合うぞ」

夫の言葉がうれしくて二着とも買った。

夫は通信販売も利用するようになった。コードレスの掃除機やなんでも汚れの落ちる雑巾、電動爪磨きセットや室内自転車など、気のついた物を注文した。品物が届くまでは秘密にしておいて喜ぶ私の顔を見るのが楽しみのようだった。中でもコードレスの掃除機は軽くて便利だったので、毎日掃除をしては夫を笑わせた。

夏休みもコロナの影響で孫たちが来られなかった。夫は残念そうだったが安堵したところもあるようだった。夫は自分の病状を誰にも言いたがらなかった。せめて学生時代の友達にだけはと言ったが、首を横に振った。電話が来ても元氣そうに話していた。しかし電話が終わると長い溜息をついた。

八月の私の誕生日にはバースデーケーキを買ってきてくれた。次の日には小田原までドライブに連れていってくれた。パーベキューの店で、帆立や鳥賊、海老、茸、おにぎ

「ずっと、ここにいるのよ」

「一人でも、か？」

「この家には思い出があるもの。この町は子供たちの故郷だもの。ここにいれば、あなたというような気持ちになれるでしょう？」

重要な内容なのに、たいしたことではないように喋り続けた。

「だったら、厚木で墓を探そうか？」

夫もさりとて言つてのけた。

「あなたの実家のお墓でなくてもいいの？」

「厚木なら名古屋からも仙台からも子供たちが墓参りに来られるだろう？」

家にも寄るから寂しくないだろうと言われた気がした。墓のことは気になっていたらけれど、話にくいことだったので、すっきりした気持ちになれた。夫と私は墓を探し始めた。木が鬱蒼と生えていて、山道を深く入って行く霊園に行った。

「こんな暗いところじゃ、怖くて一人で墓参りに行かれないわ」

数年前に開園された、陽のあたる丘にある霊園にも行った。

「ここならしょっちゅう墓参りに来られそう。周りに桜があるから綺麗でしょうね」

* PSA 前立腺特異抗原の略。前立腺の上皮細胞から分泌されるタンパク質で、癌細胞の数などの増加によって数値が高くなる。10ng / ml で転移が強く疑われる。

「ここにしよう」と夫が決めた。

「でも誰が建立したことにすればいいの？ 私の名前だけじゃ頼りない気がするけれど」

「息子たちの名前にすればいいさ。そこに俺たちの名前が刻まれたら、墓に家族の名前が残るだろう？」

素晴らしい考えだと思った。その後、誰が入っても、誰の名前が刻まれても、安らかな家庭みたいな墓ができるような気がした。

「あ、それから、仏壇を買ったら床の間に置いてくれよ」

夫は饒舌だった。

「こんなのがいいなあ」と新聞のチラシを見ながら指差した。扉を閉めるとボードのように見える、モダンな仏壇である。

「そうね。他の家具とも調和しそう」

「きみの遺影は二十年前のものにしてくれよ」

「どうして？」

夫は答えなかったけれどわかったような気がした。私があと二十年生きると仮定して、夫婦が親子に見えないようにと氣遣ってくれたのだろう。私はしんみりしてしまった。「あなたがいなくなったら、一人で生きていけるのかしら？」

「いなくならないよ。仏壇から見ているよ」

死後の話をしたのはそのときだけだった。

赤く咲いた彼岸花が枯れて、秋の深まりを感じる十月になったとき、

「体が痛くて、病院まで来るのが大変です」と夫は担当医に言った。

「じゃあ、入院しますか？」

「それも大変そうだ」

入院は取りやめになったが、そのときから医療麻薬が使われるようになった。

その一週間後、夫はひどく痛がった。仙台から来ていた次男が夫を負ぶってマンションの二階から駐車場まで運び、病院に連れて行った。夫の体の痛みを止めるにはどれくらいの麻薬が必要なのかを調べるために夫は入院することになった。

帰る車の中で次男に言われた。

「もうみんなに知らせた方がいいよ」

帰ってから、私は夫のきょうだいに電話をした。夫の病状を伝え、今まで知らせなかったことを謝った。急な知らせに驚きを隠せないようだったが、母親に知らせたくないという夫の気持ちを理解してくれ、怒る人はいなかった。責められても仕方がないと思っていた私は義兄や義姉の暖かい言葉が身に沁みた。

次の日、夫の腰の痛みを和らげるために放射線を照射した。紙おむつや蓄尿バッグが取り付けられ、夫は寝たきりになった。もう家に帰れないのではないかと心配したが、

「十日くらいすれば退院できるそうだよ」とけろりとした顔で夫は言った。

「うわァ、よかったァ」と私はしゃいだ声を出した。

緩和ケア病棟の個室に入院していたせいか、コロナ禍でも一日十五分の面会が許された。私は毎日病院に行つて食欲のない夫のために許可を得て弁当を届けたり三時のおやつと一緒に食べたりした。病院に行く前に夫からラインが届いて、欲しいものが書かれてあったので、カプリツォーネやケーキや果物などを持って行つた。私が帰ろうとする夫は引き留めるようになった。そして、結婚してから聞くことがなかった「ありがとう」という言葉を口にするようになった。しかし、不吉な時間が迫っているようで悲しくなり、「もう『ありがとう』と言わないで」と頼んでしまった。気持ちを察してくれたのか、夫は言わなくなった。

退院する数日前、主任看護師に尋ねられた。

「これから入院と在宅のどちらがいいですか」

「在宅です」と私は即座に答えた。

「家に戻って、夫婦で穏やかな時間を過ごせたらいいなと思っています」

主任看護師が頷いた。

「よかったですね。どんな様も在宅がいいとおっしゃっていただんですよ。お二人とも在宅が希望なら家に戻れます」

夫は目を細めて幾度も頷いた。

次の日、夫の病室に行こうとする私を主任看護師が呼び止めた。

「すこしお話をしてもよろしいですか？」

主任看護師の後をついてゆくと、待合室の椅子に座るよう促された。

「これから家に戻られても、今までと違う生活が待っています。もう歩くことができませんから、車椅子で移動することになります。一人でトイレすることもなくなり、一日中ベッドでの生活が待っています。ご本人は自分が情けなくなつて苛立つこともあり、奥様にきつい言葉を投げかけるときもあると思います。そんなとき、どうなさいますか？」

主任看護師が射るような眼差しで私に質問したので、一瞬たじろいだ。しかしどういう状態であっても夫の傍にいたいと思っていたので、気持ちがぶれることはなかった。

「逃げます」

主任看護師の頬が緩んだ。ふざけていると思われたかもしれないと心配になった。

「これで終わります」

主任看護師が言った。

それからは在宅の方向で話が進められた。夫の生活の仕方や医療麻薬の扱い方などの説明を聞いた。レンタルの車椅子や介護用ベッドも手配され、包括センターにも紹介された。私の頭の中は、これからの生活を心配するよりも、夫が帰ってくる喜びでいっぱいだった。

夫の退院の日も次男が来てくれた。介護タクシーの運転手も夫の世話をしてくれて、夫はリビングに置いたベッドに横たわることができた。

「やっぱり我が家が最高だ」

夫は満足そうに呟いた。

その日は義姉から荷物が届いていた。ワラビのお浸し、薩摩揚げやぜんまい、茸、人參、蒟蒻の煮物、ずんだ餅、白松がモナカ、蒲鉾など夫の好物が段ボールにぎっしり詰められていた。抗がん剤を打たなくなった夫は食欲も旺盛だった。義姉に電話をしたときも

「うまかった。久しぶりにワラビを食べた」と機嫌が良かった。夫の病状は姑にも伝わってしまったが、

「若いんだからきつと治るよ」と夫や私を励ましてくれた。夫は甘えるように「うん、うん」と返事をしていた。

次男は二晩泊って帰ることになった。夫は次男に、

「男は仕事だぞ。頑張れよ」と言った。次男は頷いて玄関

に向かった。靴を履きながら

「なにかあったら連絡して来いよ」と言った。

三日後に仕事の都合がついたと長男もやって来た。長男には夫が欲しがっているベランダに飾る花を買ってもらうことにした。長男は色とりどりのパンジーとビオラを買ってきた。殺風景だったベランダが一挙に華やかになり、夫はベッドのリモコンを操作して上半身を起こして、しばらく花を眺めていた。

「あ、そうだ。おまえにやつてもらいたいことがあったんだ」

長男に押入れから紙袋を持ってこさせた。

「中をとりだして、その続きをやってくれ。一人で完成させられそうもないんだ」

長男はベランダの椅子に、アクリル板、接着剤、紙やすり、定規、カッター、マットなどを置いた。夫は順番にすることを指示するだけで、何を作るのかは言わなかった。

「時間がたっぷりあるんだから、ゆっくりでいいぞ」

夫と長男は戯れるように急がなくてもかまわない時間を過ごした。

「お父さんが自分で切ろうとしたから、アクリル板の端がガタガタしていてやりにくいぞ」

長男が文句を言った。夫は高らかに笑った。長男は手先が器用だが夫はそうでもない。

「まったく作るよりも直す方に時間がかかるなんて、とてもない話だ」

苦情を言いながら、長男も父親との共同作業を面白がっているようだった。

「できたぞ！」

ガラスの箱のようなものが完成した。

「それ、何にするかわかるか？」

夫が長男に尋ねた。

「何かに蓋をするような感じだなあ。このサボテンを飾るのにちょうどいいぞ」

テレビ台に置かれたサボテンを指差した。

「近いぞ」

「わかった！」

長男はリビングボードに飾られた、自分の妻が「母の日」に私にプレゼントしたボックスフラワーに目をやった。紺色の箱に真紅の薔薇が敷き詰められているものである。加工しているので枯れはしないが、そのまま飾っていると埃を被るおそれがあった。薔薇の花に透明の蓋が被せられた。花は永遠の命を手に入れたように豪華さを増した。

「ピンポーン！」

夫は陽気な声を出した。長男は口笛を吹きながら、完成した作品を眺めていた。

寝たきりになった夫には新しい日課が必要となった。午前七時に医療麻薬を飲んで、一時間後に朝食をとり、食後に薬を飲んだ。食事のときは車椅子に乗って、ダイニングテーブルまで移動した。食べ終わると車椅子に乗ったままトイレに行って、先に入った私が蓄尿バッグを受け取って尿の始末をするのだった。夫は車椅子を半回転させて向きを変え、ベッドまで移動した。ベッドに横たわるときは私が夫の尻を持ち上げた。それから夫は十時におやつを食べ、昼食後に薬を飲み、三時におやつを食べて、夕食後に薬を飲んだ。毎週火曜日には理学療法士がリハビリに来てくれ、水曜日には訪問看護師が風呂の見守りに来てくれた。夫のベッドの傍にワゴンが置かれ、取りやすい位置にテレビやエアコン、照明、介護ベッドのリモコンが並べられていた。

「俺、なんでこんなところにいるんだ？」

不思議そうな顔をして夫が尋ねた。七か月前まで仕事をしていたので一日中ベッドで過ごす生活には慣れないようだった。しかし、そんな生活を繰り返すうちに夫は驚くほど穏やかな顔をするようになった。思わずひれ伏したくなるほどの神々しさがどこから来るのかわからなくて、目をはなすことができなくなった。夫は神の子ではないかと思った。

「ね、どうして私と結婚してくれたの？」

そんな質問をしてみたくなった。

「ボランティアみたいなものだ」

神の子は遠い目をして言った。

「俺がいなければ、生きていけそうにないと思ったんだ」

「あら、そう……私とおんなじね」

強がりを言いながらも、確かにそうだったのかもしれないと思った。

次に病院に行ったとき、担当医が遠慮気味に言った。

「ひとつだけやっていない治療があります。ホルモン療法ですが、それは副作用が強くて、体がだるくなったり、食欲不振になったりするものです。どうしますか？」

夫は縋りつくような目で私を見た。

（どうすればいい？ 決めてくれ）

そう言われている気がした。でも私は答えられなかった。……そんなに期待できない治療なら、やらなくてもいいです」

夫は大粒の涙を流した。彫りの深い目の窪みに水溜りのように涙が溜まった。

「今決まなくてもいいですよ。やろうと思えばいつでもできるんですから」

担当医がいたわるように言った。私は頭を下げることでしかなかった。

それでも家に帰ったときはいつもの夫婦に戻っていた。

少なくとも今は一緒にいられる……夫はリビングのベッドに寝ていて、私は夫の顔を間近に見ることができる……それだけで充分ではないか。

夫が余命宣告を受けてから、私は先のことを考えないようにならしていた。明日という言葉がなくても、過去を悔いる時間がなくても、一瞬一瞬流れてゆく時間に身を委ねて、穏やかな気持ちで暮らしていけたらいい。どうしようもなく悲しい気持ちになったら、その思いを心の奥底にある瓶に詰めて、しっかりと蓋をしてしまおう。

十一月に入ると夫はよく眠るようになった。音をたてないようにそっと歩いていると、パッと目を開いて、「眠っていないよ」と言つてにっこり笑うのだった。

「あら、寝ていたわよ。軒をかいていたもの」

「そんなことないよ」

夫はまだちゃんと生きているよと伝えたいらしかった。私はそんなの当たり前じゃないという素振りをしてみたかった。

夫の変化に最初に気づいたのは理学療法士だった。血中酸素濃度が下がったのだった。

「具合は悪くないですか？」

理学療法士が夫に尋ねた。

「なんにも」

「苦しくないですか」

「大丈夫です」

「でも、数値が九〇もないのですよ」

理学療法士は訪問看護師にも伝えますと言つて帰って行った。私は夫にほんとうに具合が悪くないのかどうか聞いてみた。夫は、

「具合が悪いなんて言ったら、家にいられなくなるだろう」と言った。私は頷いた。在宅介護を決めたときから看取る覚悟はできていた。どういうふうであれ、夫の希望通りでかまわないと思つていた。それでも夫は今の状況が信じられないらしくて、

「俺、なんで歩けないのだろう？」と聞いてきた。

「歩けば歩けるでしょうけれど、痛くなるからじゃないの」

「違うよ。骨折するからだよ」

「だけど車椅子なら動いてもいいのよね」

「そうだな。車椅子なら、いいんだよな」

夫は車椅子に乗って家中を見て回った。

「あ、印刷機を処分するのを忘れちゃったな。写真も片付けないさやいけなかった。そういえば、あのストープもいらなかったんだな」

「なんでも処分されたら寂しくなるでしょう」

気持ちちはわかるのだが、されたら困るのだった。

十一月末に長男が来た。夫は「カラコンエも欲しいぞ」と言つて甘えた。

長男はカラコンエを探しに出かけたが季節外れの花を探すのは難しかったようだ。

「やっと、これだけ見つけてきたよ」

赤と黄色のカラコンエの鉢を両腕に抱えて戻ってきた。

「おう、あったか。ペランダに置いてくれ」

長男がカラコンエを置くと、レインボーカラーのパンジーやビオラの華やかさに重み加わって、ささやかな庭園になった。

「カラコンエの鉢の下に置く皿を探してきて」と夫が言った。私は園芸用の棚を探したが、サイズの合うものを見つけれなかった。

「小さな皿しかないわよ」

家の中から夫のひそひそ声が聞こえた。

「俺はおかあさんを信用していないんだ」

私の心は一瞬で冷えた。

「どうしてそんなことを言うのよ」

大きな声を出した。

「そんなことを言われたら、介護する力が湧いてこなくなるでしょ？ どうするのよ」

聞き流したほうがいいと思つたのに胸に刺さった言葉が

痛すぎて言わずにはいられなかった。闘病生活に入ってから私を支えていたのは夫を想う気持ちだけだった。夫も同じだと思っていたのに、そんな目で私を見ていたのだと思うと悔しくてたまらなかった。

「よく耳が聞こえるんだね」

長男が皮肉った口調で言った。

「そんなことじゃないわ」

たまに来るアンタにわかるはずじゃないの、と言いつ返しとなった。

「おかあさんはそんなに強くないんだよ。おまえがやりなさいと言いたかっただけなんだ」

夫の思いがけない言葉にぎょっとした。私が夜、眠れなくて睡眠導入剤を飲んでいることも、落ち込んだときに自分の部屋に行ってチョコレートや饅頭を食べていることも知っていたのだろうか。真の姿を見られているようでいたたまれなくなった。夫に自分が私に迷惑をかけているなんて思われなくなかった。その日から私は夫に笑って話しかけることができなくなった。

ある日、鏡に映った無表情な自分の顔が夫とそっくりなのに気がついた。夫も寂しがつているのに違うと思う。その日の午後、下の世話をしているときに夫が小さなおならをした。

「ブファ、ファ、ファ」

私が吹き出した。応えるように夫がまた小さなおならをした。

「ブファ、ファ、ファ」

夫のおならの音と私の笑い声が交互になり、それまでのこだわりが吹き飛んだ。新婚の頃、夫は煙草の煙で小さなドーナツを作ってくれたものだった。右手の人差し指で小刻みに頬を押すと、いくつものドーナツ型の煙が出た。まるでボンボン船みたいだった。夫の咄嗟のユーモアはいつでも私を笑わせてくれる。笑いながら夫の汚物を片付けて、やっぱり夫が好きなんだと思った。夫の下の世話ができることが幸せだった。

小春日和の、うららかな日差しがベッドにあたっているとき、窓を開けるように夫から頼まれた。レースのカーテンを引いて、ガラス戸を開け、外気を家に入れた。ベランダのパンジーやビオラ、カランコエが輝いていた。

「綺麗……」

うつとりしたように私が言った。

「ああ」

ため息をつくように夫も言った。

「ねえ、こうやって足にもお日様をあてましょうよ。足湯に入っているみたいでしょ？」

布団をめくって、夫の足を日向に置いた。

「寒い？」

「気持ちいいよ」

太陽が光の演奏をしているように、電線の影がちらちらと壁に揺れた。私たちはどちらからともなく微笑みあった。

十二月に入ると、夫の容態が急に悪くなった。食欲がなくなり、おかゆを作ることが多くなった。理学療法士はほとんど下がつてゆく血中酸素濃度に首を傾げた。

「苦しくないですか？」

夫は首を横に振った。事態を飲みこめない私に理学療法士が説明した。

「健康な方でしたら九十七くらいあるんです。今は八〇より下がつていますから苦しくないはずはないのですけど」
玄関に見送りに行くと理学療法士が、

「気を付けてください。奥さんも体を大切にしてくださいよ」と言った。私を見る目があまりにも真剣だったので夫は危ないのだと悟った。ベッドに戻ると夫が悲しそうに言った。

「体の中を癌が拡がつてゆくんだ。もう自分の体が自分の体じゃないみたいだ」

私は痩せて小さくなった夫の体を抱きしめて、背中を撫で続けた。

「大丈夫よ。大丈夫……大丈夫……」

あまりの辛さに夫が自ら逝ってしまうのではないかと心配になった。

体調のいいときを見計らって夫が年賀状を書き始めた。

「何と書けばいいんだ？」と聞いてきた。

「皆さまのご健康とご多幸をお祈りしますとか心にあることを書けばいいんじゃないの」

「……そうだな」

胡坐をかいて背中を丸めて年賀状を書く夫の姿は現役の頃に通信簿を書いていた様子と重なった。写真をラインで息子たちに送った。

「仕事をしているときは元気そうだね」

長男から返事が届いた。その日の夕方、次男から電話があった。

「お父さん、うちの子たちにラインで勉強を教えてくださいなにか」

夫に伝えると、

「おう、いいぞ。本読みを聞くくらいならできるかもしれない」と澁淵とした声で言った。

夫は小学四年生と小学二年生の孫の勉強を教えることになった。ラインで国語の本読みを聞いて、算数のプリントを送らせて採点した。間違えたところを根気よく教えて、

できると褒めた。他の時間は眠っているのに孫との勉強時間だけは目を覚ました。

「まだかな。もう三時だぞ」

「きつと学校から帰ったばかりでしょう」

「あ、来たな。ようし」

連絡が入るとリモート学習が始まる。幼稚園の孫がいるときは、じゃんけんをしたり歌を聞いたりした。上の孫たちも加わって、賑やかな時間を過ごすこともあった。

「おじいちゃんと遊んでくれてありがとう」

夫は孫たちに礼を言った。次男は父親に感謝のラインを送り、夫は次男に孫たちの様子を伝えた。厚木と仙台、距離は離れていても、心は繋がっていた。

二学期の終業式の日、リモート学習の後に夫は孫たちを画面の前に並べさせた。

「よく頑張りました。これからもこの調子で頑張ってください。ご褒美に今度来たときにいいものをあげます。楽しみにしてくださいね」

現役時代の話し方で二学期の終わりを告げた。孫たちは「はい」と手を挙げた。冬休みに孫たちが厚木に来るのは二十八日ということだった。

「ご褒美に何をあげようかな」

夫はその日を楽しみにしていた。

次の朝、「腹がおかしい」と夫が言った。

「今朝は昨日残したケーキだけでいいよ」

小振りのケーキを四等分にして夫に渡した。夫は水で流し込むようにケーキを食べた。その日の昼は卵雑炊にした。夜、フィギュアスケートの全日本大会を見ているときに夫が「痛つ」と呻いた。痛み止めの薬や医療麻薬を飲んでも、夫の痛みがおさまらなかつた。そのうち声を出さなくなり、ベッドの手すりにしがみついた。私は慌てて二十四時間体制の訪問看護師への電話をした。所長が出て夫の様子を聞いてくれた。言われるまま夫の体を調べて「足に紫色の斑点があります」と言うと、「すぐ救急車を呼んでください。私も駆け付けますから。病院にも連絡してください」と所長は冷静に指示を出した。

闇をつんざくようなサイレンの音が鳴り響いて、赤く点滅した救急車がマンションに近づいた。外に出て、救急隊員を家に案内した。夫は担架で救急車に運ばれた。救急隊員が名前や生年月日を尋ねると、夫は苦しそうに答えた。かかりつけの病院の救急センターに着くと、病院の人が駆けてきた。

「先ほど電話をくれた人ですね。宿直の先生に診てもらいますから廊下でお待ちください」

私は廊下の椅子に座った。照明が抑えられた廊下は人の気配もなく、違う世界のようなようだった。頭の中は不思議な

クリスマスが近づくとリビングにクリスマスツリーを飾った。イルミネーションが部屋全体を明るくし、気持ちを浮き立たせてくれた。二十四日の朝、

「どれを食べる？」

新聞のチラシを夫に見せた。

「これとこれとこれ」

夫はローストチキンと手巻き寿司とシャンパン、ホール状の苺ケーキを指差した。

「買ってくるわ」

夜、テーブルの上に御馳走を並べた。ケーキにろうそくを立てて、照明を消した。

「メリークリスマス！」

私がろうそくの火を吹き消した。照明をつけて、シャンパンをあけて、グラスに注いだ。

夫はゆっくりとシャンパンを飲み、ローストチキンにかぶりついた。手巻き寿司を口に含んで、またシャンパンを飲んだ。

「ケーキは明日食べるよ」

そう言って、ベッドの方に顔を向けた。私は車椅子を押してベッドに連れて行った。

その夜は幾度夫に礼を言っただろう。

特別な夜をありがとう……クリスマスを一緒に過ごしてくれてありがとう……生きていてくれてありがとう……

ほどびえていた。北海道に住んでいた子供の頃、朝起きると窓の外が激しく吹雪いているのが見えた。外に出るのは無理だと最初からわかっていたからだ眺めているだけだった。過酷な自然を受け入れるしかない生活をしてきたせいか、今でも災難に出会うと心がしんとして奇妙なほど冷静になってしまう。このときも待つしかない時間を過ごした。

「ご家族の方、中にお入りください。先生からお話があります」

看護師が呼びに来た。

「今処置をしましたが朝までもつかどうかわかりません。人工呼吸器をつけますか？」

宿直の医師に尋ねられた。

「私ひとりじゃ判断できません。家族と相談してもいいですか？」

「いいですよ」

いったん廊下に出て、長男と次男に電話をかけた。夜中の十二時を過ぎていたせいか、幾度電話をしても二人とも出なかつた。あきらめて、それぞれの嫁にも電話をかけた。彼女たちも出なかつた。電話をかけ続けると、やっと長男の妻が出た。長男に事情を話すと、

「……わからない」と呟いた。夫は延命治療をしないでくれと言っていたのでそのことも話したが、返事は戻ってこ

なかった。次男からも電話があったので話したが、次男も答えることができなかった。今度は長男から電話がかかってきた。

「人工呼吸器をつけてもらおう」

決意したように言った。次男に伝えると、「それがいい」と同意した。意識が戻らなくても寝たままになっても夫に生きていてほしいという気持ちで一致した。

「人工呼吸器をつけてください」

宿直の医師に伝えると驚いたような顔をされた。

「末期の患者に人工呼吸器をつけてくださいと言われたのは初めてですよ。しかし、今はその体力も残っていないと思います」

あとは医師に任せるしかなかった。また薄暗い廊下で待ち続けた。

「ご家族の方、中にお入りください」

看護師に呼ばれて夫のいる処置室に入った。

「前よりひどくなったように見えますけれど」

夫はずいぶん衰弱していた。

「これでもずっと落ち着いたのですよ」

看護師が答えた。私は夫が元気になる言葉を言いたくなかった。

「おうちに帰ろう」

夫の体がピクンと動いた。

「おうちに帰って具合が悪くなったらまた病院に来て、治ったらまたおうちに帰ろう。何度も同じことを繰り返そうよ」

苦しうだった夫の顔から険がとれ、穏やかな顔になった。看護師が

「今日は入院してもらいます」と言った。ベッドごと別の病棟に移動した。

「ここで手続きをしてください。もし何かあったら連絡しますので家で待機してください」

受付で夫と別れなければならなかった。

「夫は家に帰ることができるのですか？」

「容態次第で……」

看護師の言葉は私に希望をもたせた。薄暗い廊下を歩いて、エレベーターに乗って、一階におりた。タクシーを呼んで病院から出ると、冷たい風が吹いていた。辺りは暗闇に覆われていて、病院の窓だけ明かりを放っていた。空と建物の見分けがつかないほど暗い深夜にひとりで病院の前に佇んでいるのが信じられなかった。ようやく来たタクシーに乗って、体だけ運ばれるようにマンションに着いた。玄関の鍵を開けてリビングに入ると、介護ベッドの上は夫が担架で運ばれたときのままタオルケットと掛布団が丸められていた。

《今、家に着いたよ》

息子たちにラインを送った。

《朝まで起きている。いつでも電話して》

二人から同じ返事が届いた。眠ったのか眠らなかったのかわからない時間が過ぎていき、七時頃に電話の音で目を覚ました。

「容態が急変しました。病院に来てください」

看護師の緊迫した声が聞こえた。息子たちに連絡をして、タクシーに乗って病院に駆け付けた。昨夜と違う看護師が出て来て、

「先生のお話が先にありますから、どうぞこちらに来てください。他にご家族の方は？」

「今、病院に向かっています」

「では、奥様だけこちらに」

会議室みたいな広い部屋に通された。片隅の、パソコンが置かれた机のところに担当医がいた。担当医は軽く頭を下げた。

「朝に連絡が入りました。腹部が詰まって便を出し切れないうです。手術をすれば取れるでしょうが、癌が拡がっていて手術に耐えられそうもない状態です。どうしますか？ 成功しても、一、二週間のことだと思いますが」

「先生にお任せします」

もう私には判断する力が残っていなかった。担当医はパソコンから目を離して、私をじっと見つめた。



第3回まほろば賞特別賞受賞

この小説の深い刻印は、低い位置からの生きる力を感じさせると同時に、命へ向けるいとおしみの神々しさをも放っている。それは病と運命と闘い続け、それを克服した者の光輝でもある。文学としての強い生命力を持ち、永く世に残る作品と信じる。

「文芸思潮」五十嵐勉

アジア文化社

アジア文化社
1600円

かなな生活を送れたのは私のほうで、幸せだったのも私のほうだったのです。

そう言いたかったけれど医師の言葉が私への労りだとわかっていたので領いた。

「今、コロナが流行っていますから、普通の病室だとご家族を通すことができません。奥様も入れるように勝手に特別室をとらせていただきましたけれど、よろしかったですか？」

「有難うございます」

担当医に深く頭を下げた。看護師に案内されて、廊下の反対側にある個室に入った。新しい、小奇麗な病室で、夫は酸素マスクをつけて目を閉じていた。

「あなた」

呼びかけたが反応はなかった。看護師が「声をかけてあげてください。人間の体で最後に残るのは聴覚と言われています。ずっと話しかけてあげてください」と言った。私は夫の右手を両手で包んで、命を吹き込むようにさすり続けて、話しかけた。

「ねえ、あなた、楽しかったわね。毎日が楽しくて、幸せだった。子供たちも孫たちもみんなあなたが大好きであなたも家族を大切にしてくれたわよね」

夫は身じろぎもせず目を瞑っている。

「お嫁さんたちもよくしてくれたわね。あなたのおかあさ

んもおねえさんもおにいさんもよくしてくれたわね」

そこまで喋って、私は自分の言葉がぜんぶ過去形になっていることに気がついた。今までこんな言い方をしたことはなかった。これではもうすぐ死が待っていると夫に知らせるようなものではないか。喋るのが怖くなってきた。「もっと話し続けてください。本人が聞いていますから」看護師が叱るように言った。私は再び心に湧く言葉を話し続けた。

「ねえ、あなた。あなたのおかあさんもおねえさんもおにいさんもいい人ばかりだわね」

夫が領いた。

「私は自分の親の面倒をみなければならなかったから飛び込んではいけなかったけれど、ほんとうにいい人たちばかりだと思っているのよ。ごめんなさいね」

夫はもう一度強く首を縦に振った。

「私はあなたと結婚ができて、ほんとうによかったと思っているの。まるで縁側で日向ぼっこをしているみたいに暖かでのんびりとしていて安心だった」

また喋ることが見つからなくなってしまった。ふと私はいつも心にありながら、夫に伝えていなかったことを思い出した。

「あなたが先に逝っても、私が今の生活を続けて片付け物をしていたら時間はあつという間に過ぎて、いつかあなた

銀華文学賞 優秀賞 受賞の言葉 鈴木和子

このたびは優秀賞に選んでいただき、ありがとうございます。ました。大変光栄に思います。

小説を書き始めてから二十年以上が過ぎます。今までは小説と日記の区別をつけることが難しい状態でした。介護を経験して人間の素晴らしさに気づき、それまで私は自分ばかりを見つめていたのだと反省しました。

受賞を励みに、これからも書き続けていきたいと思っています。



すずき かずこ

鈴木和子

- 1954 北海道にて生まれる
- 76 秋田大学教育学部卒業
秋田いすゞに勤める
- 78 結婚のため、神奈川県に移住
- 2000 小説講座を受講する
以後11年受講を続ける
- 23 第16回銀華文学賞佳作

夫が人生の花道を歩いてゆく姿が見える。

「今、お着替えの用意をしますね」

再び病室の中に誰もいなくなつた。私はバッグの中からガーゼのハンカチを取り出して、蛇口をひねり、水で湿らせて、夫の唇にあてた。

「ありがとう、あなた……」

